

# 中妻遺跡

(第9・10・11・12・17地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXIII

2016

白岡市教育委員会

白岡市埋蔵文化財調査報告書第25集

# 中妻遺跡

(第9・10・11・12・17地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXIII

2016

白岡市教育委員会





第1号鍛冶工房跡完掘状況



第1号鍛冶工房跡床面遺物出土状況

卷頭図版2



第1号鍛冶工房跡出土羽口



第1号鍛冶工房跡出土鉄滓



第1号鍛冶工房跡出土鍛造剥片



第1号鍛冶工房跡出土粒状滓

## 序

このたび白岡市教育委員会では、『中妻遺跡（第9・10・11・12・17地点）』の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、平成以降住宅やマンション建設が相次いできました。平成24年10月には、目覚ましい人口増加を背景に市制が施行されました。一方で郊外ではまだ緑豊かな田園風景が広がっています。

中妻遺跡は、これまで多数の発掘調査が行われ、数多くの調査成果が上げられてきましたが、特に今回報告致します第10地点では、今から1,300～1,000年前の奈良・平安時代の集落跡の調査において重要な成果を得ることができました。集落跡の一角において発見された鍛冶工房跡は、白岡市域における古代の鉄作りの痕跡を示す貴重な事例であります。古代の白岡市域において、鉄はどのような形で、どこからもたらされていたのか。まだまだ明らかにされていない部分が多いのですが、今回の調査成果によって、白岡の古代史像を描き出す新たな資料が加えられたことを喜ばしく思います。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。当報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護のご理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成に当たり、地権者や事業主様、地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

白岡市教育委員会  
教育長 長島 秀夫

## 例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する中妻遺跡（第9・10・11・12・17地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点所在地は以下のとおりである。  
中妻遺跡（第9地点）：白岡市篠津1816-38、1817-4  
中妻遺跡（第10地点）：白岡市篠津1789-1  
中妻遺跡（第11地点）：白岡市篠津1816-2、1817-5  
中妻遺跡（第12地点）：白岡市篠津1792-10  
中妻遺跡（第17地点）：白岡市篠津1792-11
- 3 発掘調査は、白岡市教育委員会と白岡市遺跡調査会が主体となって実施した。中妻遺跡第10地点の調査費用は遠藤 茂富氏が負担した。それ以外の調査費用および整理作業費用は白岡市教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、以下のとおりである。  
中妻遺跡（第9地点）：平成24年10月1日から平成24年10月12日（国庫補助事業）  
中妻遺跡（第10地点）：平成26年4月21日から平成26年6月24日  
中妻遺跡（第11地点）：平成26年10月24日  
中妻遺跡（第12地点）：平成27年4月13日から平成27年4月27日（国庫補助事業）  
中妻遺跡（第17地点）：平成27年7月22日から平成27年7月31日
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。  
中妻遺跡（第9地点）：平成25年1月18日付け教生文第5-1200号（指示）  
平成24年9月24日付け生学第261号（通知）  
中妻遺跡（第10地点）：平成26年4月30日付け教生文第5-1826号（指示）  
平成26年5月30日付け教生文第2-12号（通知）  
中妻遺跡（第11地点）：平成26年10月15日付け教生文第5-995号（指示）  
平成26年10月17日付け生学第269号（通知）  
中妻遺跡（第12地点）：平成27年3月31日付け教生文第5-1872号（指示）  
平成27年4月2日付け生学第10号（通知）  
中妻遺跡（第17地点）：平成27年7月16日付け教生文第5-420号（指示）  
平成27年7月16日付け生学第252号（通知）
- 6 発掘調査は、杉山 和徳が担当した。  
整理作業及び報告書作成作業は、杉山と奥野 麦生が担当した。
- 7 遺物の実測は、杉山と奥野が担当し、青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下のとおりである。  
IVの1：パリノ・サーヴェイ株式会社  
IVの2：日鉄住金テクノロジー株式会社  
それ以外：杉山

9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である塚本 慶様、遠藤 茂富様、今西 武司様、今井 亮様、桜井 繁様の御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。

赤熊 浩一、池尻 篤、石川 正美、植木 雅博、岡田 勇介、鬼塚 知典、河井 伸一、小宮 雪晴、篠田 泰輔、鈴木 敏昭、鈴木 敏則、関 絵美、田中 和之、田中 祐樹、油布 憲昭、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県教育委員会生涯学習文化財課、白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）。

10 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々の参加協力を得た。

青木 美代子、折原 奈美子、桂 都、興野 明夫、黒田 雅之、坂田 玲子、下田 富士子、菅原 春男、高橋 安代、田中 玉緒、鳥海 恵子、中山 敏夫、藤巻 良雄、星 和枝、槇島 武二、増田 香織、水澤 和子、森本 美代子、山田 登、渡邊 宏士朗、渡辺 英子（50音順、敬称略）。

11 調査組織は以下のとおりである。

調査組織（平成27年度）

調査主体者 白岡市教育委員会

事務局 教 育 長 長 島 秀 夫

教 育 部 長 高 澤 利 光

生 涯 学 習 課 長 齋 藤 久

生 涯 学 習 課 長 補 佐 黒 須 靖 之

学 習 支 援 担 当 / 文 化 振 興 担 当 主 査 奥 野 麦 生（調査担当） 同主事 杉 山 和 徳（調査担当）



## 凡 例

- 1 本書で用いる方位は国土座標の方位で、標高は海拔を表す。
- 2 使用した基準点と遺跡原点（日本測地系平面直角座標第9系）は以下のとおりである。  
X = 2,696.077 m、Y = -15,749.271 m（4B コウ403）  
X = 2,760.000 m、Y = -15,774.000 m（遺跡原点）  
巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 3 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。  
遺構：1/60 遺物：土器拓影図・石器実測図1/3、土器実測図1/3、1/4、鉄器実測図1/2
- 4 挿図と表中の略号は以下のとおりである。  
H：住居跡 SK：土坑 SD：溝跡 SE：井戸跡 P：ピット
- 5 住居跡の号数は、中妻遺跡既報告地点（岡田勇介編2012『中妻遺跡（第2・4・8地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第21集 白岡町教育委員会）からの連番とし、本報告書では第7号から付した。
- 6 住居跡内の数値は、検出面から底面までのピットの深度を表し、単位はcmである。
- 7 第1号鍛冶工房跡は、鍛冶炉や廃滓坑といった鍛冶関連施設を伴い、鉄滓や羽口などの出土遺物の分析から精錬作業を伴う鉄の生産遺構としての側面が強いことが判明した。このことから住居跡とは区別し「鍛冶工房跡」と呼称した。
- 8 遺構の計測表・遺物の観察表において残存値には（ ）を付して表記した。
- 9 遺物の観察表において推定値・復元値には〔 〕を付して表記した。
- 10 遺物観察表内の残存は残存率を指し、残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。
- 11 遺物の観察表内の胎土については、以下の略号を用いる。  
角閃石：角 白色針状物質：針 白色粒子：白 黒色粒子：黒 赤色粒子：赤
- 12 実測図中の断面の黒塗りは須恵器を表し、断面の●は繊維土器を表した。重ね焼き痕、火樨、光沢は一点鎖線で表し、釉薬の塗布や自然釉は二点鎖線で表した。
- 13 赤彩が施された土器については、その範囲にトーンを掛けて示した。
- 14 須恵器のヘラケズリの範囲は枠線で示した。
- 15 鉄関連遺物の名称は、穴澤義功2005「鉄関連遺物の発掘調査から遺物整理・分析評価抽出への指針案」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』社団法人日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部による。
- 16 磁着度はリング状フェライト磁石（30×17×5mm）を用いて、資料の磁着反応を1から順に数字で評価したもので、数値が大きいほど着磁性が強いことを意味する。磁石を用い、35cmの高さから木綿糸で吊り下げた状態で使用する。資料を順次接近させることにより磁石が動き始める距離単位（6mmを1単位とする）を評価台紙上で読み取り、数値化された遺物の評価をする方法である。磁着度0は非磁着を表す。

# 目 次

卷頭図版	(3) 土坑	57
序	(4) 井戸跡	68
例言	(5) 地下式坑	69
凡例	(6) ピット	71
目次	(7) グリッド出土遺物	81
	3 第12・17地点の遺構と遺物	82
I 調査の概要	(1) 溝跡	82
1 調査に至る経緯	(2) ピット	82
2 調査の経過	(3) 調査区出土遺物	84
II 位置と環境	IV 自然科学分析	85
1 遺跡の立地と地理的環境	1 中妻遺跡(第10地点)出土炭化材の 放射性炭素年代測定	85
2 歴史的環境	2 中妻遺跡(第10地点)出土鉄滓分析	88
III 調査の成果	V 考 察	95
1 第9・11地点の遺構と遺物	1 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓について	95
(1) 溝跡	2 中妻遺跡の鉄生産について	97
(2) ピット	3 総括	98
(3) 調査区出土遺物		
2 第10地点の遺構と遺物	写真図版	
(1) 住居跡	報告書抄録	
(2) 鍛冶工房跡		

# 挿 図 目 次

第1図 中妻遺跡と周辺の遺跡分布図	4	第10図 第8・9号住居跡(1)	16
第2図 中妻遺跡の位置と発掘調査区	5	第11図 第8・9号住居跡(2)	17
第3図 第9・11地点全測図及び遺構図	7	第12図 第10号住居跡	18
第4図 第9・11地点ピット配置図	8	第13図 第8~10号住居跡出土遺物	19
第5図 第9・11地点出土遺物	8	第14図 第11号住居跡	20
第6図 第10地点全測図	10	第15図 第11号住居跡カマド	21
第7図 第7号住居跡	12	第16図 第11号住居跡遺物分布図	21
第8図 第7号住居跡カマド	13	第17図 第12号住居跡	22
第9図 第7号住居跡出土遺物	14	第18図 第12号住居跡カマド	23

第19図	第11・12号住居跡出土遺物	24	第50図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (6)	50
第20図	第13号住居跡	25	第51図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (7)	51
第21図	第13号住居跡カマド	25	第52図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (8)	52
第22図	第14号住居跡	26	第53図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (9)	53
第23図	第14号住居跡カマド	27	第54図	第1～10号土坑	58
第24図	第14号住居跡遺物分布図	27	第55図	第11～24・39号土坑	61
第25図	第13・14号住居跡出土遺物	28	第56図	第25～37号土坑	64
第26図	第15号住居跡	29	第57図	第38・40～44号土坑	65
第27図	第15号住居跡カマド	30	第58図	土坑出土遺物 (1)	66
第28図	第15号住居跡遺物分布図	30	第59図	土坑出土遺物 (2)	67
第29図	第15号住居跡出土遺物	31	第60図	第1号井戸跡	69
第30図	第16A号住居跡	33	第61図	第1号井戸跡出土遺物	69
第31図	第16A号住居跡カマド	33	第62図	第1～4号地下式坑	70
第32図	第16B号住居跡	34	第63図	地下式坑出土遺物	71
第33図	第16B号住居跡カマド	34	第64図	第10地点ピット配置図	72
第34図	第16号住居跡遺物分布図	35	第65図	グリッドピット出土遺物	79
第35図	第16号住居跡出土遺物	36	第66図	グリッド出土遺物	80
第36図	第17号住居跡	37	第67図	第12・17地点全測図及び遺構図	82
第37図	第17号住居跡カマド	38	第68図	第12・17地点ピット配置図	83
第38図	第17号住居跡遺物分布図	38	第69図	第12・17地点出土遺物	83
第39図	第17号住居跡出土遺物	39	第70図	暦年較正結果 (1 $\sigma$ )	87
第40図	第1号鍛冶工房跡	41	第71図	試料No.1 (椀形鍛冶滓) の概観と 断面組織	91
第41図	第1号鍛冶工房跡カマド	42	第72図	試料No.2 (流動滓) の概観と断面 組織	92
第42図	第1号鍛冶工房跡炉	42	第73図	試料No.1 (椀形鍛冶滓) のEPMA 分析結果 (1)	93
第43図	第1号鍛冶工房跡遺物分布図	43	第74図	試料No.1 (椀形鍛冶滓) のEPMA 分析結果 (2)	94
第44図	第1号鍛冶工房跡貝層	44	第75図	第1号鍛冶工房跡鉄滓出土位置 区割り図	96
第45図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (1)	45			
第46図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (2)	46			
第47図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (3)	47			
第48図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (4)	48			
第49図	第1号鍛冶工房跡出土遺物 (5)	49			

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	5	第4表	第7号住居跡出土遺物観察表	13
第2表	第9・11地点出土遺物観察表	6	第5表	第8号住居跡出土遺物観察表	17
第3表	第9・11地点ピット計測表	9	第6表	第9号住居跡出土遺物観察表	17

第7表	第10号住居跡出土遺物観察表	19	第20表	第10地点ピット計測表	74
第8表	第11号住居跡出土遺物観察表	23	第21表	グリッドピット出土遺物観察表	79
第9表	第12号住居跡出土遺物観察表	23	第22表	グリッド出土遺物観察表	81
第10表	第13号住居跡出土遺物観察表	28	第23表	第12・17地点ピット計測表	84
第11表	第14号住居跡出土遺物観察表	28	第24表	第12・17地点出土遺物観察表	84
第12表	第15号住居跡出土遺物観察表	32	第25表	放射性炭素年代測定及び 暦年較正結果	87
第13表	第16号住居跡出土遺物観察表	37	第26表	出土鉄滓の大きさ	89
第14表	第17号住居跡出土遺物観察表	39	第27表	各鉱物層の検出元素濃度(重量%)	89
第15表	第1号鍛冶工房跡出土具類組成表	44	第28表	第1号鍛冶工房跡出土鍛冶関連遺物 重量表	96
第16表	第1号鍛冶工房跡出土遺物観察表	54	第29表	第1号鍛冶工房跡出土鉄滓重量表	97
第17表	土坑出土遺物観察表	68			
第18表	第1号井戸跡出土遺物観察表	69			
第19表	地下式坑出土遺物観察表	71			

## 写真図版目次

巻頭図版1	第1号鍛冶工房跡完掘状況 第1号鍛冶工房跡床面遺物出土状況	図版6	第11号住居跡遺物出土状況 第12号住居跡
巻頭図版2	第1号鍛冶工房跡出土羽口 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓 第1号鍛冶工房跡出土鍛造剥片 第1号鍛冶工房跡出土粒状滓	図版7	第13号住居跡 第14号住居跡 第14号住居跡カマド
図版1	掘削作業状況(1) 掘削作業状況(2) 実測作業状況 第1号溝跡完掘後の様子	図版8	第14号住居跡遺物出土状況 第15号住居跡 第15号住居跡カマド
図版2	第9地点調査区全景 第11地点調査区全景 第9・11地点出土遺物	図版9	第15号住居跡カマド断ち割り 第15号住居跡遺物出土状況(1) 第15号住居跡遺物出土状況(2)
図版3	第10地点調査区北半部全景 第10地点調査区南半部全景	図版10	第16号住居跡 第16A号住居跡カマド 第16B号住居跡カマド
図版4	第7号住居跡 第7号住居跡カマド 第8号住居跡	図版11	第17号住居跡 第17号住居跡カマド 第17号住居跡遺物出土状況
図版5	第9号住居跡 第10号住居跡 第11号住居跡	図版12	第1号鍛冶工房跡 第1号鍛冶工房跡カマド 第1号鍛冶工房跡遺物出土状況(1)

- 図版13 第1号鍛冶工房跡遺物出土状況 (2)  
 第1号鍛冶工房跡炉  
 第1号鍛冶工房跡廃滓坑  
 第1号鍛冶工房跡ピット3  
 第1号鍛冶工房跡ピット3遺物出土状況  
 第1号鍛冶工房跡貝層検出状況
- 図版14 第1号土坑  
 第2号土坑  
 第3号土坑  
 第4号土坑  
 第5～7号土坑  
 第8号土坑  
 第9号土坑  
 第10号土坑
- 図版15 第11～17号土坑  
 第18号土坑  
 第20号土坑  
 第22号土坑  
 第23号土坑  
 第24号土坑  
 第25号土坑  
 第27号土坑
- 図版16 第28号土坑  
 第29号土坑  
 第31号土坑  
 第32号土坑  
 第34号土坑  
 第35号土坑  
 第38号土坑  
 第40号土坑
- 図版17 第41号土坑  
 第42号土坑  
 第43号土坑  
 第44号土坑  
 第1号井戸跡  
 第1号地下式坑  
 第3号地下式坑
- 第4号地下式坑
- 図版18 第7号住居跡出土遺物 (1)  
 第7号住居跡出土遺物 (2)  
 第8～10号住居跡出土遺物 (1)  
 第8～10号住居跡出土遺物 (2)  
 第11・12号住居跡出土遺物 (1)  
 第11・12号住居跡出土遺物 (2)  
 第13・14号住居跡出土遺物
- 図版19 第15号住居跡出土遺物 (1)  
 第15号住居跡出土遺物 (2)  
 第15号住居跡出土遺物 (3)  
 第15号住居跡出土遺物 (4)  
 第15号住居跡出土遺物 (5)  
 第16号住居跡出土遺物 (1)  
 第16号住居跡出土遺物 (2)
- 図版20 第16号住居跡出土遺物 (3)  
 第17号住居跡出土遺物 (1)  
 第17号住居跡出土遺物 (2)  
 第17号住居跡出土遺物 (3)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (1)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (2)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (3)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (4)
- 図版21 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (5)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (6)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (7)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (8)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (9)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (10)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (11)
- 図版22 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (12)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (13)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (14)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (15)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (16)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (17)  
 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (18)

第1号鍛冶工房跡出土遺物 (19)  
図版23 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (20)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (21)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (22)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (23)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (24)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (25)  
図版24 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (26)  
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (27)  
土坑出土遺物 (1)

土坑出土遺物 (2)  
土坑出土遺物 (3)  
第1号井戸跡出土遺物  
地下式坑出土遺物  
図版25 グリッドピット出土遺物  
グリッド出土遺物  
第12地点調査区全景  
図版26 第17地点調査区東半部全景  
第17地点調査区西半部全景  
第12・17地点出土遺物



# I 調査の概要

## 1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.92km<sup>2</sup>の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。地域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。しかし市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であった。しかし、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内である当市はベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅が目立って増え、山林は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目覚ましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する中妻遺跡（第9・10・11・12・17地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

## 2 調査の経過

中妻遺跡（第9地点）は、平成24年9月5日に実施した試掘調査の結果を受け、同年中に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の中央部よりやや南寄りに位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成24年10月1日	表土除去
10月2日	周辺環境整備
10月3日～9日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
10月10日	埋め戻し作業
10月12日	調査終了

中妻遺跡（第10地点）は、平成25年4月25日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の西寄りに位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成26年4月21日	準備作業
4月22日・23日	調査区北半部表土除去
4月24日～28日	周辺環境整備、基準杭設定



5月1日～19日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
5月22日～27日	排土反転、調査区南半部側表土除去
5月28日	基準杭設定
5月29日～6月23日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月24日	埋め戻し作業、調査終了

中妻遺跡（第11地点）は、周辺の発掘調査や試掘調査結果から、遺構の存在が推定され、平成26年10月24日に発掘調査を行った。調査地点は遺跡の中央部よりやや南寄りに位置し、標高は約12mである。

中妻遺跡（第12地点）は、平成26年11月11日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央部に位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成27年4月13日	準備作業
4月15日	表土除去
4月16日	周辺環境整備
4月20日～24日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
4月27日	埋め戻し作業、調査終了

中妻遺跡（第17地点）は、平成26年11月11日に実施した試掘調査の結果を受け、翌年度に発掘調査を行った。調査地点は、遺跡の中央部に位置し、標高は約12mである。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成27年7月22日	調査区東半部表土除去
7月23日	周辺環境整備
7月27日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月28日	排土反転、調査区西半部側表土除去
7月29日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
7月31日	埋め戻し作業、調査終了

## II 位置と環境

### 1 遺跡の立地と地理的環境

中妻遺跡の位置する地域は、近世村名をとって篠津地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台の西縁部にあたる。白岡支台は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。

白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1m程と低平なのに対し、南部では約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

### 2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、中妻遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、層位的な出土ではないものの、入耕地遺跡をはじめ白岡支台西縁部の山遺跡やタタラ山遺跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代は早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代前期初頭の花積下層式期では、タタラ山遺跡で住居跡40軒以上や炉穴群が検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが判明した。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形性豊かな石製装飾品群の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなる。前期後半以降は、諸磯b式期に茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。

再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利E式期からで、山遺跡をはじめ、新屋敷遺跡やタタラ山遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。

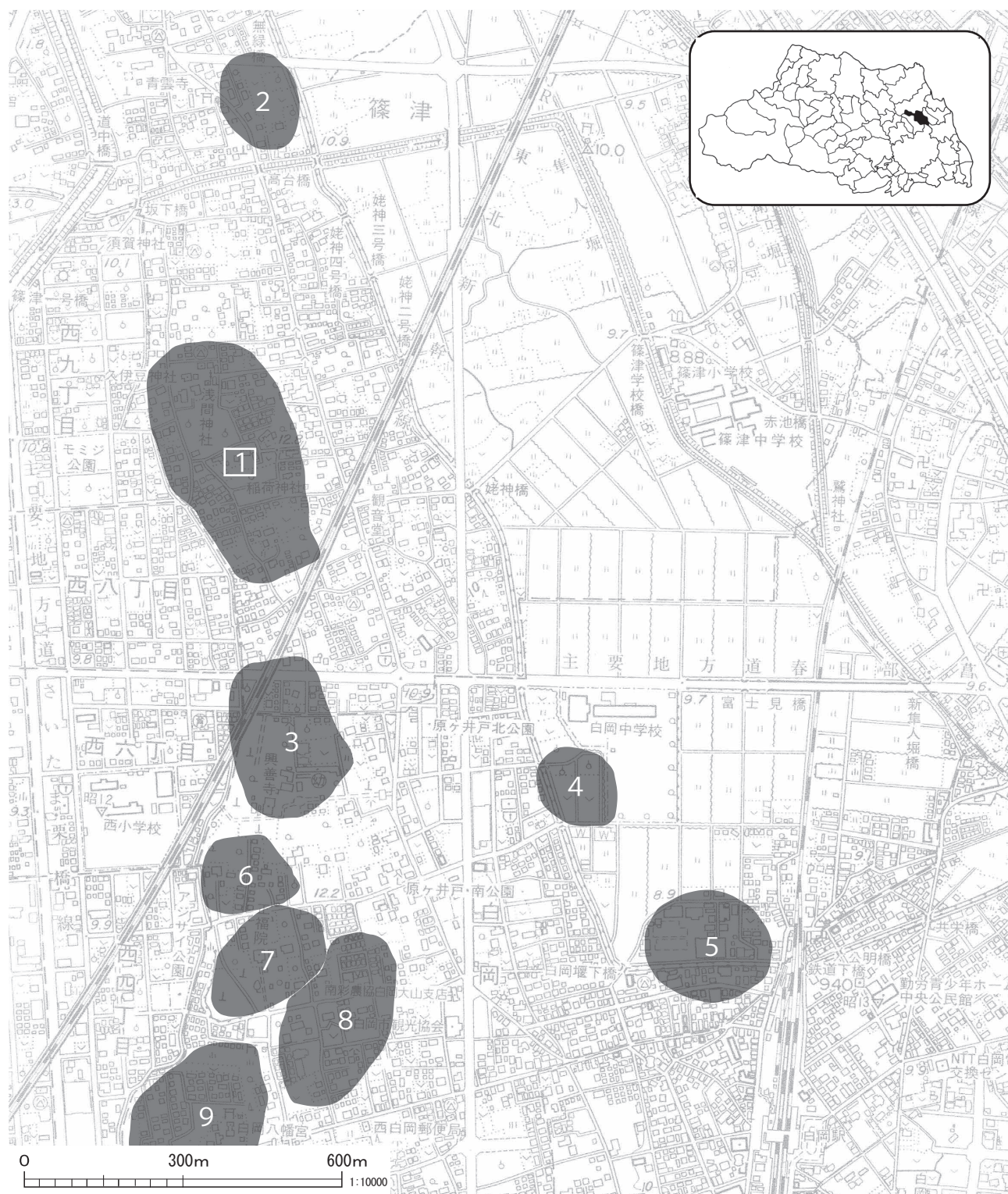
縄文時代後期から晩期になると、入耕地遺跡にみられるような環状盛土遺構の存在が明らかになる。また、一遺跡において膨大な量の遺構と遺物を伴うようになる。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。古墳時代前期では入耕地遺跡や茶屋遺跡で住居跡が認められ、一定規模の集落規模の展開が窺われるほか、正福院貝塚では方形周溝墓が検出されている。一方、古墳時代中・後期は本報告の中妻遺跡や神山遺跡で住居跡が数軒検出される程度である。

奈良・平安時代では、中妻遺跡が居住域及び生産域の中心であったと考えられる。山遺跡や市域南部に位置する沖山西遺跡や南鬼窪氏館跡においても、7～10世紀代の炭焼窯跡が検出されている。こうした炭焼窯跡の存在から、炭を用いて操業した古代の鍛冶遺構の存在が想定されていた。このような状況の中、今回報告する中妻遺跡第10地点検出の鍛冶工房跡は、市域で発見された古代の本格的な製鉄関連遺構として注目される。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類が多数出土している。

また、中妻遺跡においても掘立柱建物跡群や大規模な堀が検出されている。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院、篠津久伊豆神社などは、草創や社殿造立に同氏との関わりが傳承されている。



第1図 中妻遺跡と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	中妻遺跡	篠津字中妻・神山・磯・宿	縄文早～後、古墳前～後、奈良・平安、中世、近世	平成12・14・16・18・21・22・24・25・26・27
2	志部遺跡	篠津字志部	古墳前、奈良・平安	
3	神山遺跡	篠津字神山・白岡東	縄文前・中、古墳中・後、中世、近世	昭和51・平成5・12・17・25・26
4	西下谷遺跡	白岡字西下谷・東	縄文中、古墳前	
5	七カマド遺跡	白岡字東下谷	縄文後、中世、近世	平成22
6	白岡東遺跡	白岡字東	縄文早・前・後、中世	
7	正福院貝塚	白岡字茶屋	縄文早～晩、古墳前、中世、近世	昭和62・平成13
8	入耕地遺跡	白岡字茶屋・東	縄文早・前・後・晩、古墳前、中世、近世	昭和26・平成3・4・7・15・16・17・19・23・25
9	茶屋遺跡	白岡字茶屋	縄文早・前・後、古墳前	昭和57・平成6・8・13・14・18



第2図 中妻遺跡の位置と発掘調査区

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 第9・11地点の遺構と遺物

##### (1) 溝跡

###### ●第1号溝跡 (第3・5図)

第9・11地点を東西に横断する。第11地点は調査の制約上、溝跡の幅と走行方向を確認するためのトレンチ調査において確認した。第8地点で確認された第15号溝跡と同一のものと考えられる。本調査地点での最大幅は5.0mを測る。確認面からの深さは約2.1mを測り、V字状に底面が狭まる葉研形を呈す。4・5層がローム粒子を含み緩やかに堆積しているのに対し、6・7・8層は大粒のロームブロックやローム土を含み堆積の角度が急である。このことから土盛り等の施設が存在した場合、6・7・8層が流れ込んだと思われる南側に設けられていたことが考えられる。第11地点はトレンチ調査であったため、安全性を考慮して地表下1.3mまで掘削を行い、底面までの掘削は行わなかった。

###### 出土遺物 (第5図1～3)

**土器** 1は第11地点出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に横位から斜位の条痕文が施される。2は胎土に繊維を含む胴部片で、斜位に単節縄文が施される。3は須恵器坏の口縁部片である。

##### (2) ピット (第4・5図)

検出されたピットは128基を数えるが、遺物の出土は僅かであった。第1号溝跡の内部に並列するピットについては、溝の施設に伴う柱穴の可能性も考えられるが、ピットの規模や深さ等から明確に区分することはできなかった。ピットの計測値は第3表に示した通りである。

###### 出土遺物 (第5図4)

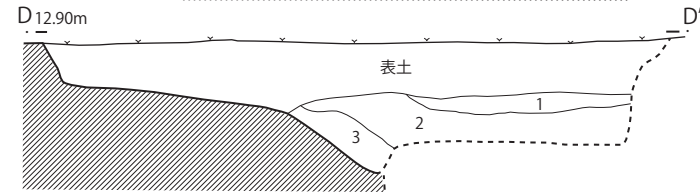
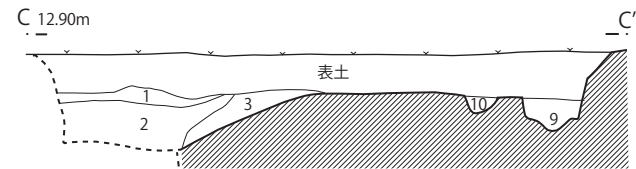
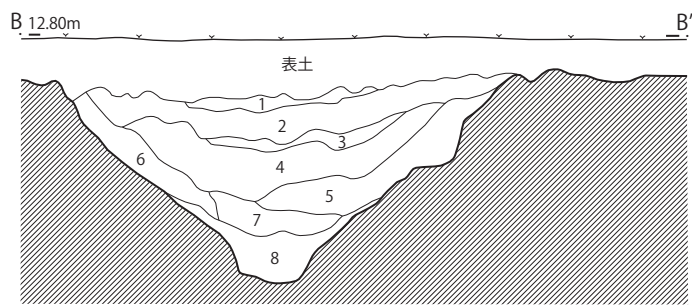
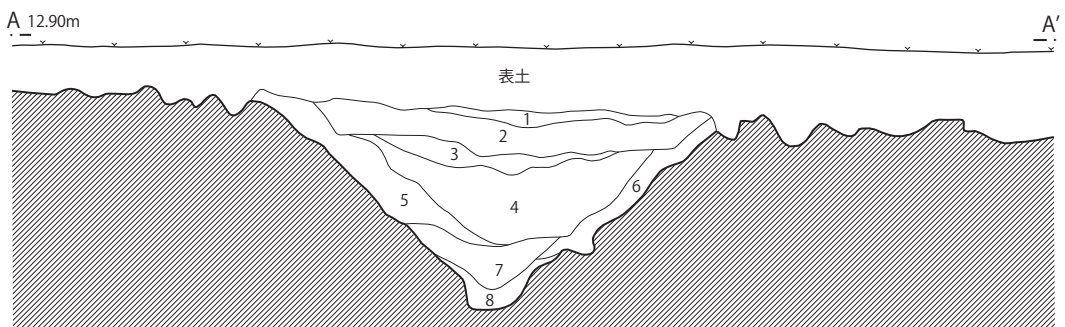
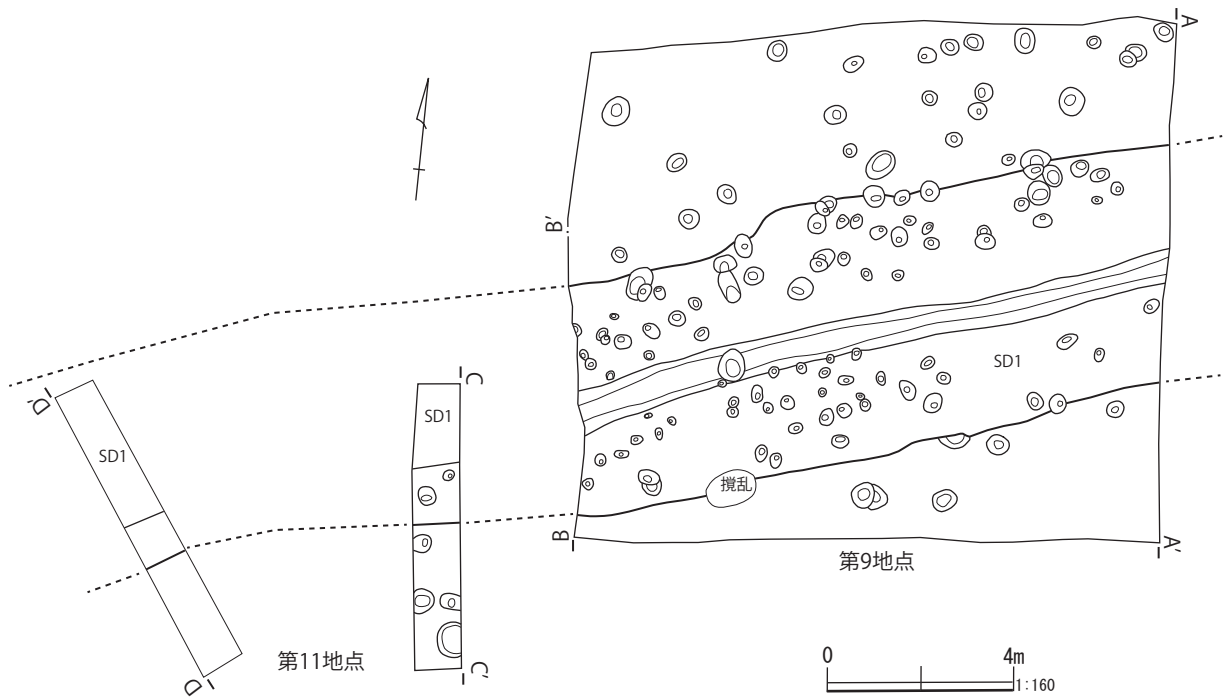
**土器** 4はP3出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、外面に縦位、内面に斜位の条痕文が施される。

##### (3) 調査区出土遺物 (第5図5～11)

**土器** 5は胎土に繊維を含む平縁の口縁部片である。外面は斜行する条痕文の上に、横走する1条のミミズ腫れ状の細隆起線が観察される。内面は横位の条痕文が施される。6は胎土に繊維を含む胴部片である。外面の斜位の条痕文は一部で縦方向に撫で消した痕が認められる。7は単節縄文を地文とし半截竹管による細い沈線が施される胴部片である。下位の文様は磨り消される。8は沈線による区画と単節縄文が施される胴部片である。9・10は土師器甕の口縁部片である。11は播鉢の胴部片である。

第2表 第9・11地点出土遺物観察表

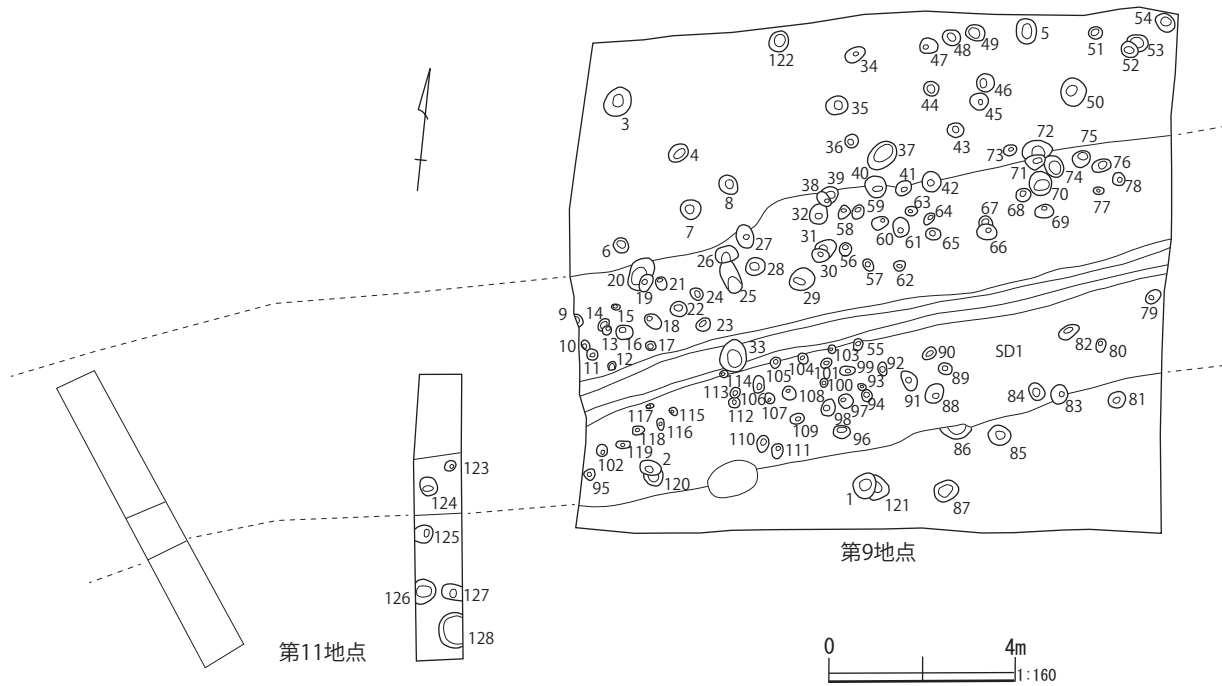
図版	番号	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
5	3	SD1	須恵器	坏	—	—	(3.4)	10	針・白	良好	灰色	第9地点
5	9	調査区	土師器	甕	—	—	(3.9)	10	雲母・白	普通	橙色	第9地点
5	10	調査区	土師器	甕	—	—	(2.5)	10	石英・白・黒	普通	橙色	第9地点
5	11	調査区	陶器	播鉢	—	—	(8.5)	10	白・黒	良好	赤色	第9地点



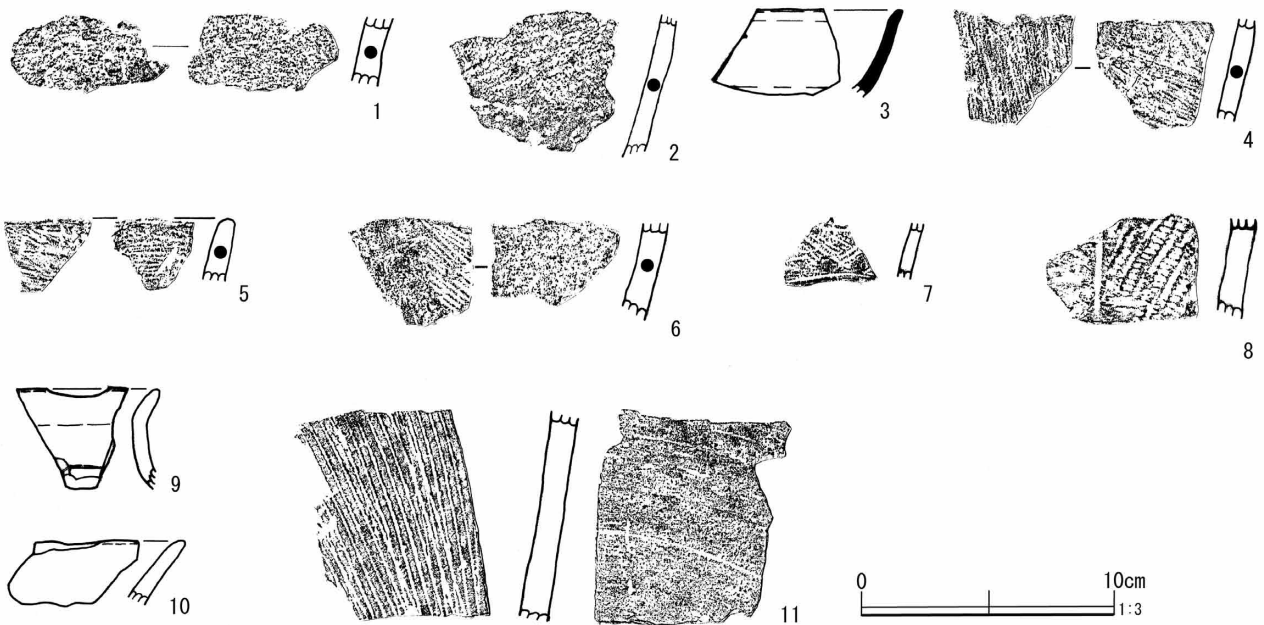
- SD1
- 1 黄褐色土 しまり有 粘性やや弱  
ロームブロック (1~3cm) を多く含む。
  - 2 褐色土 しまりやや弱 粘性やや弱  
ロームブロック (1~3cm) を多く含む。
  - 3 黄褐色土 しまりやや弱 粘性やや弱  
ロームブロック (5cm程) を多く含む。
  - 4 黄褐色土 しまり弱 粘性弱  
ローム粒子 (0.5~1cm) を多く含む。
  - 5 褐色土 しまり弱 粘性弱  
ローム粒子 (0.5~1cm) を多く含む。
  - 6 灰褐色土 しまり弱 粘性弱  
ロームブロック (5cm程) を多く含む。
  - 7 黒褐色土 しまり有 粘性有  
6層よりもやや硬めにしまる。
  - 8 黄褐色土 しまり有 粘性有  
ローム土を多く含む。
  - 9 黒褐色土 しまり弱 粘性弱  
ロームブロック (5cm) を多く含む。
  - 10 黄褐色土 しまり有 粘性有 ローム土を多く含む。



第3図 第9・11地点全測図及び遺構図



第4図 第9・11地点ピット配置図



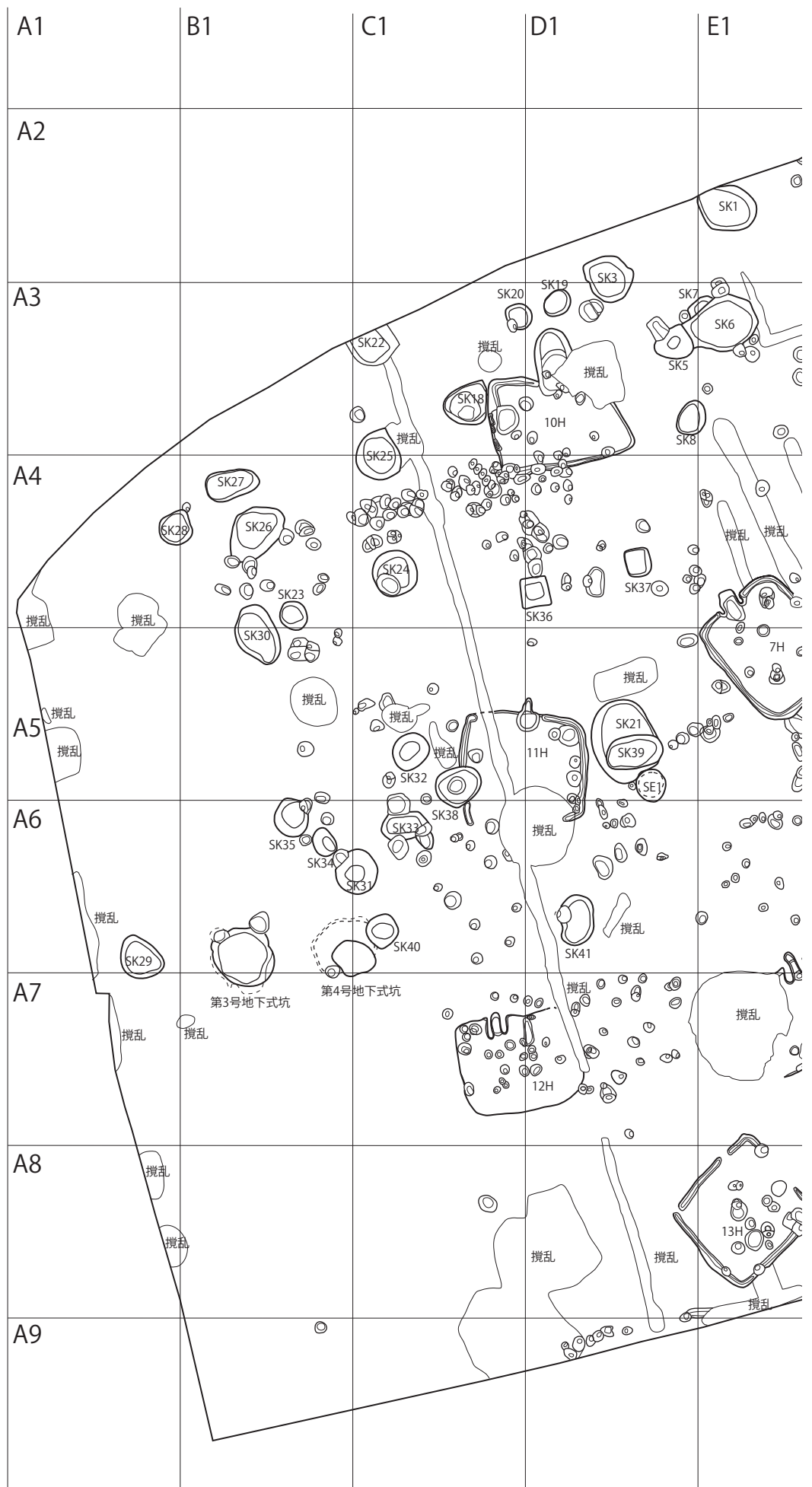
第5図 第9・11地点出土遺物

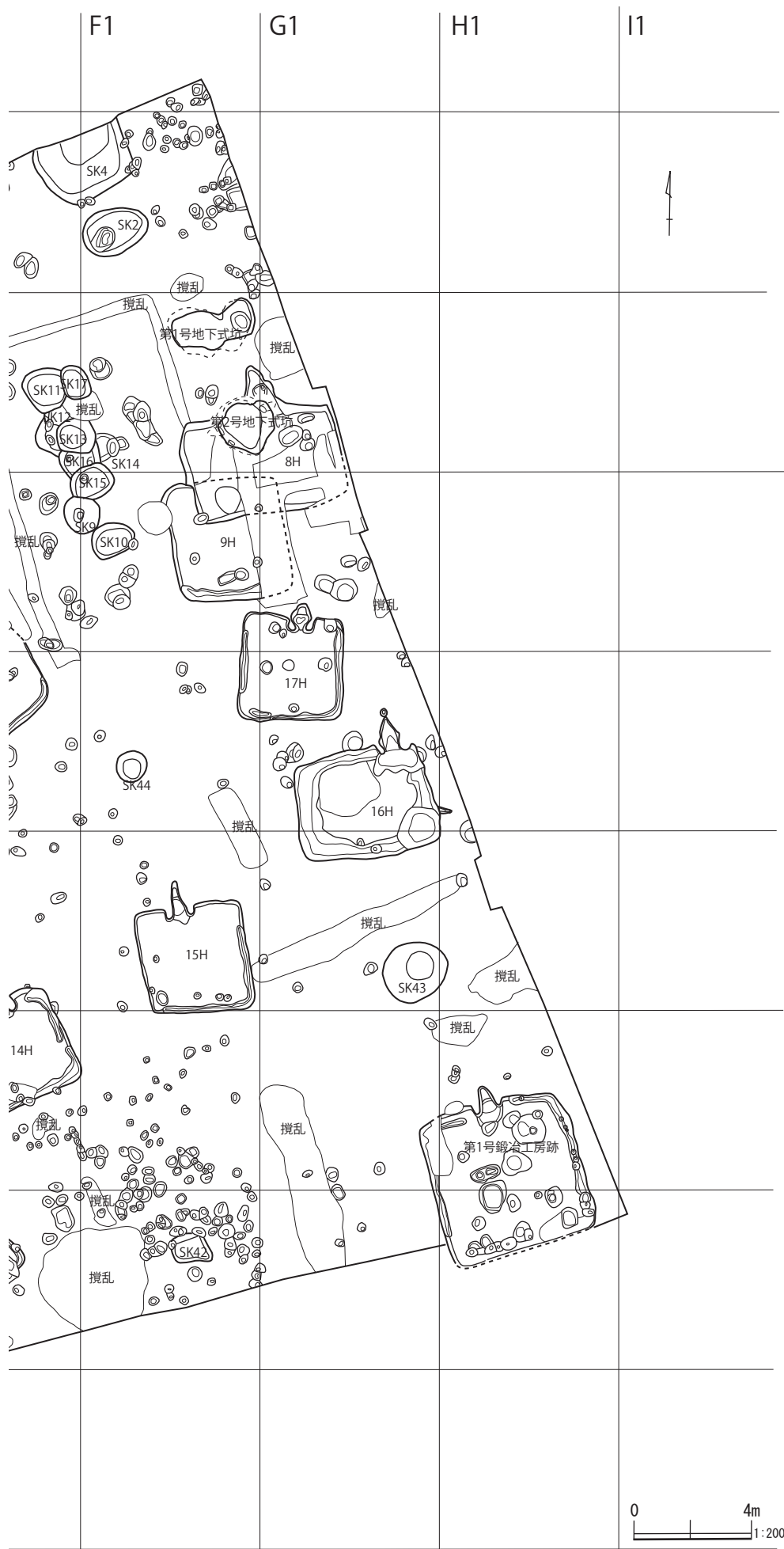
第3表 第9・11地点ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	54	44	23	44	32	32	12	87	52	36	16
2	46	32	41	45	38	36	20	88	42	34	34
3	60	56	25	46	38	38	21	89	26	22	46
4	46	32	17	47	40	36	36	90	30	16	26
5	60	44	36	48	38	34	15	91	43	26	56
6	34	26	41	49	42	36	15	92	28	16	20
7	42	40	35	50	60	52	27	93	16	11	19
8	44	34	37	51	26	24	25	94	26	24	20
9	26	(12)	20	52	38	32	33	95	20	20	18
10	20	12	24	53	(30)	40	19	96	36	26	28
11	22	22	19	54	40	34	38	97	26	26	39
12	18	12	16	55	(24)	20	28	98	36	30	61
13	20	16	22	56	30	28	41	99	32	16	48
14	(14)	22	32	57	25	18	30	100	16	14	17
15	14	10	20	58	30	24	28	101	22	18	19
16	36	32	37	59	30	22	50	102	26	22	27
17	18	16	16	60	34	22	30	103	16	14	23
18	40	24	37	61	40	32	42	104	20	18	30
19	40	26	45	62	23	20	25	105	22	20	32
20	72	50	34	63	26	20	24	106	32	20	32
21	28	24	47	64	30	16	41	107	22	20	30
22	38	32	56	65	32	26	51	108	30	24	53
23	31	24	56	66	40	36	32	109	30	22	21
24	24	23	69	67	(14)	26	24	110	34	24	33
25	(66)	30	42	68	34	28	39	111	30	24	64
26	50	(34)	38	69	42	30	48	112	(22)	22	23
27	51	36	39	70	52	50	33	113	(20)	18	10
28	42	36	42	71	46	32	48	114	14	12	28
29	52	46	28	72	63	(30)	24	115	18	10	30
30	38	26	45	73	24	21	28	116	22	10	35
31	50	(38)	37	74	42	38	29	117	14	6	36
32	40	40	27	75	38	36	37	118	26	16	18
33	62	56	13	76	40	26	68	119	30	14	22
34	40	32	19	77	22	13	47	120	(20)	(38)	32
35	44	40	21	78	28	24	30	121	(30)	48	15
36	28	28	31	79	30	22	53	122	46	38	39
37	66	48	39	80	24	20	21	123	25	23	18
38	36	(22)	23	81	34	30	40	124	40	35	47
39	(24)	34	27	82	48	22	25	125	(45)	38	18
40	46	46	32	83	40	38	64	126	(45)	50	21
41	36	26	19	84	34	34	41	127	(40)	35	25
42	33	37	38	85	48	43	25	128	75	(50)	33
43	34	32	27	86	66	(26)	19				

※単位は全てcm







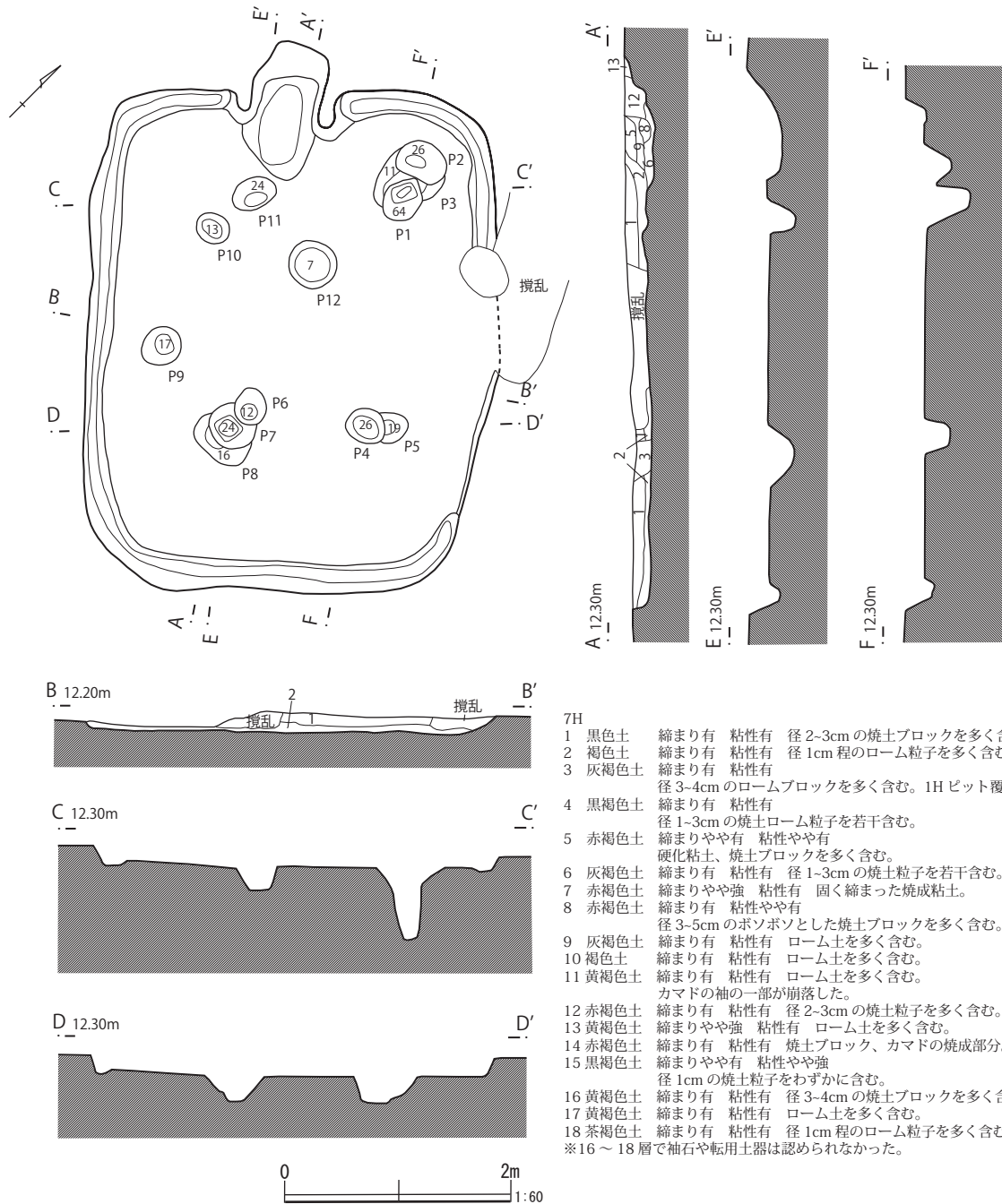
第6图 第10地点全测图

## 2 第10地点の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### ●第7号住居跡 (第7・8・9図)

E4・5グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、長軸約4.5m、短軸約3.6mを測る。確認面から床面までの深さは約0.3mを測る。主軸方位はN-45°-Wを指す。柱穴の規模は概ね0.4~0.5mの円形を呈し、P1・4・7・11を主柱穴とする4本柱の住居が想定される。P1・4・7はそれぞれピットの重複が認められ、柱

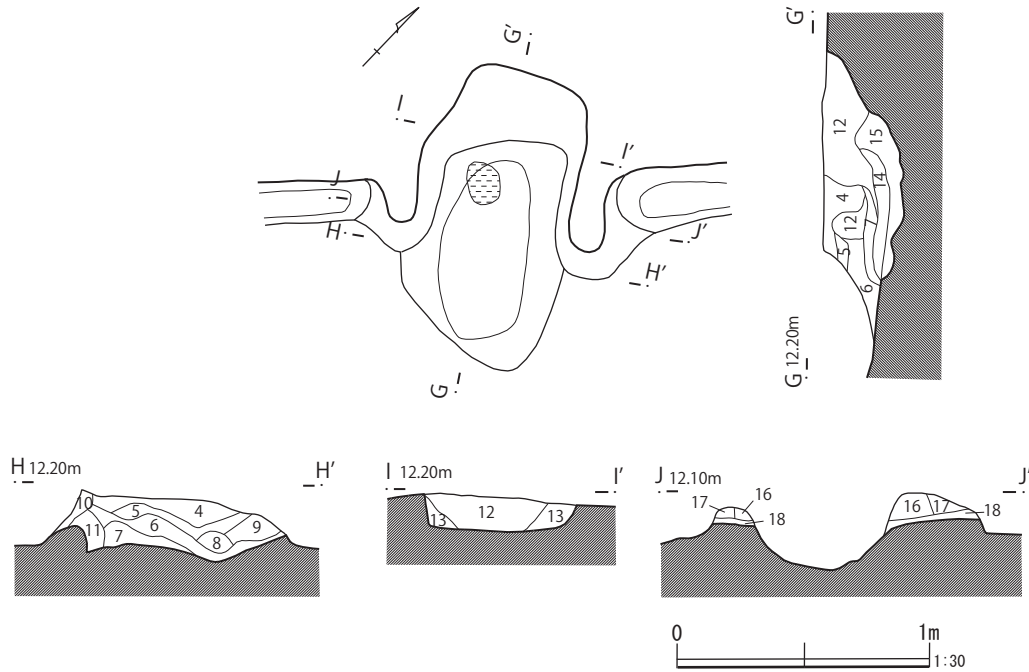


第7図 第7号住居跡

位置の付け替えが行われた可能性がある。

カマドは北西壁に設置される。天井部は残存せず、袖部の遺存も良好ではなかったが、焚口部に硬砂層由来の砂岩が検出された。カマド袖部の内壁あるいは芯材といった構築材として利用されたものと推定される。また、袖部に堆積した土層の観察から、黄褐色粘土を用いて袖部を構築していたものと推定される。

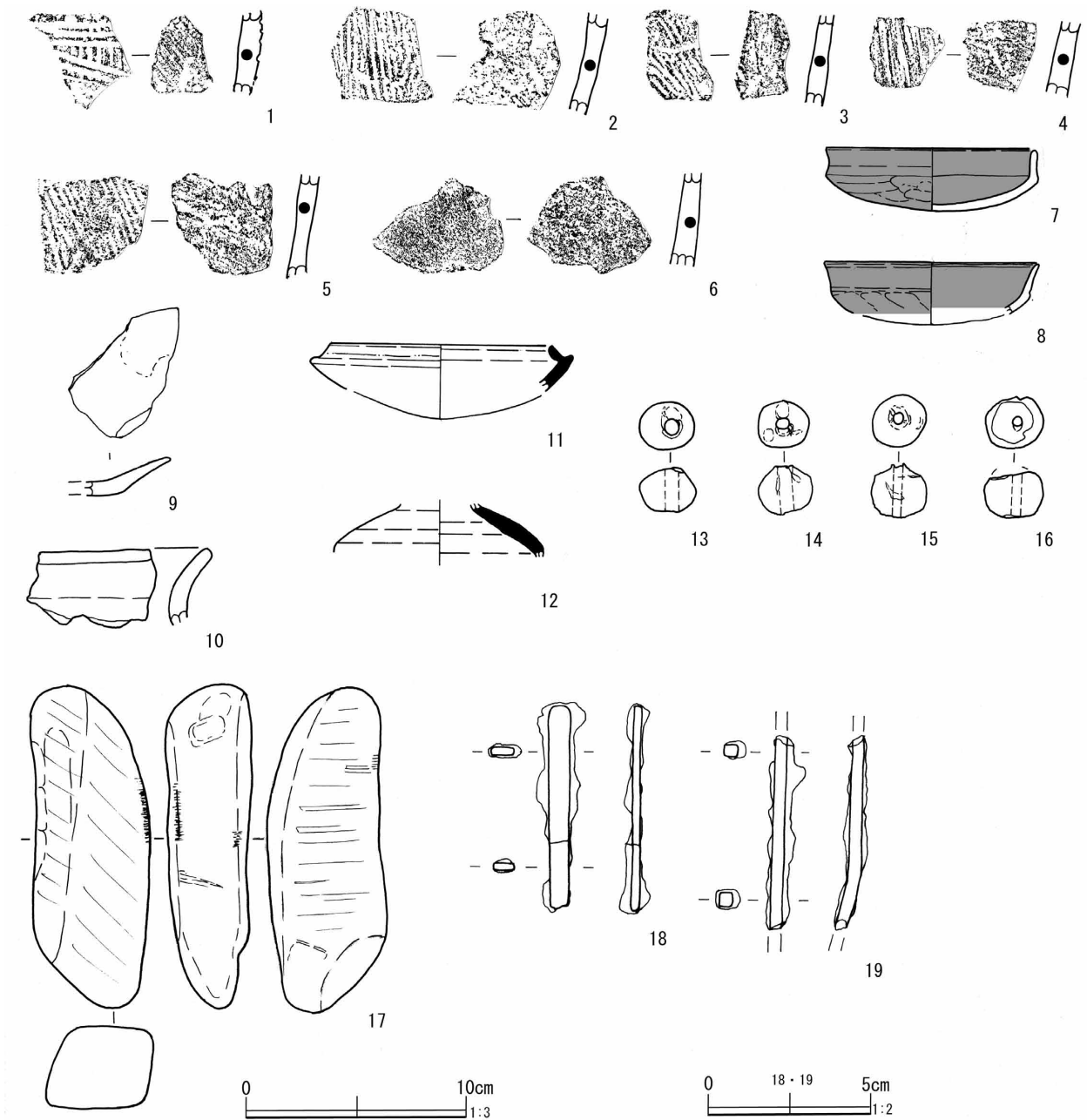
壁溝はカマド付近と東側で途切れる。カマドの設置が壁溝設置の計画よりも前に設計されたものと考え



第8図 第7号住居跡カマド

第4表 第7号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
9	7	土師器	坏	9.5	—	2.8	60	角・白・赤	良好	赤褐色	内外面赤彩
9	8	土師器	坏	[9.6]	—	(2.4)	30	角・白・赤	良好	赤褐色	内外面赤彩
9	9	土師器	坏	—	—	1.1	10	石英・白	普通	橙色	
9	10	土師器	甕	—	—	(3.4)	10	雲母・白	普通	橙色	
9	11	須恵器	坏	[10.0]	—	(2.0)	10	黒	良好	灰色	
9	12	須恵器	壺	—	—	(2.3)	10	白・黒	良好	灰色	瓶子か
図版	番号	種別	器種	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考
9	13	土玉		2.4	2.4	0.6	7.2	白	普通	にぶい橙色	
9	14	土玉		2.2	2.4	0.5	8.2	白	普通	橙色	
9	15	土玉		2.4	2.5	0.3	10.4	角・白	普通	明橙色	
9	16	土玉		(2.0)	2.6	0.7	9.5	白	普通	橙色	
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
9	17	砥石	砂岩	14.7	5.2	3.7	450.0				
図版	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考				
9	18	棒状鉄製品	6.2	0.7	0.2	4.8					
9	19	棒状鉄製品	(5.9)	0.4	0.4	4.4	鉄釘か				



第9図 第7号住居跡出土遺物

られる。

#### 出土遺物 (第9図)

**土器** 1~6は胎土に繊維を含む。1の外面は縦位の条痕文を地文とし斜位の沈線が施される。2~5は、表裏に縦位の条痕文が施される胴部片である。6は無文の胴部片である。7・8は土師器坏で内外面とも赤彩が施される。いわゆる坏蓋模倣坏で、7世紀後半から8世紀の所産であろうか。9は土師器坏で内面に煤の付着が認められる。10は土師器甕の口縁部片である。11は須恵器の坏身である。口縁部外面に自然釉が認められる。12は須恵器壺の瓶子と思われる。

**土製品** 13~16は土玉である。孔径は概ね0.3~0.7cmを測り、貫通している。

**石器** 17は砥石である。全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。

**鉄器** 18・19は棒状鉄製品である。18は断面長方形を呈し、両端がやや幅広になる。19は両端が欠損しており、鉄釘の可能性も考えられる。

#### ●第8号住居跡（第10・11・13図）

F3・4・G3・4グリッドに位置し、第9号住居跡を切り、第2号地下式坑に切られる。平面形は横長の方形を呈し、長軸約5.3m、短軸約3.5mを測る。確認面から床面までの深さは約0.4mを測る。主軸方位はN—34°—Wを指す。大きく攪乱を受けているため床面部を確認できた箇所が限定されるが、北東隅に貯蔵穴が認められ、付近で検出されたP2やP3が家屋を支える柱穴であったと推定される。壁溝の痕跡は認められなかった。

カマドは大部分が第2号地下式坑に切られていたが、掘り方が認められたことから、北壁に設置されていたことを確認することができた。煙道は住居外の北側に向かって延びていたようであるが、袖部等の痕跡は認められなかった。

#### 出土遺物（第13図1～12）

**土器** 1～6は胎土に繊維を含む。1は平縁の口縁部片で、外面に半截竹管による縦位の沈線、内面に横位の条痕文が施される。2～6は表裏に横位から斜位の条痕文が施される胴部片である。7・8は斜位の単節縄文が施される胴部片である。9は須恵器坏で内外面に重ね焼きの痕跡がある。底部に十字の窯印が刻まれる。10は須恵器有台坏の底部である。高台部は貼り付けによるものである。11は陶器蓋である。口縁部が大きく外湾する。

**石器** 12は砥石である。底面は長方形、側面は二等辺三角形に近い形状を呈する。全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。

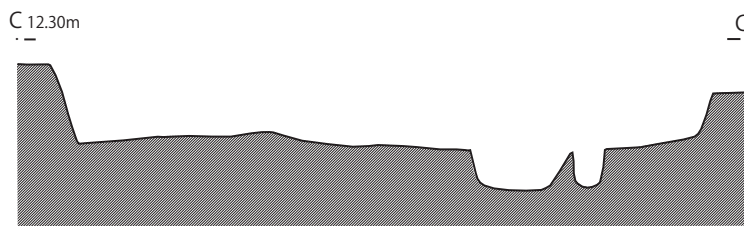
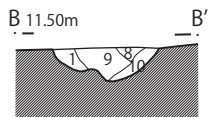
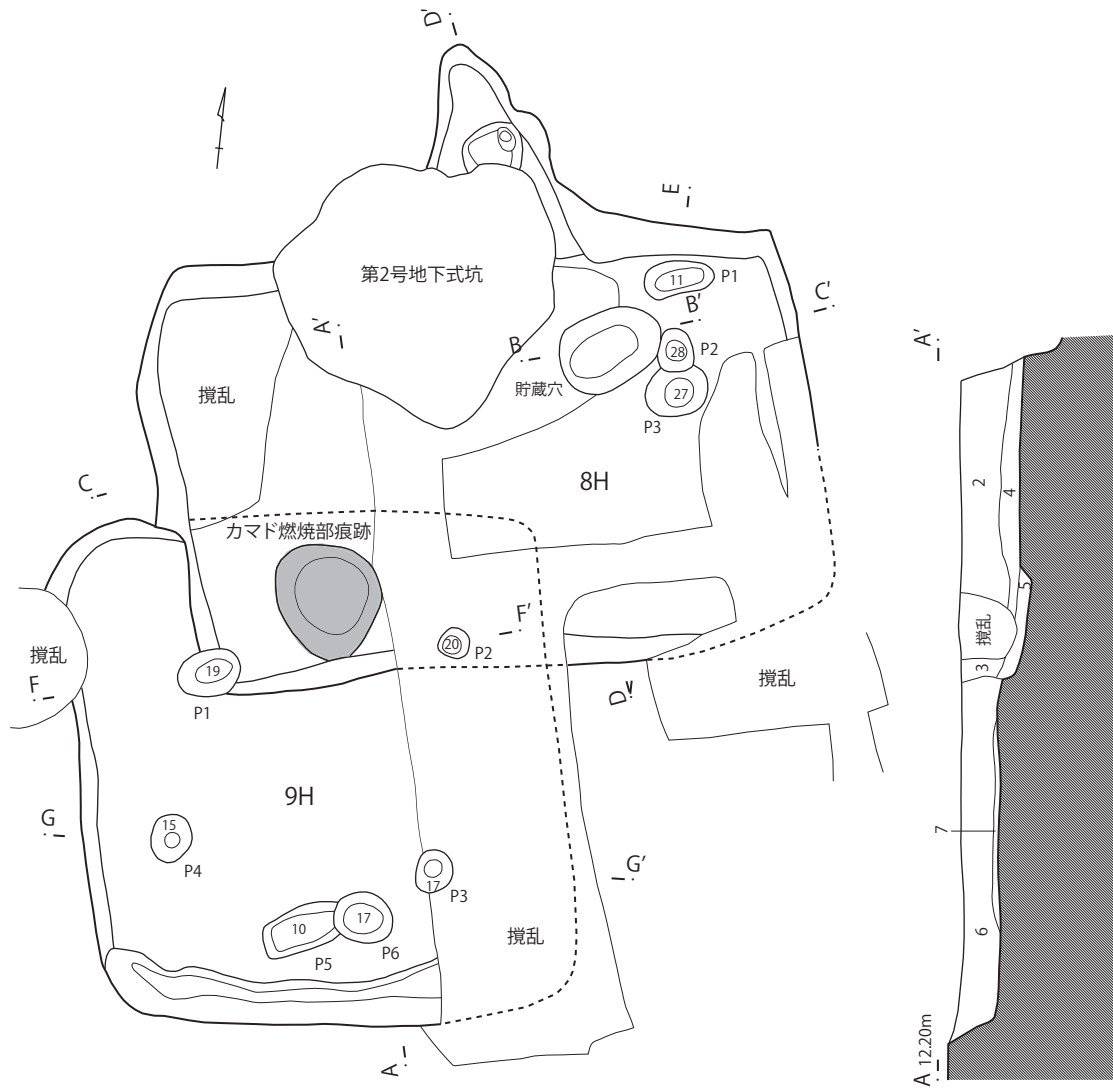
#### ●第9号住居跡（第10・11・13図）

F4・G4グリッドに位置し、第8号住居跡に切られる。東側は攪乱を受けているため住居の規模は定かではないが、検出部分から平面形は径4.0m程の正方形に近い形態を呈すものと推定される。確認面から床面までの深さは約0.4mを測る。主軸方位はN—10°—Wを指す。P1・2・3・4を主柱穴とする4本柱の住居が想定される。住居の南側に壁溝が認められた。全周はしないようである。南側の出入口付近にP5・6が配置される。

第8号住居跡と重複する北側で、直径0.8m程の浅い円形の窪みと焼土がまばらに散っていることが確認された。煙道や袖部の痕跡は認められなかったが、焼土の広がりがかまどの燃焼部の痕跡と考えられ、カマドは北壁に設置された可能性が高い。

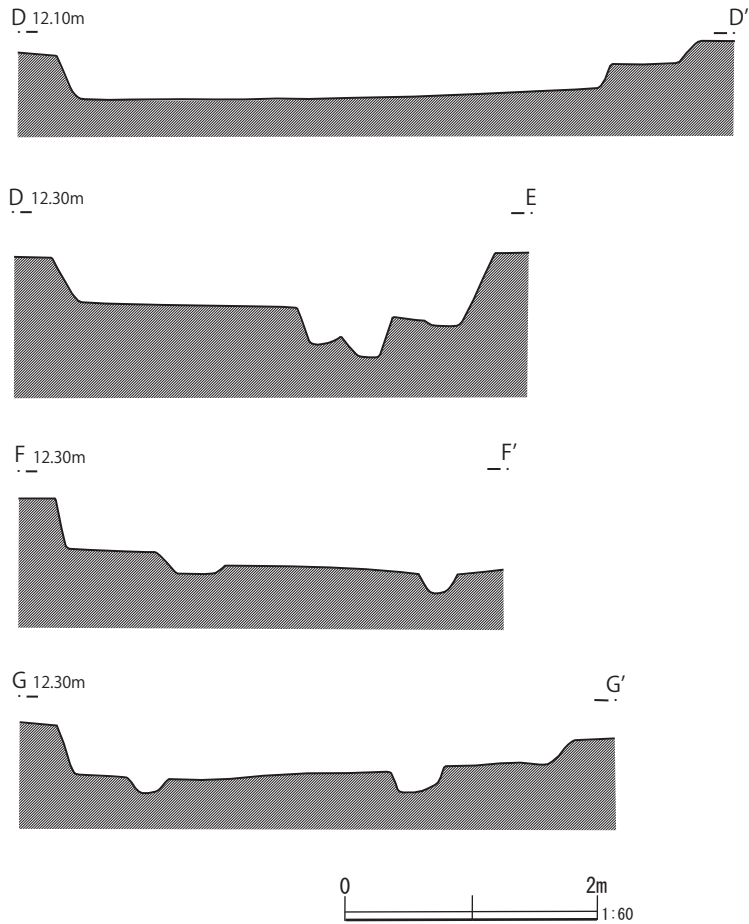
#### 出土遺物（第13図13～18）

**土器** 13～17は胎土に繊維を含む。13は波状の口縁部片で表裏に縦位から斜位の条痕文が施される。14は表裏に斜位の条痕文が施される胴部片である。外面は条痕文を地文とし、半截竹管による沈線が施される。15～17は表裏に横位から斜位の条痕文が施される胴部片である。18は須恵器の合子蓋である。頂部を欠損しているため定かではないが、器高は2.5cm程を測るものと推定される。内面にはかえりが認められる。外面には自然釉が認められ、圏線が3本巡る。



- 8H
- 1 黄褐色土 締まりやや強 粘性やや有 ローム土を多く含む。
  - 2 黒色土 締まり有 粘性有 径0.5cmのローム粒子を少量含む。
  - 3 黄褐色土 締まり有 粘性有 径1-3cmのロームブロックと径0.5cmの焼土粒子を若干含む。
  - 4 黄褐色土 締まり有 粘性有 径0.5cmのローム粒子を多く含む。
- 9H
- 5 赤褐色土 締まり有 粘性有 径0.5cmのローム粒子と焼土粒子を多く含む。
  - 6 黄褐色土 締まり有 粘性有 径3-5cmのロームブロックを多く含む。
  - 7 灰褐色土 締まり強 粘性強 貼床の一部が遺存したもの。粘土質。
- 8H貯蔵穴
- 8 黄褐色土 締まり有 粘性有 径3-4cmのロームブロックを若干含む。
  - 9 黒褐色土 締まり有 粘性有 径4-5cmのロームブロックを多く含む。
  - 10 黄褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム土を多く含む。

第10図 第8・9号住居跡 (1)



第11図 第8・9号住居跡(2)

第5表 第8号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
13	9	須恵器	坏	[13.3]	[8.0]	3.6	50	白・黒	良好	灰白色	
13	10	須恵器	有台坏	[12.6]	[7.0]	(3.5)	25	白・黒	良好	灰色	
13	11	陶器	蓋	[7.0]	[2.1]	2.0	60	白・黒	良好	褐色	
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
13	12	砥石	砂岩	5.0	3.8	2.0	35.4				

第6表 第9号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
13	18	須恵器	合子蓋	[9.4]	—	(2.3)	30	白・黒	良好	灰白色	

●第10号住居跡(第12・13図)

C3・4・D3・4グリッドに位置する。平面形はいびつな方形を呈し、長軸約4.5m、短軸約3.4mを測る。確認面から底面までの深さは約0.1mと非常に浅く、床面はほとんど削平された状態で検出された。主軸



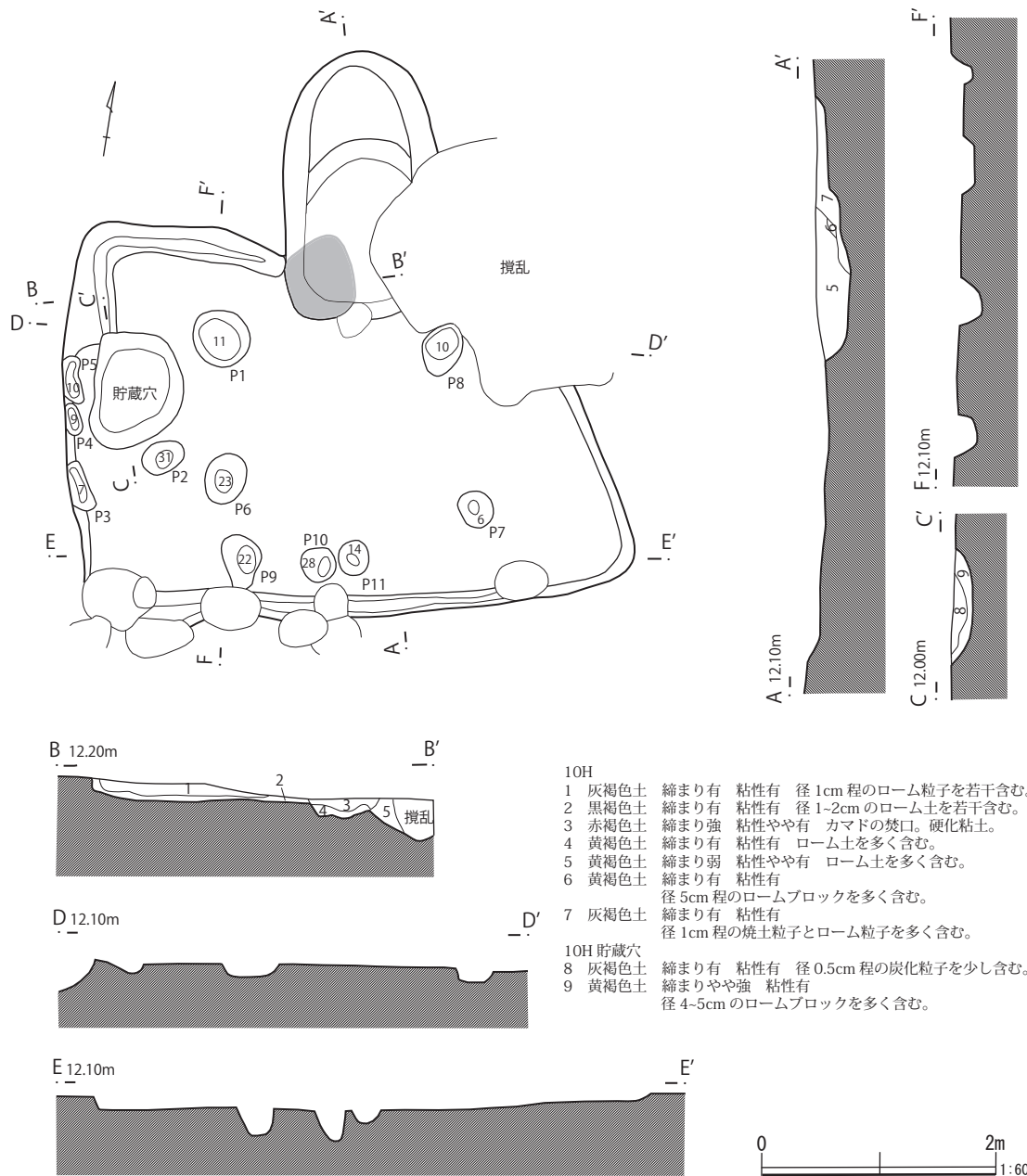
方位はN—20°—Wを指す。柱穴の規模は概ね0.3~0.5mの円形を呈し、P1・6・7・8を主柱穴とする4本柱の住居が想定される。住居の南側の出入口付近にはP10・11が配置される。壁溝は住居の北西隅と南隅で認められた。

カマドは北壁に設置される。カマドも大きく削平されていたが、掘り方と焚口付近に直径0.7m程の焼土の広がりが見られた。

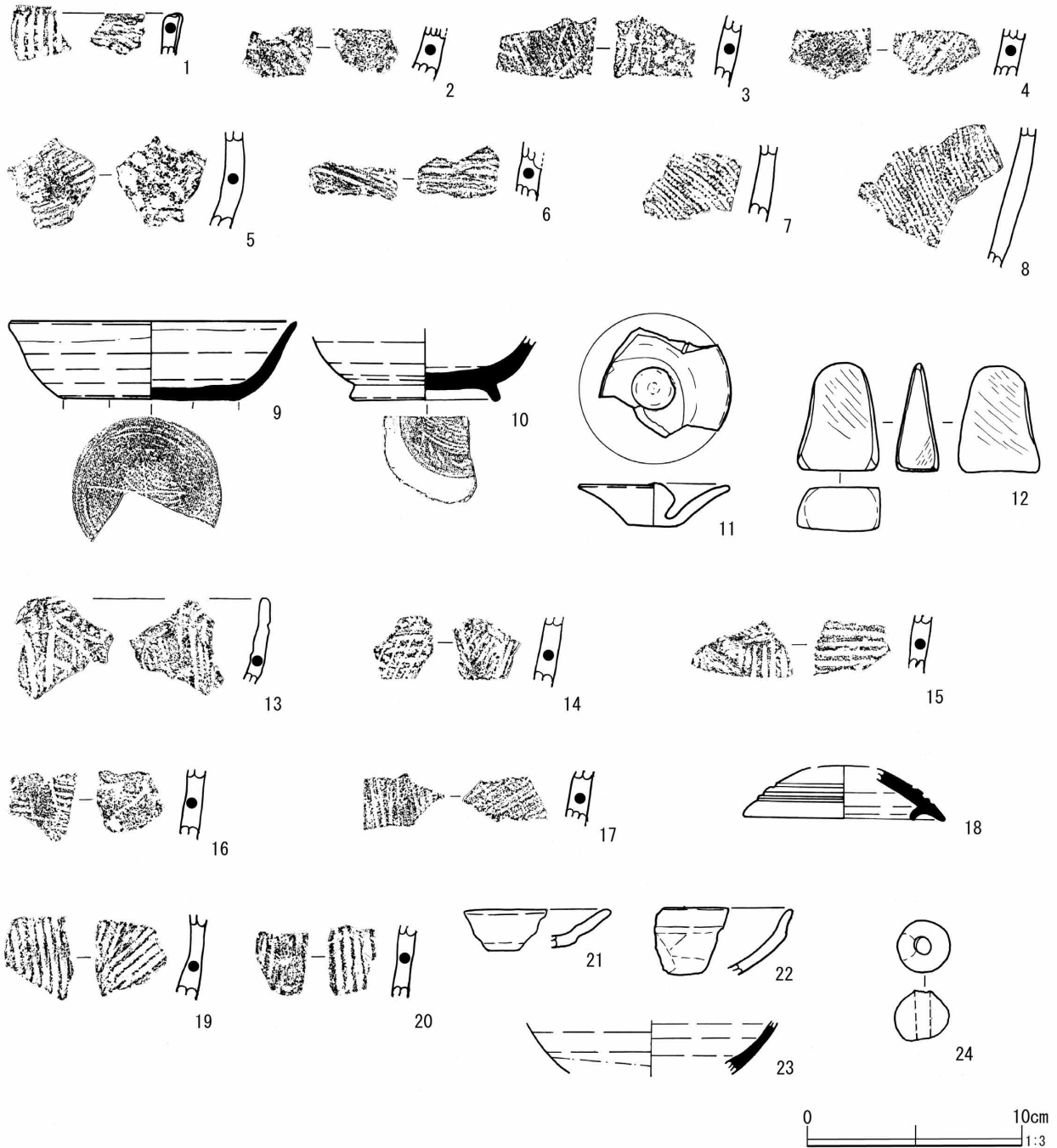
**出土遺物 (第13図19~24)**

**土器** 19・20は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。21・22は土師器坏である。23は須恵器坏で、外面下部にヘラミガキによるものか、光沢を帯びている部位がある。

**土製品** 24は土玉である。孔径は概ね0.8cmを測り、貫通している。



第12図 第10号住居跡



第13図 第8~10号住居跡出土遺物

第7表 第10号住居跡出土遺物観察表

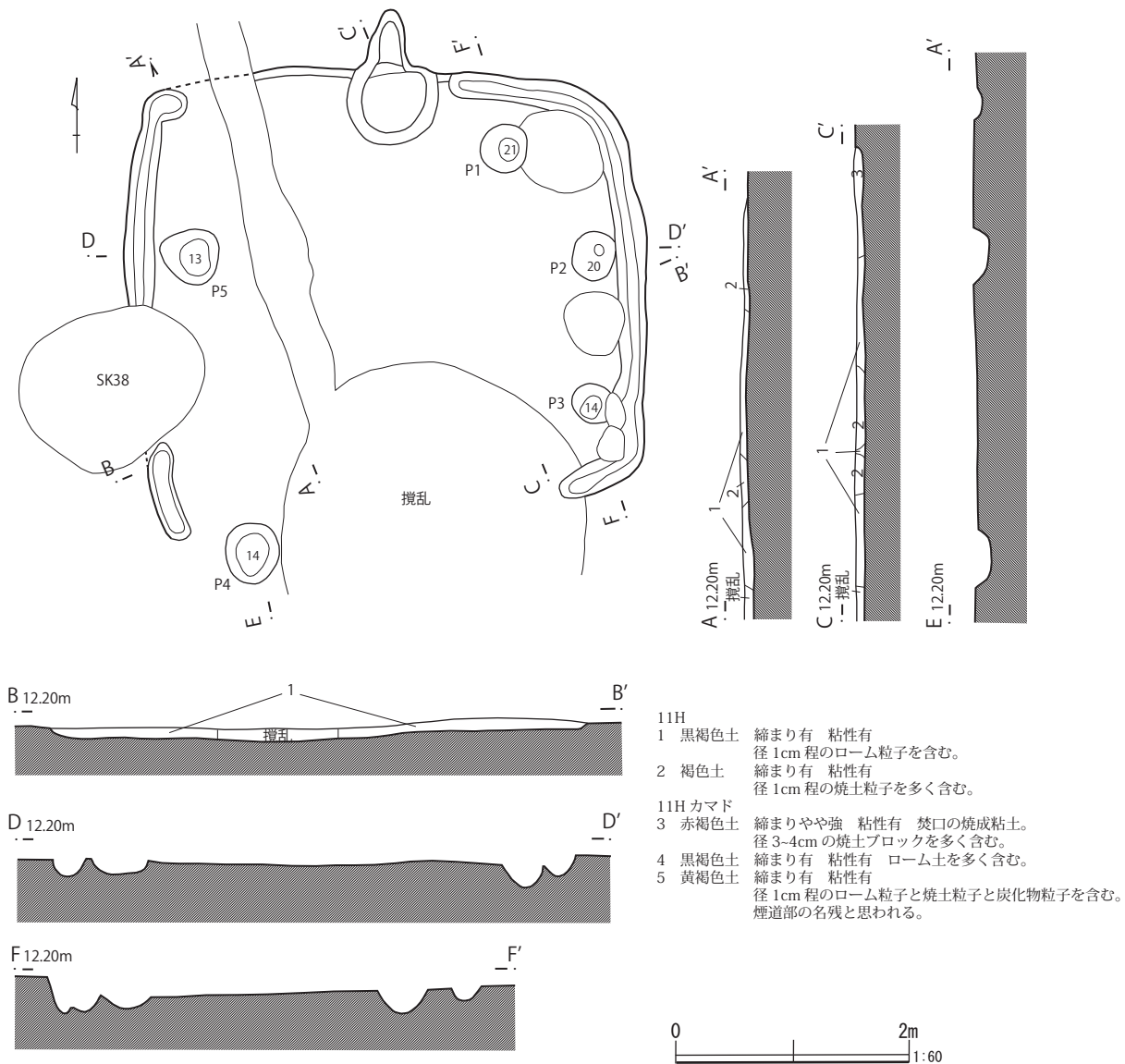
図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
13	21	土師器	坏	—	—	(1.7)	20	角・白	普通	橙色	
13	22	土師器	坏	—	—	(3.2)	20	角・白	普通	赤褐色	
13	23	須恵器	坏	—	—	(2.5)	20	白	良好	灰色	湖西産か
図版	番号	種別	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考	
13	24	土玉	2.4	2.5	0.8	9.1	白・黒	普通	にぶい橙色		

●第11号住居跡（第14・15・16・19図）

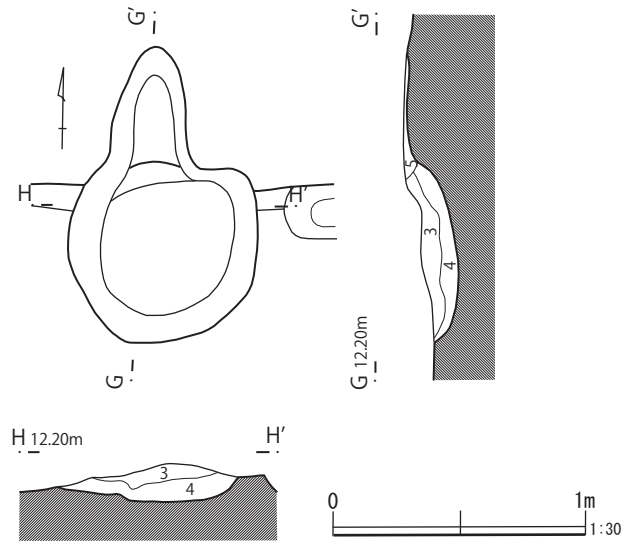
C5・6・D5・6グリッドに位置し、第38号土坑に切られる。南側は攪乱を受けているため住居の規模は定かではないが、検出部分から平面形は長軸約4.5m、短軸約3.5mの方形を呈すものと推定される。確認面から底面までの深さは約0.1mと非常に浅く、床面はほとんど削平された状態で検出された。主軸方位はN—3°—Wを指す。柱穴の規模は概ね0.3~0.5mの円形を呈し、P2が住居内東寄り、P5が住居内西寄りにそれぞれ位置し、上屋を支えた支柱穴であったと考えられる。壁溝は南側では認められなかったが、西側と東側では、確認面から0.2~0.4cmの掘り込みが認められ、この壁溝の存在が住居の平面規模を捉える手がかりとなった。

カマドは北壁に設置される。カマドも削平を受けたため、焚口と煙道の掘り方を残すのみで、袖部や天井部は検出することができなかった。

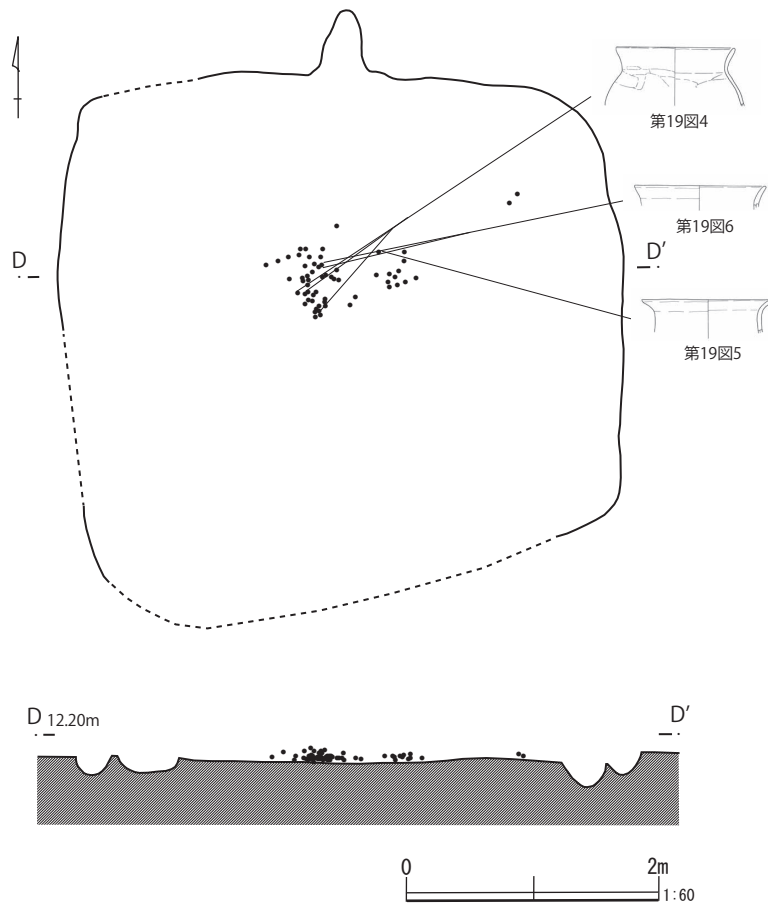
住居中央部に土師器甕が数個体、破砕した状況で出土している。



第14図 第11号住居跡



第15図 第11号住居跡カマド



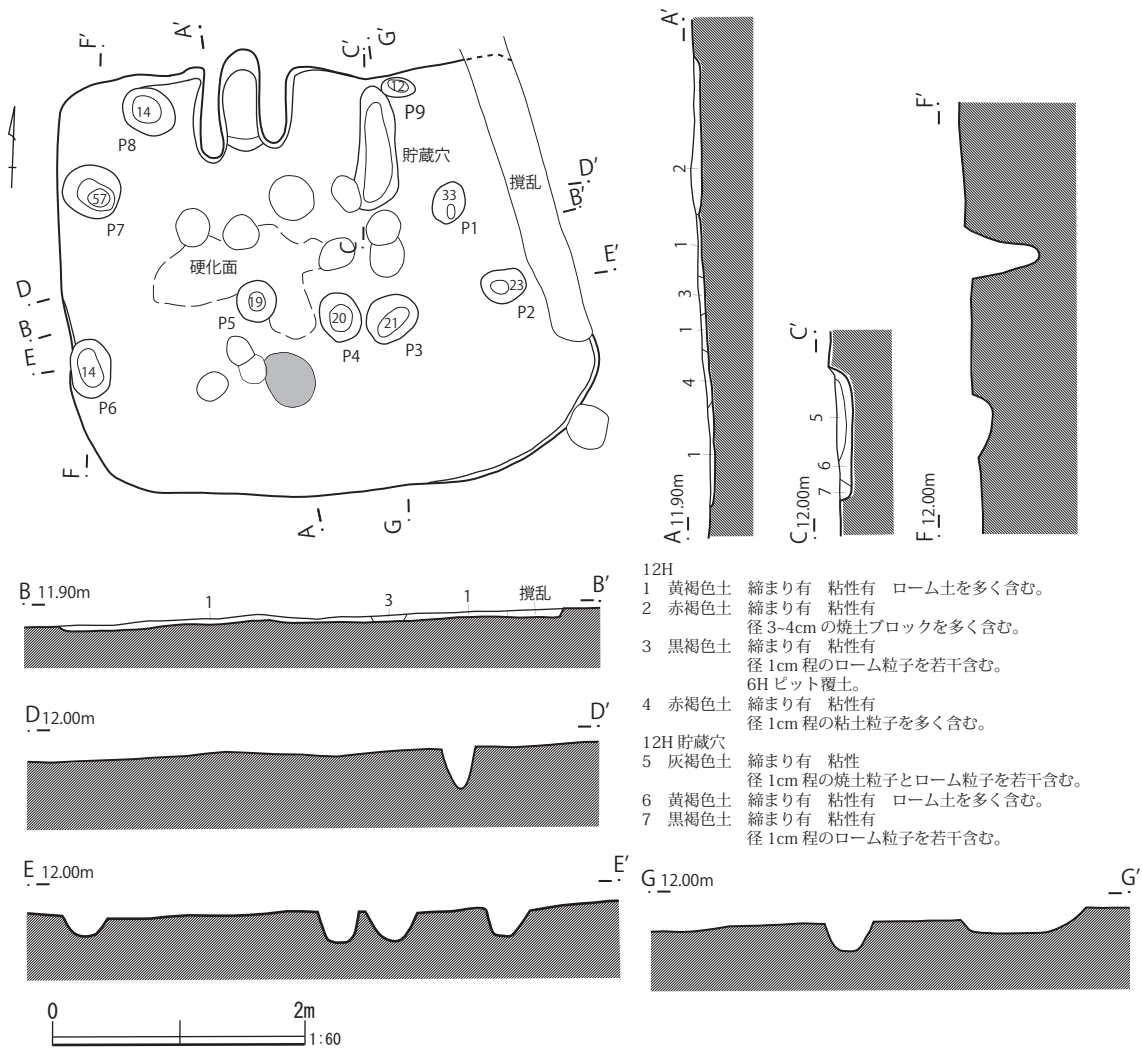
第16図 第11号住居跡遺物分布図

出土遺物 (第19図1~7)

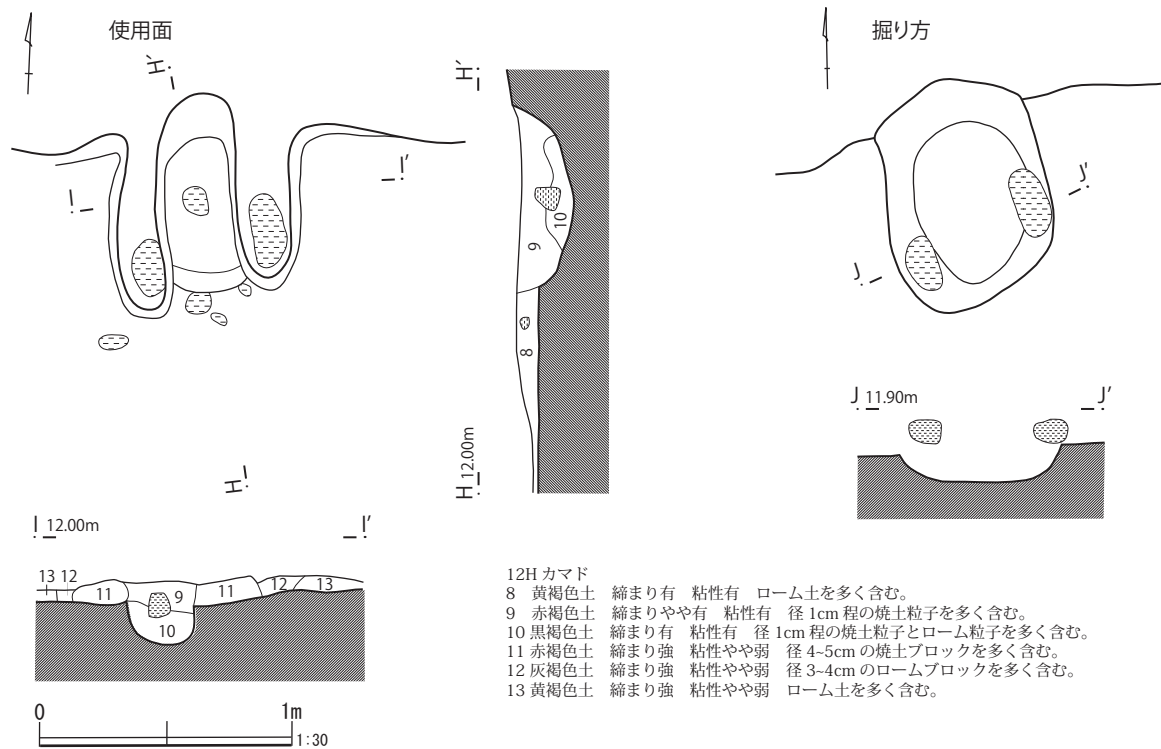
土器 1は胎土に繊維を含む胴部片で、外面に横位の、内面に斜位の条痕文が施される。2は土師器杯の口縁部片である。内外面とも赤彩が施される。3~7は土師器甕である。3は口縁部で最大径を測り、胴部の下半から底部に向かって大きく内湾する。4は口縁部に黒色部分が認められる。5は口縁部が外反する。6は口縁端部のみであるがやや外反気味である。7は長胴甕の胴部片である。

●第12号住居跡 (第17・18・19図)

C7・D7グリッドに位置する。東側は攪乱を受けているため住居の規模は定かではないが、検出部分から平面形は長軸約4.0m、短軸約3.3mのいびつな方形を呈すものと推定される。確認面から底面までの深さは約0.1mと非常に浅く、床面はほとんど削平された状態で検出された。住居の中央部でローム土を含む土で踏み固められた硬化面が認められた。住居南寄りの直径約0.5mの範囲で焼土の広がりが認められた。掘り込みは認められなかったが、炉跡の可能性も考えられる。主軸方位はN-13°-Wを指す。柱穴の規模は概ね0.3~0.5mの円形を呈し、P1・2が住居内東寄り、P6・7が住居内西寄りにそれぞれ位置し、上屋を支えた支柱穴であったと考えられる。貯蔵穴は住居の北東隅で検出し、長径1.0m、短径0.3mの長楕円形を呈する。床面からの深さは約0.2mを測る。壁溝は認められなかった。



第17図 第12号住居跡



第18図 第12号住居跡カマド

カマドは北壁に設置される。焚口部の間口は0.4m程を測る。袖部は0.6m程のものが両側に付く。大きく掘り方を掘削した後、中を黄褐色粘土で埋め戻すように整形しながら構築されている。袖部も奥壁で用いた粘土で構築し、内壁あるいは芯材として硬砂層由来の砂岩が使用されている。砂岩は袖部の両端部で検出したが、焚口周囲にも散在している。また、カマド周囲の直径約1.5mの範囲で焼土の広がり認められた。砂岩や焼土が焚口周囲に飛び散るような検出状況から、焚口と袖部の一部がカマド使用後に意図的に壊されたことを想定しておきたい。

出土遺物 (第19図8・9)

**土器** 8は土師器甕である。頸部から胴部片にあたり、その形態から長胴甕と思われる。頸部には、指頭による横位の撫でが重畳する。

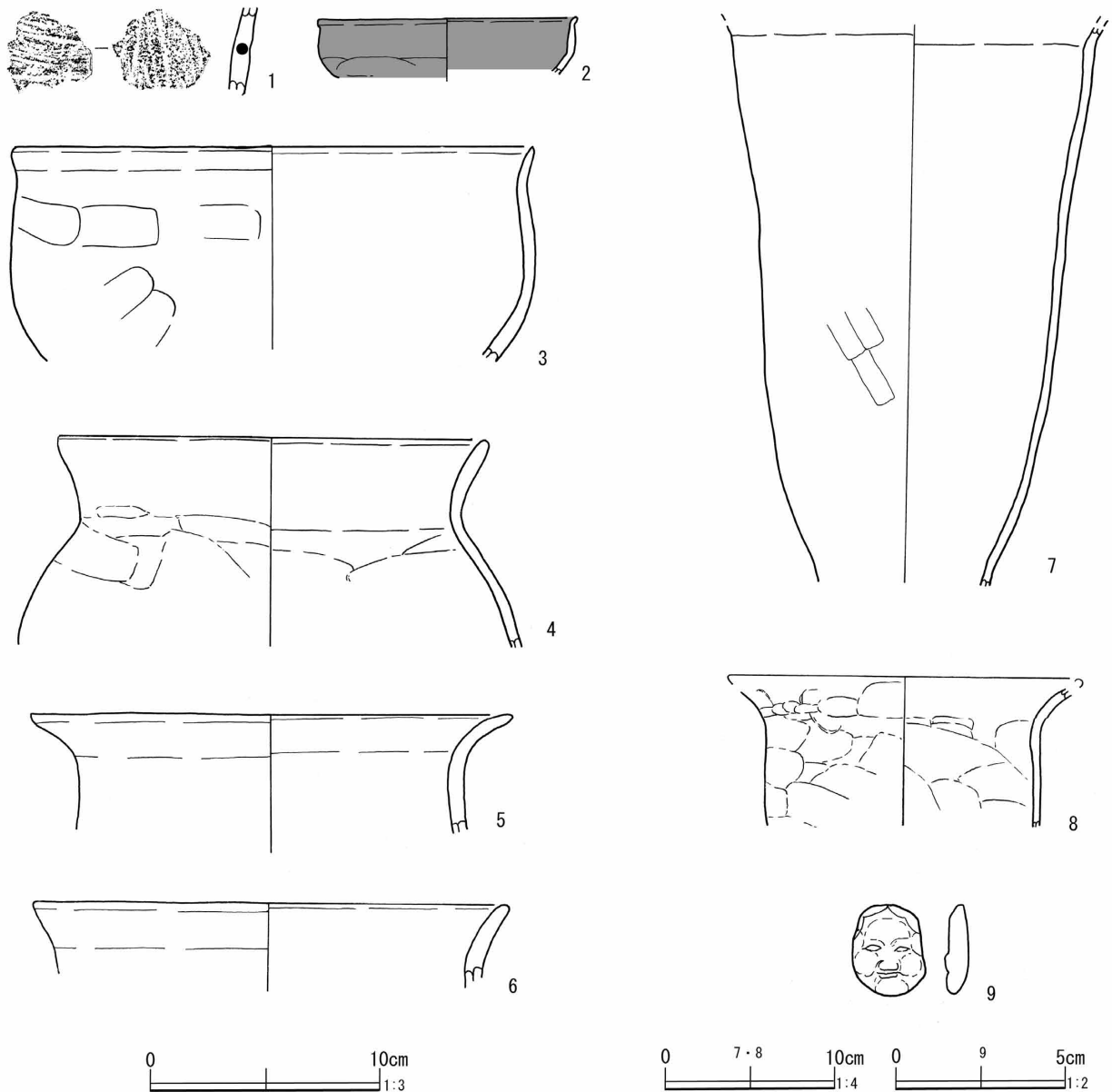
**土製品** 9はオカメ面を模した泥面子である。重量は4.3gを測る。

第8表 第11号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
19	2	土師器	坏	[11.2]	—	(2.5)	10	白・黒	普通	赤褐色	内外面赤彩
19	3	土師器	甕	[22.6]	—	(9.9)	10	雲母・白・黒	普通	黒褐色	
19	4	土師器	甕	[18.6]	—	(9.0)	10	雲母・白・黒	普通	明赤褐色	
19	5	土師器	甕	[21.0]	—	(5.2)	10	石英・雲母・礫	普通	橙色	
19	6	土師器	甕	[20.6]	—	(3.7)	10	石英・角・雲母・白	普通	橙色	
19	7	土師器	甕	—	—	(32.6)	20	石英・雲母・角・白・黒	普通	褐色	

第9表 第12号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
19	8	土師器	甕	[20.8]	—	(8.4)	10	雲母・角・白・黒	良好	暗橙色	



第19図 第11・12号住居跡出土遺物

●第13号住居跡（第20・21・25図）

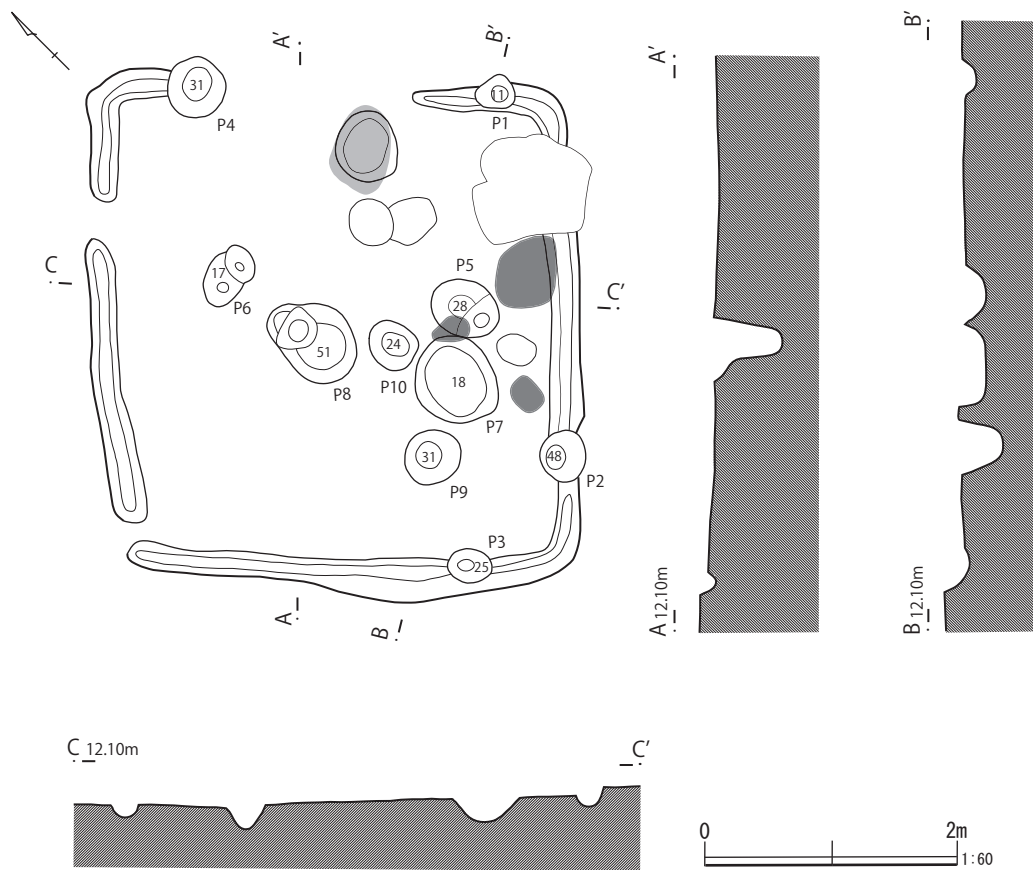
D8・E7・8グリッドに位置する。平面形は一辺約4.0mの方形を呈す。床面を含む住居の上面が大きく削平されているため、壁溝やピットによって住居の規模を窺うことができた。主軸方位はN-143°-Wを指す。住居の東寄りで直径0.3~0.6mの粘土の広がり3箇所が認められた。

カマド部分も上部が削平を受けていたが、住居内の北東寄りにカマドの焚口部分が僅かに残存しているのが認められた。直径約0.6mの焼土が広がり浅く窪んでいる。

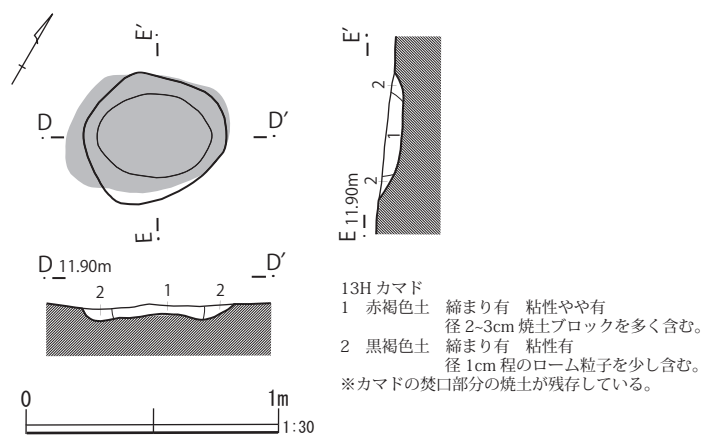
出土遺物（第25図1~6）

土器 1・2は土師器の口縁部片である。1は坏蓋模倣坏と思われる。2は口縁部から体部、体部から底部への境に明瞭な段を有する。3は土師器甕の底部片である。4は須恵器坏の口縁部片である。5は須恵器皿の口縁部片である。

石器 6は磨石である。全面に使用の痕跡が認められる。



第20図 第13号住居跡



第21図 第13号住居跡カマド



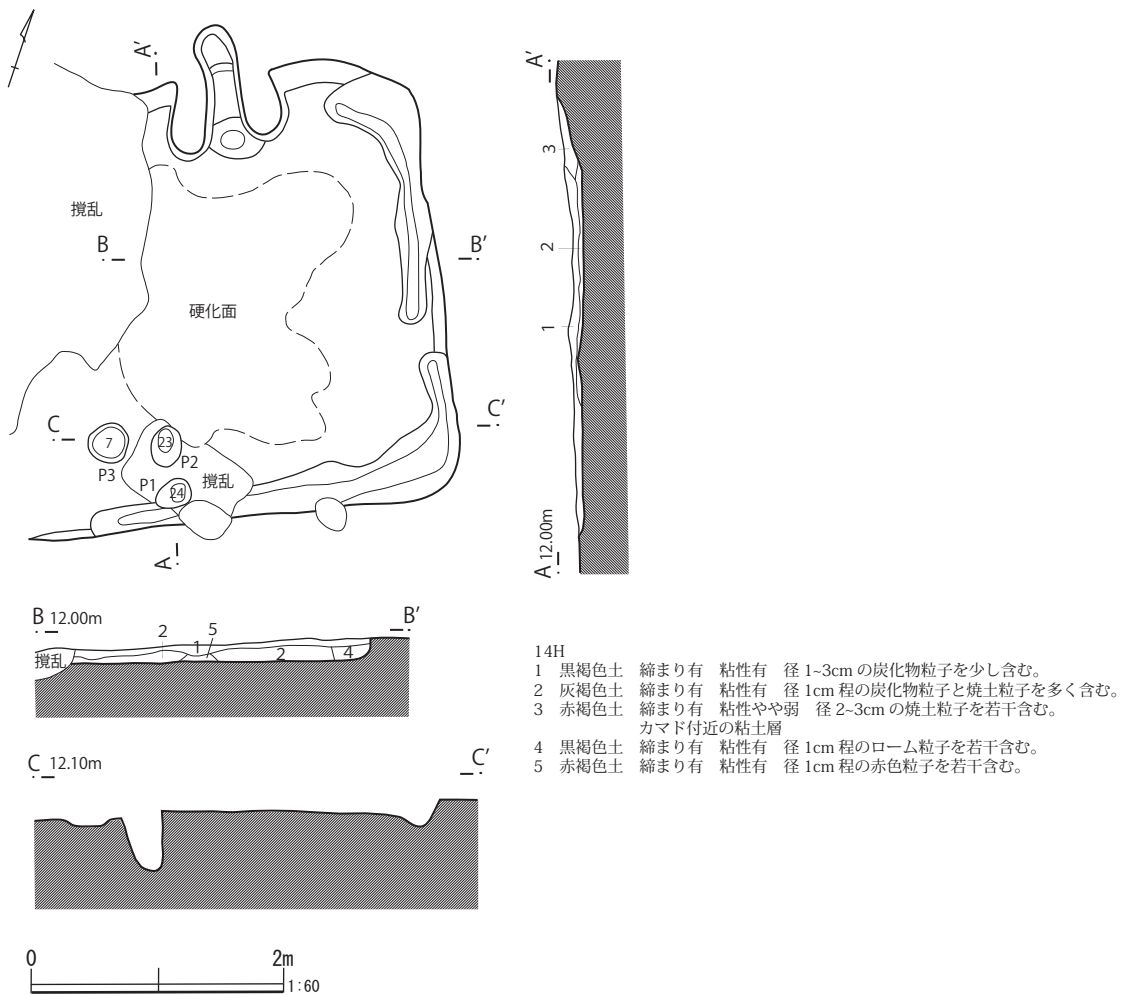
●第14号住居跡（第22・23・24・25図）

E6・7グリッドに位置する。西側は攪乱を受けているため住居の規模は定かではないが、検出部分から平面形は径3.5m程の正方形に近い形態を呈すものと推定される。主軸方位はN—37°—Wを指す。住居の中央部でローム土を含む土で踏み固められた硬化面が認められた。住居の出入口部と考えられる南寄りで約0.3mの円形を呈するピットが3基検出された。壁溝は一部途切れながら住居の東壁と南壁を巡っている。

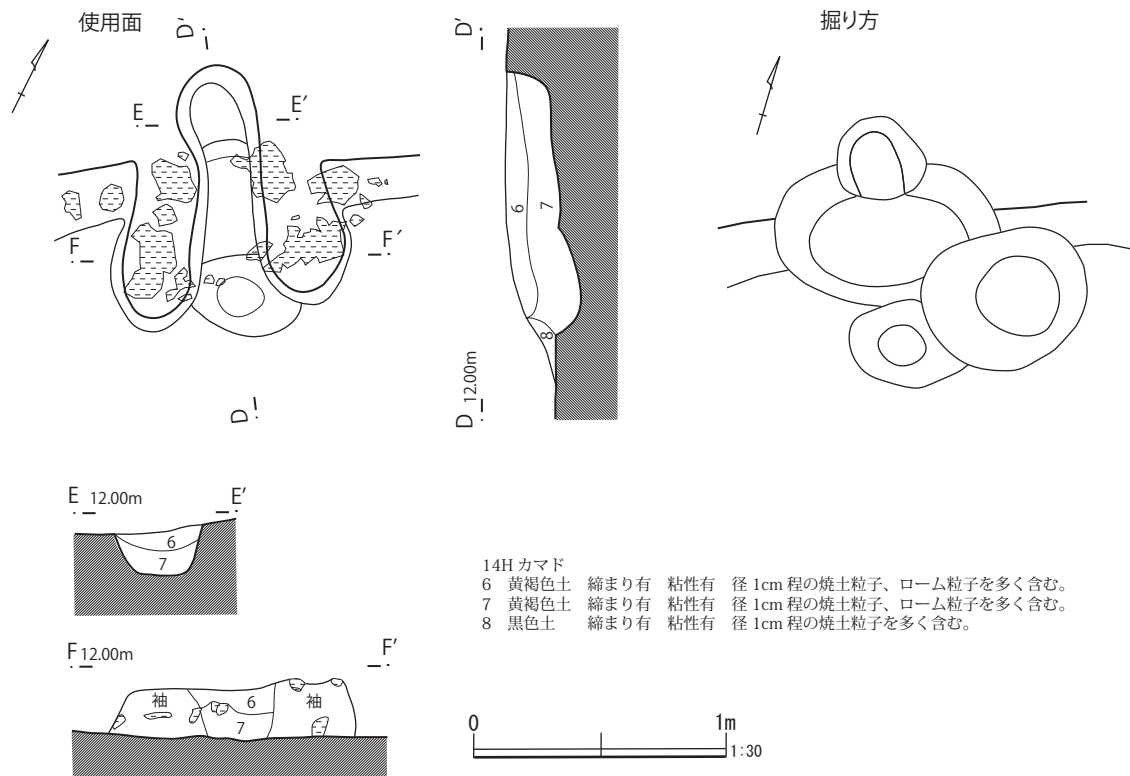
カマドは北壁に設置される。焚口部の間口は0.4m程を測る。袖部は0.3m程のものが両側に付く。袖部内とその周囲では、硬砂層由来の砂岩の欠片が集中して出土した。砂岩はカマド袖部の内壁あるいは芯材といった構築材として利用されたものと推定される。カマドは大きく掘り方を掘削した後、中を粘土で埋め戻すように整形しながら構築される。

遺物は住居の北東寄りや中央やや南寄り、カマド付近で出土している。住居の中央南寄りで土師器坏が出土している。

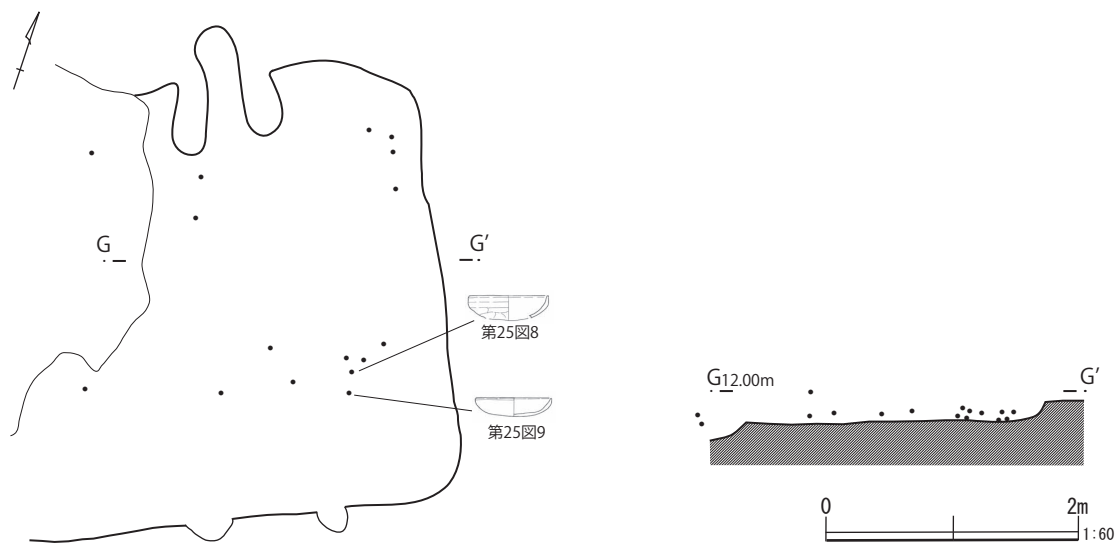
住居の床面直上から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、7世紀中頃から後半の値を得ている（IV章の1参照）。



第22図 第14号住居跡



第23図 第14号住居跡カマド

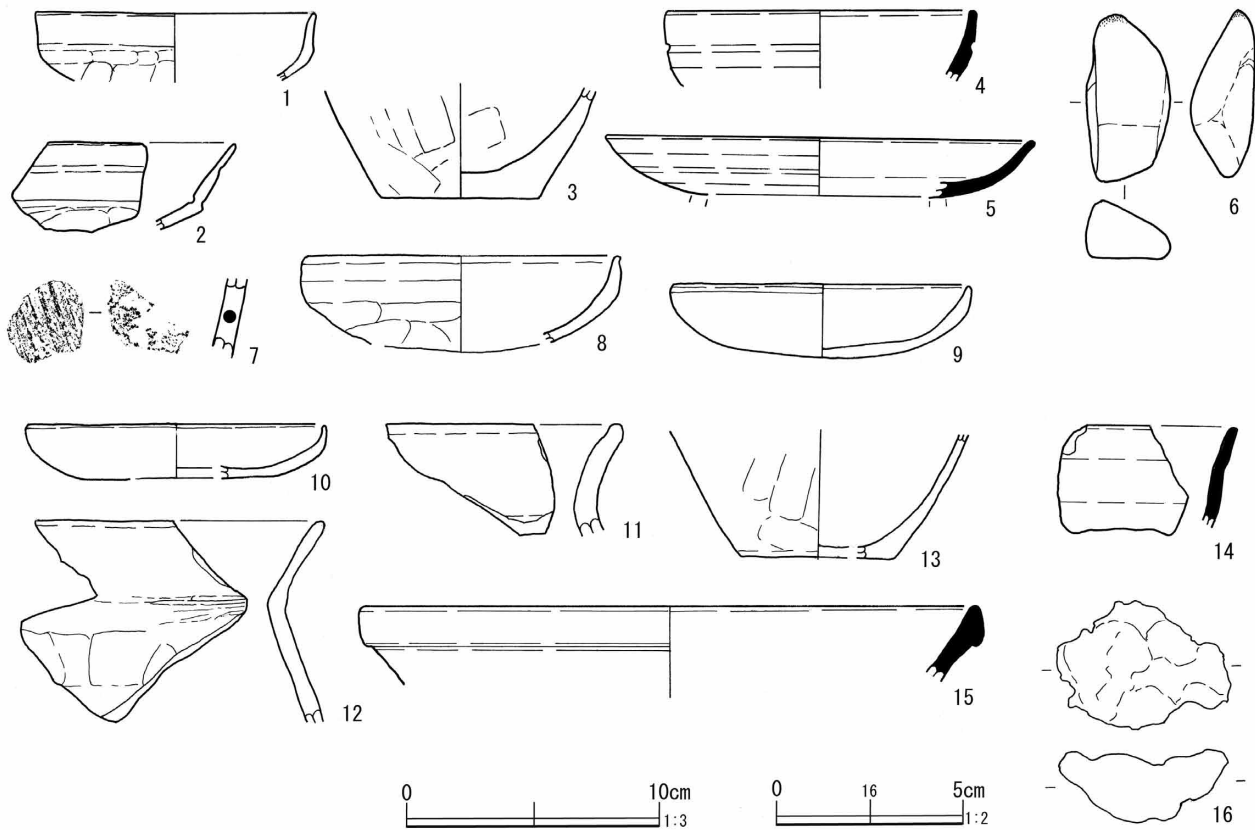


第24図 第14号住居跡遺物分布図

出土遺物 (第25図7~16)

**土器** 7は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。8~10は土師器坏である。8は有段口縁坏である。11~13は土師器甕で、11は口縁部片、12は口縁部から頸部片、13は底部片である。14は須恵器坏の口縁部片である。15は須恵器壺の口縁部片である。

**鉄滓** 16は椀形鍛冶滓である。近接する第1号鍛冶工房跡から運び込まれた可能性が考えられる。



第25図 第13・14号住居跡出土遺物

第10表 第13号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考	
25	1	土師器	坏	11.0	—	—	10	白・黒	良好	暗赤褐色		
25	2	土師器	坏	—	—	(3.6)	10	雲母・角・白	良好	黒褐色		
25	3	土師器	甗	—	6.2	(4.7)	10	礫	普通	橙色		
25	4	須恵器	坏	12.0	—	—	10	白・黒・礫	良好	にぶい黄褐色		
25	5	須恵器	皿	17.0	—	2.2	20	白	良好	にぶい黄褐色		
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考				
25	6	磨石	砂岩	6.5	3.3	2.2	59.7					

第11表 第14号住居跡出土遺物観察表

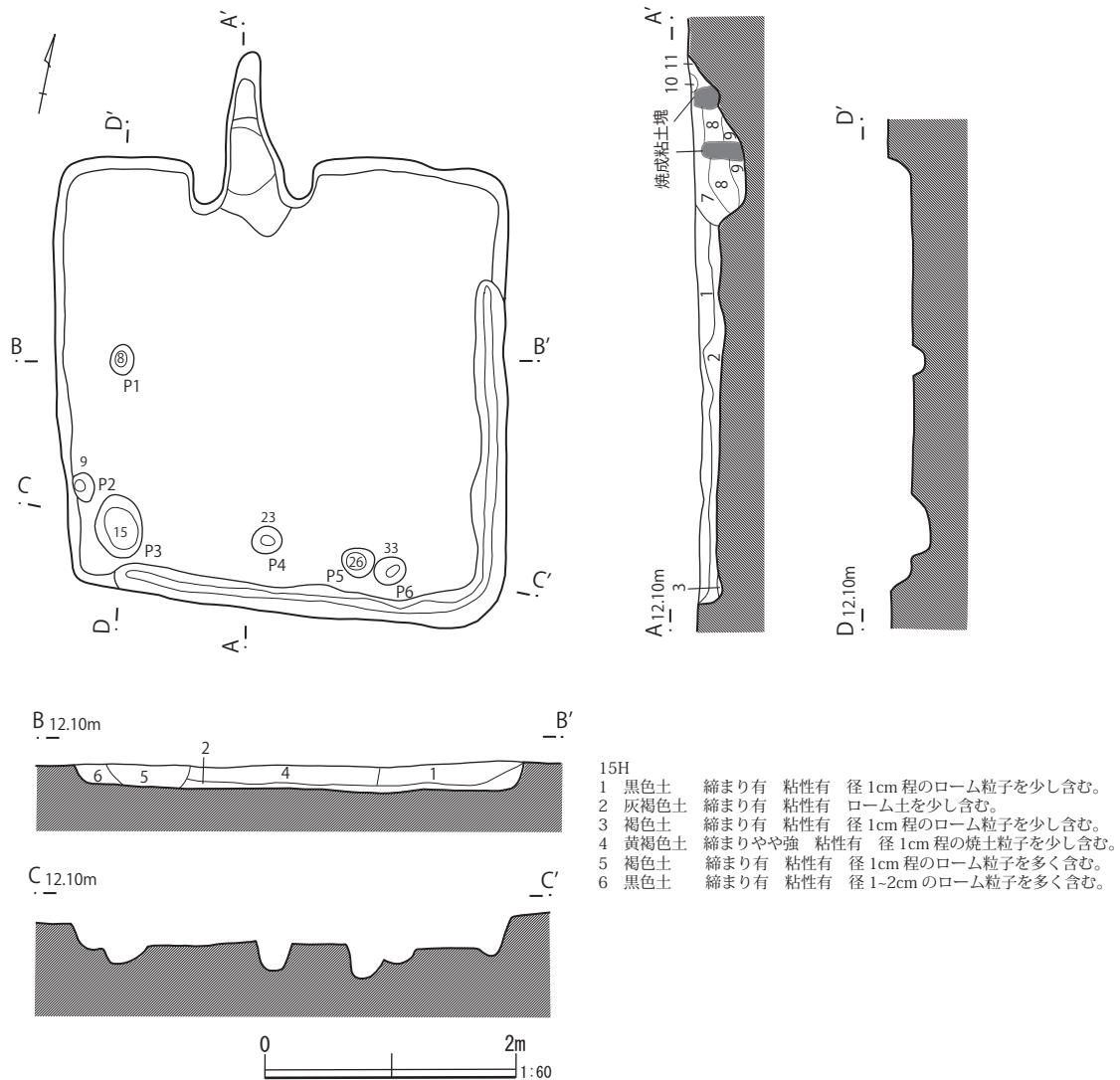
図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
25	8	土師器	坏	[12.2]	—	—	40	雲母・白・礫	普通	にぶい橙色	
25	9	土師器	坏	(11.6)	7.0	2.5	20	雲母・角・白・黒	普通	明褐色	
25	10	土師器	坏	(11.6)	—	2.9	30	雲母・白・黒・砂粒	普通	橙色	
25	11	土師器	甗	—	—	(4.5)	10	雲母・白・黒	普通	にぶい橙色	
25	12	土師器	甗	—	—	(8.0)	10	雲母・角・白	普通	にぶい褐色	
25	13	土師器	甗	—	(3.0)	(5.0)	10	雲母・角・白	普通	にぶい褐色	
25	14	須恵器	坏	—	—	(4.4)	10	礫・砂粒	良好	灰色	
25	15	須恵器	壺	[24.2]	—	(3.1)	10	礫・砂粒	良好	灰色	
図版	番号	器種		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着度	備考		
25	16	椀形鍛冶滓		6.8	9.1	4.9	165.0	1			

●第15号住居跡（第26・27・28・29図）

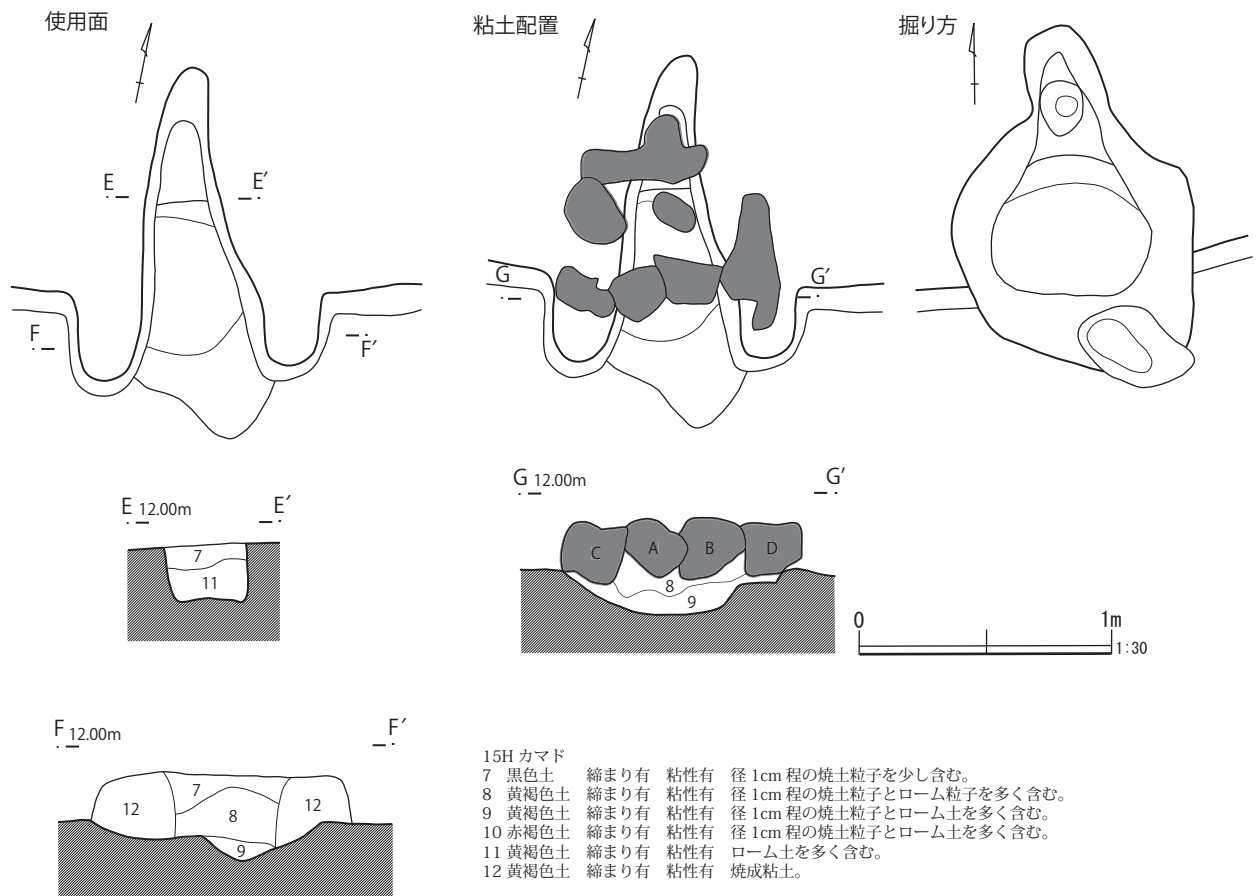
F6グリッドに位置する。平面形は一辺約3.7mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは約0.2mを測る。主軸方位はN—10°—Wを指す。住居の出入口部と考えられる南寄りで検出されたP4・5・6の3基は床面からの深さが0.2cm程を測り、上屋構造を支える柱穴であった可能性が考えられる。壁溝は住居の東壁と南壁を巡っている。

カマドは北壁に設置される。焚口部の間口は0.5m程を測る。袖部は0.3m程のものが両側に付く。カマドは黄褐色の粘土によって構築され、焼成粘土塊が焚口や煙道付近で検出された。焚口部には崩落した天井部が残っている。第27図のセクションGにおいては、袖部に設置された粘土C・Dと、焚口部に崩落した粘土Bの一部に崩落粘土Aがめり込んでいるのが認められた。

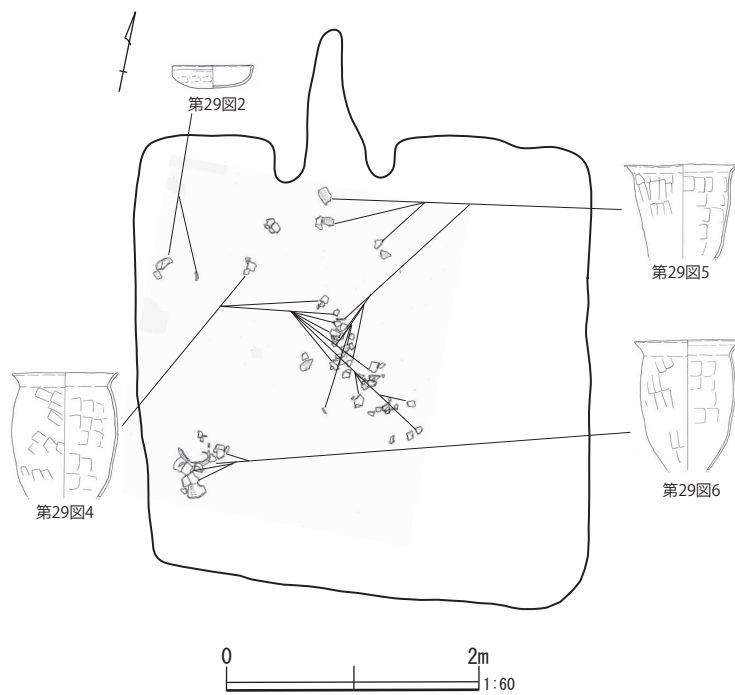
土器片が住居中央付近で集中して出土した。住居の西壁付近では土師器坏と土師器甕が破碎した状態で出土した。



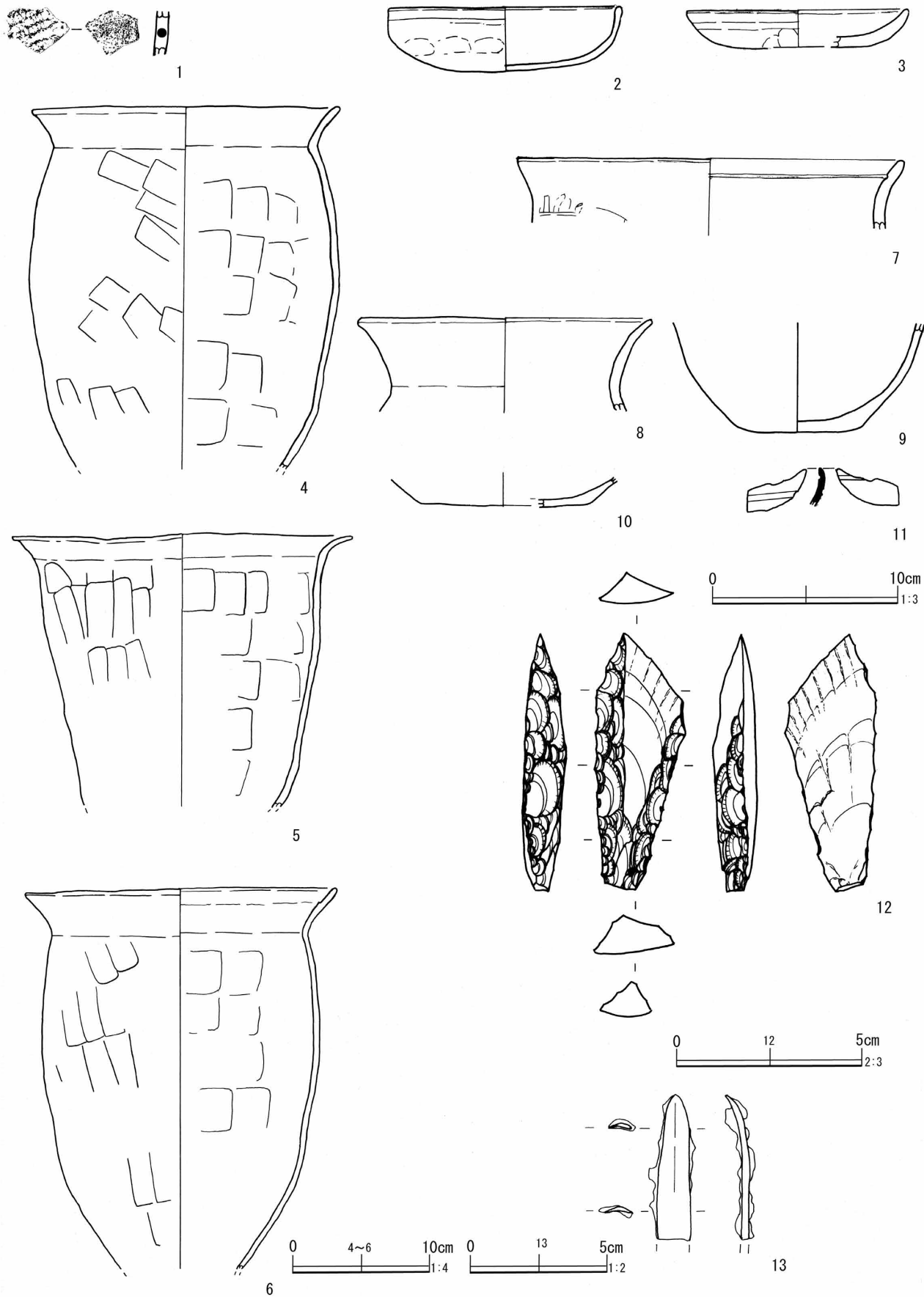
第26図 第15号住居跡



第27図 第15号住居跡カマド



第28図 第15号住居跡遺物分布図



第29图 第15号住居跡出土遺物

## 出土遺物（第29図）

**土器** 1は胎土に繊維を含む胴部片で、外面に斜位の単節縄文が施される。2・3は土師器坏である。4～6は土師器甕である。内外面とも2～3cm幅のヘラケズリの痕跡が認められる。7・8も土師器の口縁部片である。9・10は土師器の底部片である。9は4と同一個体である可能性が高い。11は須恵器坏の口縁部片である。欠損後研磨し、口唇部を再生している。

**石器** 12は切り出し形のナイフ形石器である。縦長剥片を縦位に用い、打点部側を基部として用いている。一側縁の全てに刃潰し加工を施し、もう一方の側縁も基部から半ば付近まで加工が施されている。刃部断面は三角形を呈す。

**鉄器** 13は鉄鉈の刃部片である。先端部がやや反り、欠損部付近にも裏すきが認められる。

第12表 第15号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
29	2	土師器	坏	12.5	—	3.5	95	角・白・黒	普通	橙色	
29	3	土師器	坏	[12.0]	—	2.0	10	角・白・黒・礫	普通	明赤褐色	
29	4	土師器	甕	22.4	—	(26.2)	70	雲母・角・白	良好	褐色	
29	5	土師器	甕	24.4	—	(19.8)	50	雲母・角・白	良好	褐色	
29	6	土師器	甕	22.6	—	(27.5)	70	雲母・角・白・礫	良好	褐色	
29	7	土師器	甕	[22.0]		(3.8)	10	白・黒・砂粒	良好	赤褐色	
29	8	土師器	甕	[15.7]	—	(5.0)	10	白・礫	良好	赤褐色	
29	9	土師器	甕	—	7.0	(5.5)	20	石英・白・礫	普通	暗褐色	
29	10	土師器	甕	—	[8.8]	(1.5)	10	白	普通	橙色	
29	11	須恵器	坏	—	—	(1.5)	10	白・黒	良好	灰色	
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
29	12	ナイフ形石器	ホルンフェルス	6.9	2.5	1.1	17.1	切り出し形ナイフ			
図版	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考				
29	13	鉄鉈	(5.2)	1.2	0.3	4.5					

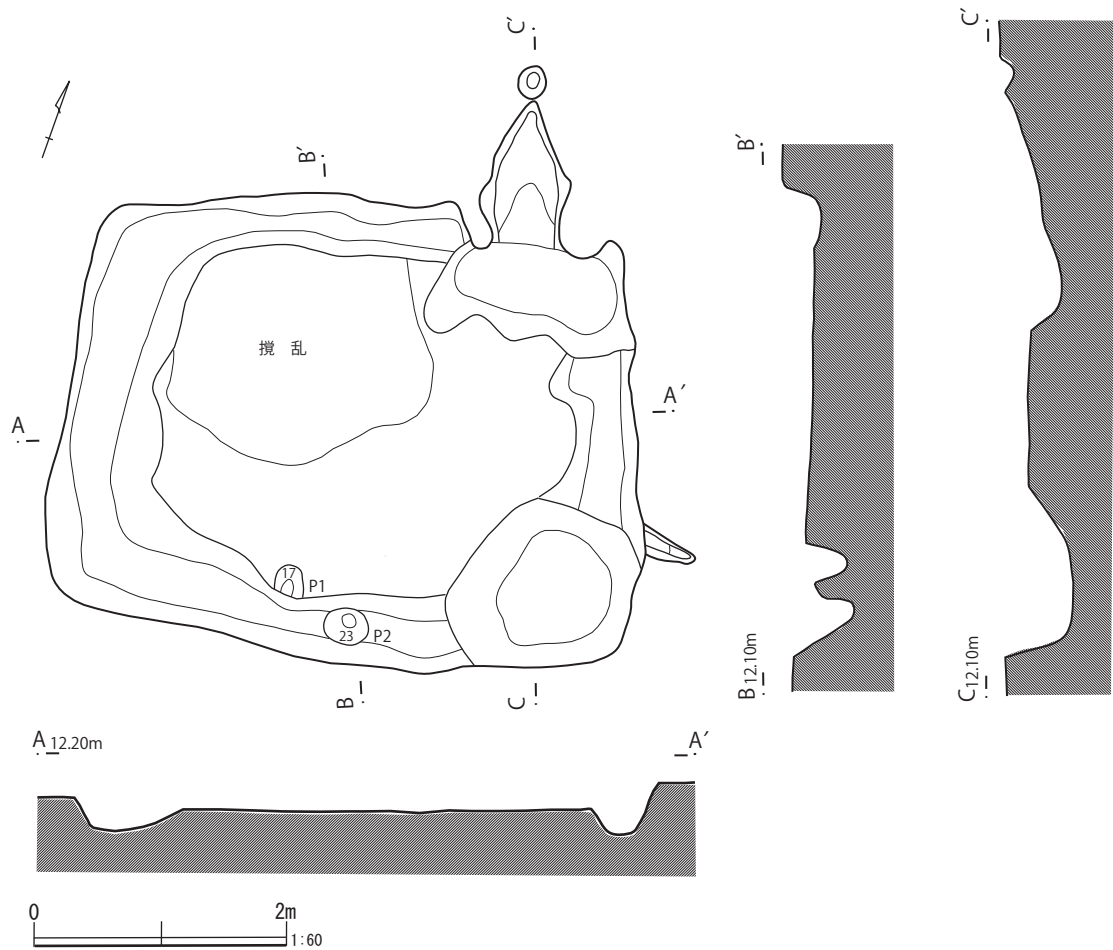
## ●第16号住居跡（第30・31・32・33・34・35図）

G5・6・H5グリッドに位置する。平面形はいびつな方形を呈し、長軸約4.5m、短軸約3.6mを測り、主軸方位はN-15°-Wを指す。本住居跡は、カマドの付け替えや壁溝の掘り直し等、住居の変遷が認められた。便宜上、カマド付け替え以前の古相の住居を第16A号住居跡（第30・31図）、カマド付け替え後の新相の住居を第16B号住居跡（第32・33図）とする。

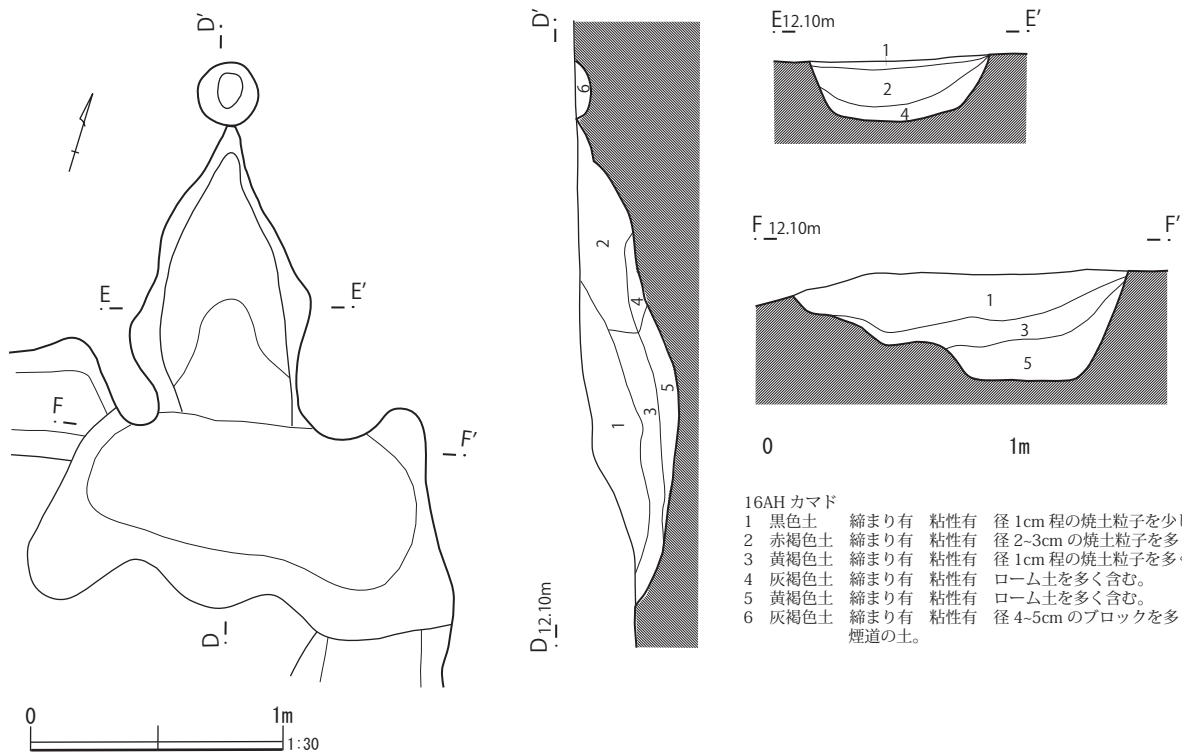
第16A号住居跡は、確認面から床面までの深さは約0.3mを測る。壁溝は最大幅約0.8mを測り、カマド部を除き住居周囲を全周する。カマドは北東隅に設置される。煙道部が良好に遺存し、屋外へ延びる直径0.2m程の円形の煙出し部が認められた。

第16B号住居跡は、確認面から床面までの深さは約0.1mを測る。壁溝は最大幅約0.3mを測り、カマド部及び南壁で途切れる。カマドは南東隅に設置される。焚口付近で認められる粘土の広がり、袖部を構築していたものと推定される。煙道は屋外に向かって東側に突き出す。

住居南寄りで須恵器坏が出土している。



第30図 第16A号住居跡

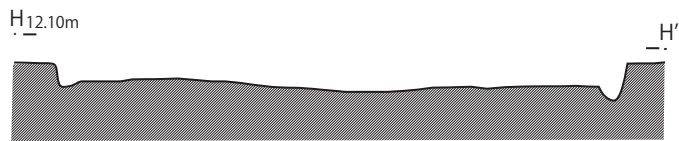
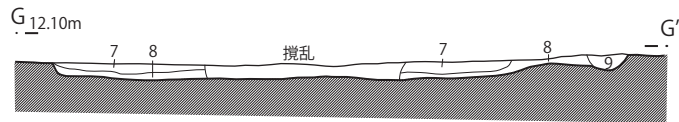
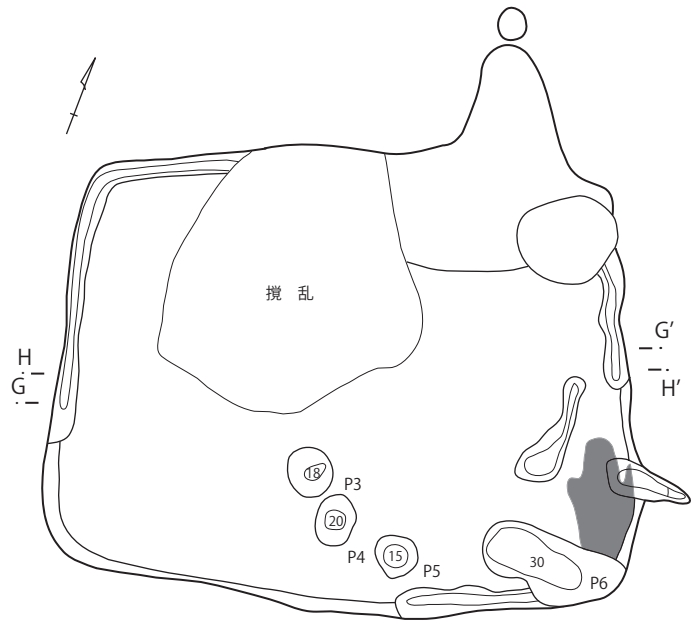


16AH カマド

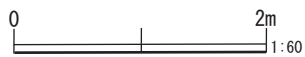
- |   |      |      |     |                        |
|---|------|------|-----|------------------------|
| 1 | 黒色土  | 締まり有 | 粘性有 | 径1cm程の焼土粒子を少し含む。       |
| 2 | 赤褐色土 | 締まり有 | 粘性有 | 径2-3cmの焼土粒子を多く含む。      |
| 3 | 黄褐色土 | 締まり有 | 粘性有 | 径1cm程の焼土粒子を多く含む。       |
| 4 | 灰褐色土 | 締まり有 | 粘性有 | ローム土を多く含む。             |
| 5 | 黄褐色土 | 締まり有 | 粘性有 | ローム土を多く含む。             |
| 6 | 灰褐色土 | 締まり有 | 粘性有 | 径4-5cmのブロックを多く含む。煙道の土。 |

第31図 第16A号住居跡カマド

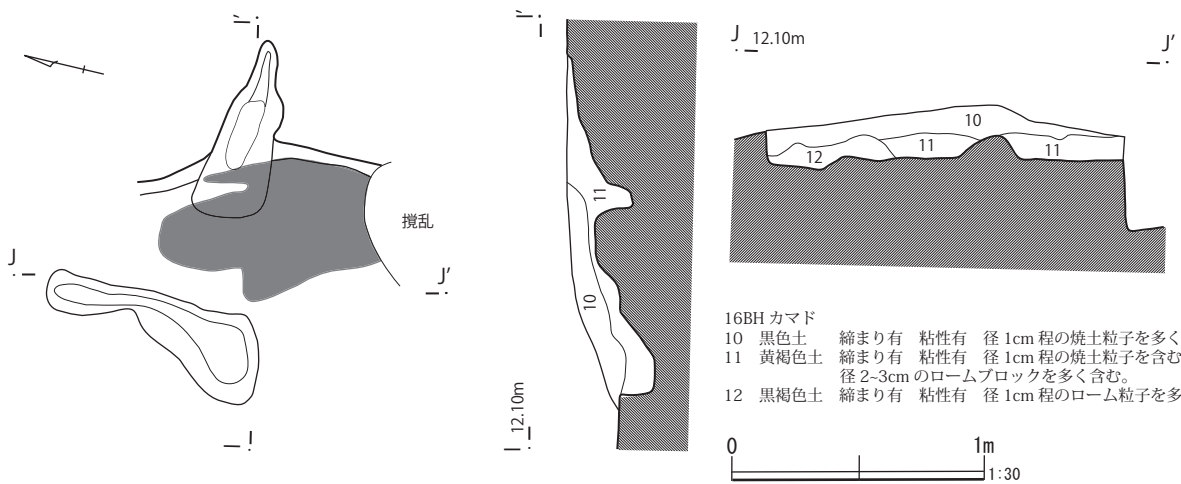




- 16BH  
 7 黒色土 締まり有 粘性有 径1cmのローム粒子を多く含む。  
 8 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。  
 9 黒色土 締まり有 粘性有 径3-4cmのロームブロックを多く含む。



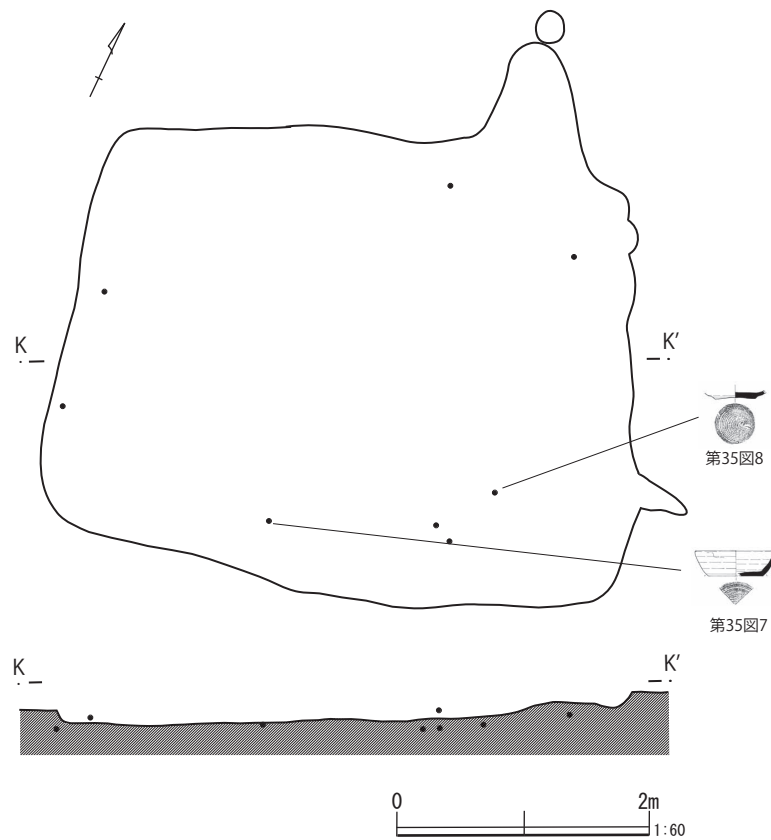
第32図 第16B号住居跡



- 16BH カマド  
 10 黒色土 締まり有 粘性有 径1cm程の焼土粒子を多く含む。  
 11 黄褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程の焼土粒子を含む。  
 径2-3cmのロームブロックを多く含む。  
 12 黒褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程のローム粒子を多く含む。



第33図 第16B号住居跡カマド



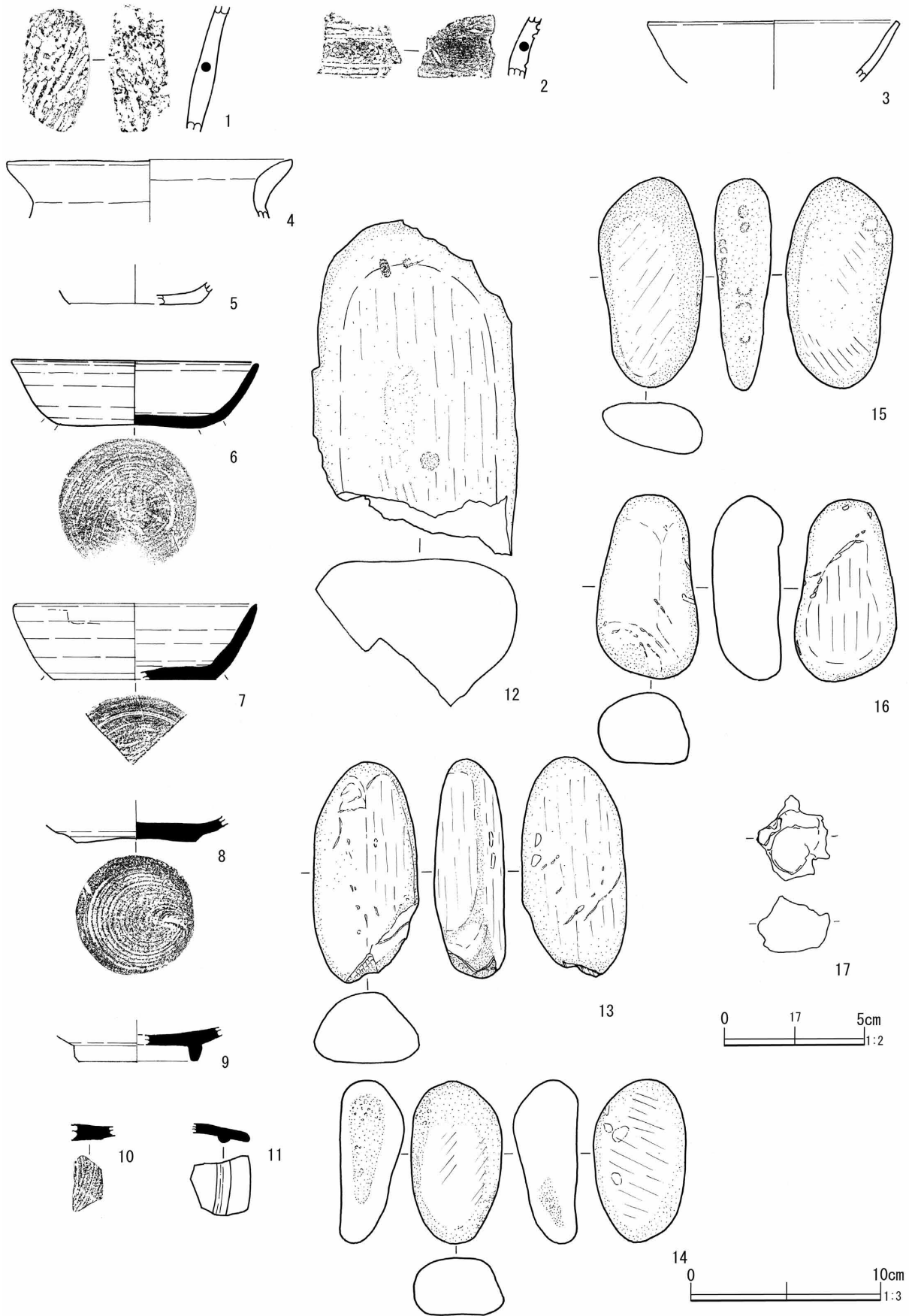
第34図 第16号住居跡遺物分布図

#### 出土遺物（第35図）

**土器** 1は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。2は胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を地文とし、半截竹管によって横位の細い平行沈線が施される。黒浜式期の資料と考えられる。3は土師器坏の口縁部片である。4・5は土師器甕で4は口縁部片、5は底部片である。6～8は須恵器坏で、6・7は口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。いずれも胎土に白色針状物質が認められ、南比企産と考えられる。9は須恵器有台坏である。高台部は貼り付けによるものである。10は小片のため詳細は不明であるが、須恵器坏あるいは壺の底部片と思われる。11は須恵器蓋である。

**石器** 12・13・16は敲石兼磨石である。12は裏面を欠損するが、残存する表面には使用痕が顕著である。14は敲石、15は磨石である。

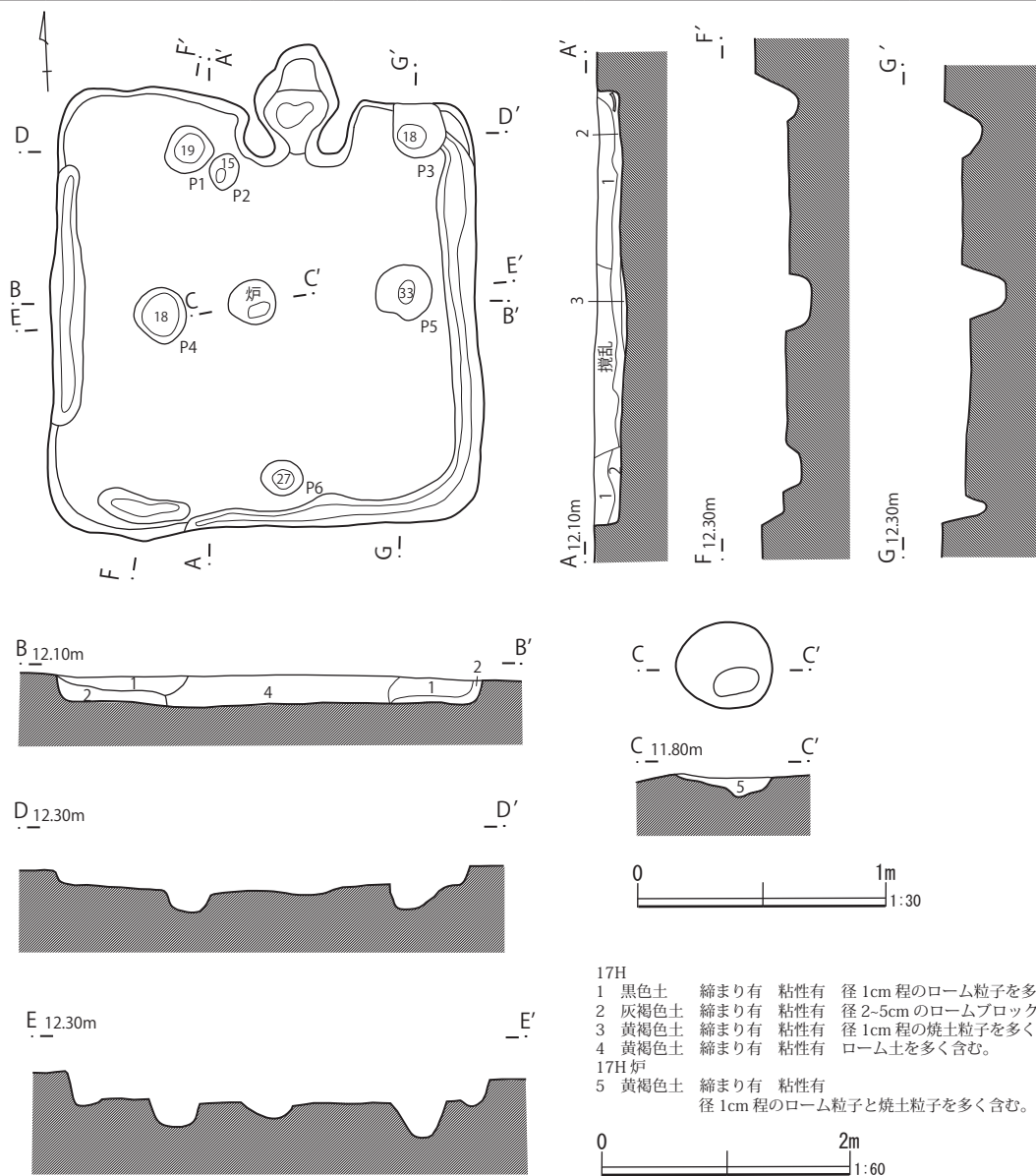
**鉄滓** 17は流動滓である。近接する第1号鍛冶工房跡から運び込まれた可能性が考えられる。



第35图 第16号住居跡出土遺物

第13表 第16号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
35	3	土師器	坏	[13.2]	—	(3.0)	10	白・砂粒	普通	橙色	
35	4	土師器	甕	[15.0]	—	(3.0)	10	雲母・角・白	普通	黒褐色	
35	5	土師器	甕	[6.8]	—	(1.1)	10	雲母・角・白	普通	赤褐色	
35	6	須恵器	坏	13.0	7.1	3.4	60	針・白・黒	良好	灰色	南比企産
35	7	須恵器	坏	[12.8]	[8.4]	4.0	20	針・白・黒	普通	灰色	南比企産
35	8	須恵器	坏	—	6.2	(1.3)	30	針・白・黒	普通	灰色	南比企産
35	9	須恵器	有台坏	—	[6.2]	(1.8)	10	黒	普通	灰白色	
35	10	須恵器	坏か	—	—	(0.8)	10	白	普通	灰色	
35	11	須恵器	蓋	—	—	(1.0)	10	黒	やや不良	灰色	
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
35	12	敲石兼磨石	砂岩	(17.6)	10.8	7.6	1,465.0				
35	13	敲石兼磨石	砂岩	11.5	5.4	3.8	325.0				
35	14	敲石	砂岩	8.5	4.8	3.4	190.0				
35	15	磨石	砂岩	11.1	5.4	3.0	240.0				
35	16	敲石兼磨石	砂岩	9.6	5.3	3.7	280.0				
図版	番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着度	備考			
35	17	流動滓	6.0	5.1	4.0	110.6	0				



第36図 第17号住居跡

●第17号住居跡（第36・37・38・39図）

F4・5・G4・5グリッドに位置する。平面形は一辺約3.4mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは約0.2mを測る。主軸方位はN-3°-Wを指す。柱穴の規模は概ね0.3~0.5mの円形を呈し、P1・3・4・5の支柱穴と住居南寄りP6を合わせた5本柱の住居が想定される。壁溝は一部途切れるものの、カマドのある北壁を除く壁際で確認された。住居の中央部に径0.4m程の炉跡が検出された。床面から0.2m程の掘り込みがあり、焼土粒子を多く含む覆土が認められた。

カマドは北壁に設置される。焚口部の間口は0.2m程でやや狭い。袖部は0.4m程のものが両側に付く。カマドは黄褐色の粘土によって構築され、芯材などの痕跡は認められなかった。

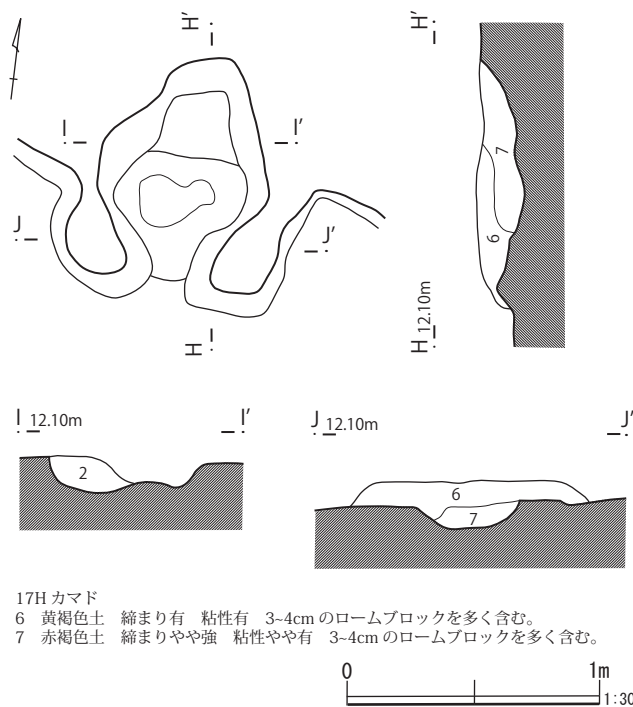
住居南寄りで須恵器短頸壺が、住居やや北寄りで須恵器坏や鉄鎌が出土している。

出土遺物（第39図）

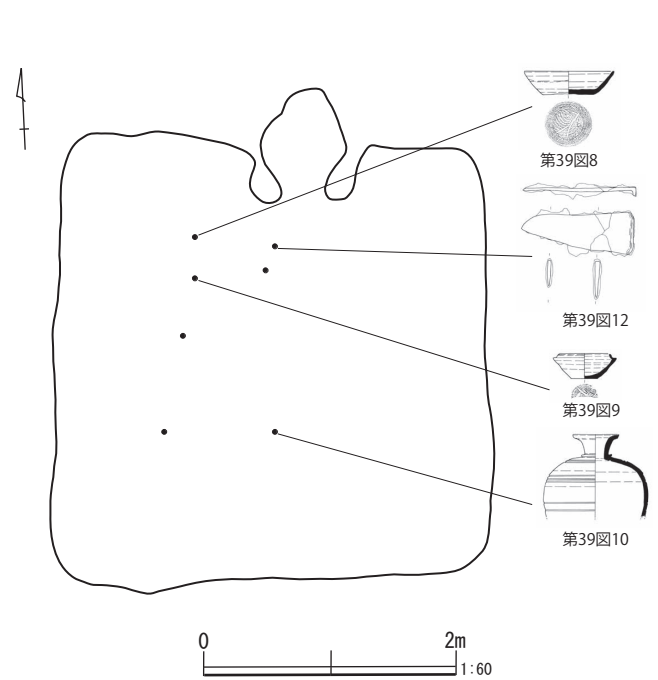
土器 1~4は胎土に繊維を含む。1は平縁の口縁部片で、外面に斜位の、内面に横位の条痕文が施される。2~4は表裏に縦位から斜位の条痕文が施される胴部片である。5・6は土師器坏である。7は土師器甕の口縁部片である。8は須恵器坏で口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。色調は赤褐色であるが堅緻に焼成される。胎土に白色針状物質が認められ、南比企産と考えられる。底部は糸切りの後、ヘラでY字状に削った痕が認められる。8世紀前半の所産であろうか。9は受け口部をもつ須恵器の坏身である。やや斜位の水挽痕が顕著に残る。10は須恵器の短頸壺である。欠損した下半部側の破面を下にして住居床面に正置した状態で出土した。胴部外面に計7条の沈線（1~3mm幅）が認められる。胴部と頸部との継ぎ目上に突帯が取り付けられる。特徴的な突帯を除けば、8世紀代の湖西窯産のものの中に似た形状のものが散見される。

石器 11は敲石である。全体的に摩耗が著しい。

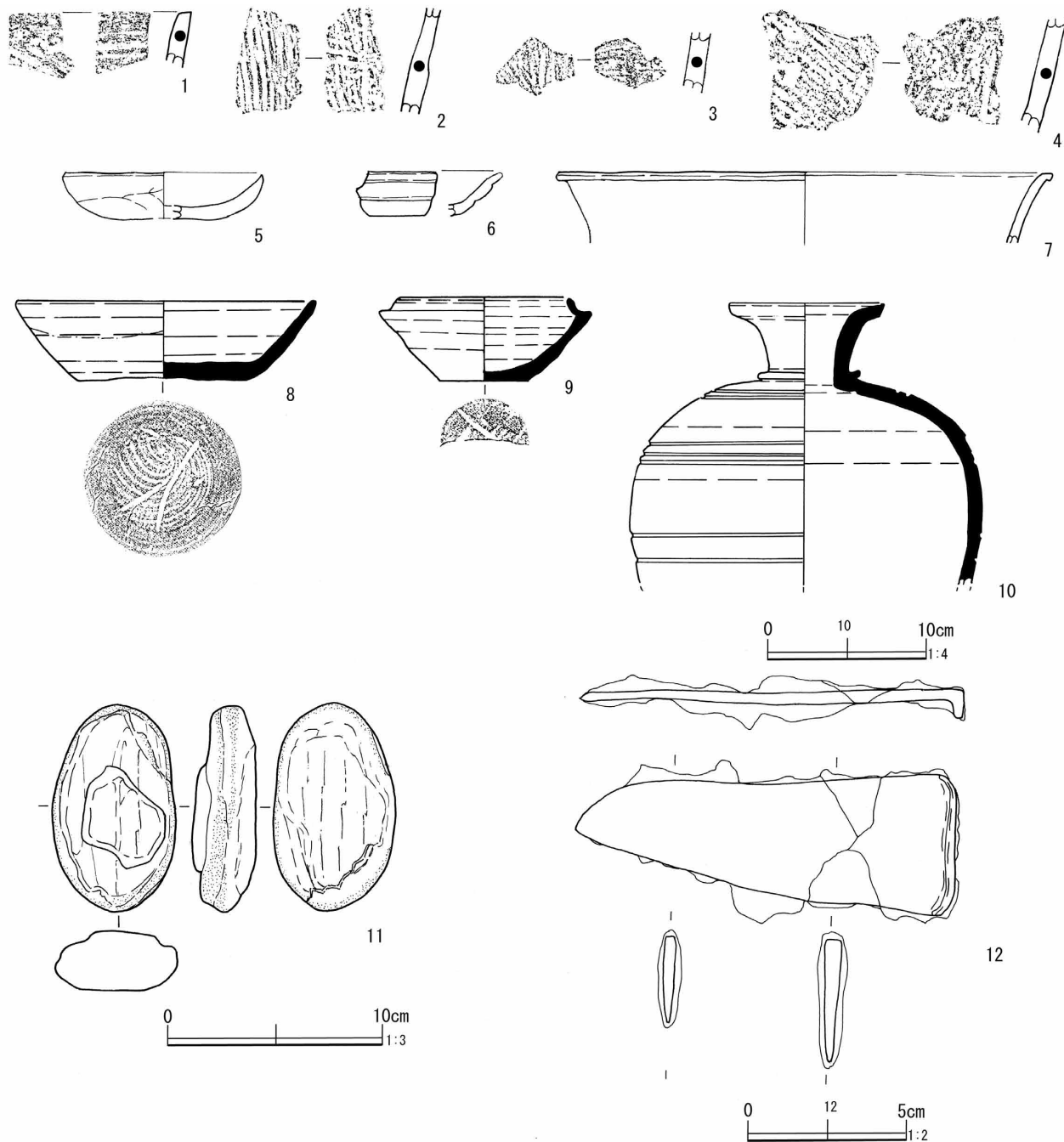
鉄器 12は鉄鎌である。細片に分かれるが、刃部から基部まで残存する。研ぎ減りによる影響も受けているのであろうが、直刃に近い形態を呈する。



第37図 第17号住居跡カマド



第38図 第17号住居跡遺物分布図



第39図 第17号住居跡出土遺物

第14表 第17号住居跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
39	5	土師器	坏	[9.2]	[6.0]	2.1	20	角・白・黒	普通	橙色	
39	6	土師器	坏	—	—	(2.2)	10	角・白・黒	普通	にぶい黄橙色	
39	7	土師器	甕	[23.0]	—	(3.0)	10	雲母・白	良好	暗赤褐色	
39	8	須恵器	坏	13.9	7.8	3.7	70	針・白・砂粒	良好	赤褐色	南比企産
39	9	須恵器	坏	7.8	4.0	3.9	30	白・黒	良好	灰色	
39	10	須恵器	短頸壺	9.7	—	(17.5)	40	白・黒	良好	灰色	湖西産か
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
39	11	敲石	不明	9.6	5.7	2.8	210.0	結晶片岩系のもの			
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
39	12	鉄鎌		11.8	4.4	0.4	48.6				

## (2) 鍛冶工房跡

### ●第1号鍛冶工房跡（第40・41・42・43・44・45・46・47・48・49・50・51・52・53図）

G7・8・H7・8グリッドに位置する。平面形は一辺約5.0mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは約0.6mを測る。主軸方位はN—23°—Wを指す。ピットの配置や床面からの掘削深度から、P4・5・6・7が支柱穴として機能する4本柱の構造が想定される。工房南壁際にはピットが並列しており、出入口部を構成する柱穴と考えられる。支柱穴であるP5はP1・9への柱位置の付け替えが行われた可能性もある。その場合、P5と重複するP10が貯蔵穴として機能していた可能性も想定される。壁溝はカマド部と南壁で途切れる。北壁と東壁の一部では壁溝内で柱穴が認められた。

カマドは北壁に設置される。焚口部の間口は0.6m程を測り、袖部は0.3m程のものが両側に付く。カマドは粘土によって築かれ、袖部には幅0.2m程の焼成粘土が構築材として用いられていた。

工房の中央やや西寄りには炉が設置される。長径約1.0m、短径0.5mの楕円形を呈し、東西2箇所さらに深い掘り込みが認められた。西側の掘り込みは径0.3m程の円形を呈し、東側の掘り込みは長径約0.4m、短径約0.2mの楕円形を呈し、いずれも床面から底までの深さは0.2m程である。東側の掘り込みの底面は還元面で堅く焼き締まり、繰り返し被熱を受けた火床であると考えられる。なお、炉の検出面よりやや上層で硬化した鉄滓が面的に広がる箇所が認められた（鉄滓硬化面）。平面上の位置は炉の西側に一部が重複する。炉の底面からは0.2m程浮いた位置であり、炉の操業と直接関係するものかは不明である。炉床の東隣には流出した滓や炭、焼土を掻き出すための廃滓坑が設けられる。長径約1.0m、短径0.8mの不正円形を呈し、床面からの深さは0.3m程を測り、底面は皿状に窪む。廃滓坑の上面には焼土の広がりが認められた。炉には明確な羽口装着溝は認められなかったが、廃滓坑が炉の東側に設置されることから、西側からの一方向からの送風か、両吹きタイプの鍛冶炉の場合、南北2箇所に羽口が取り付けられて送風された可能性がある。

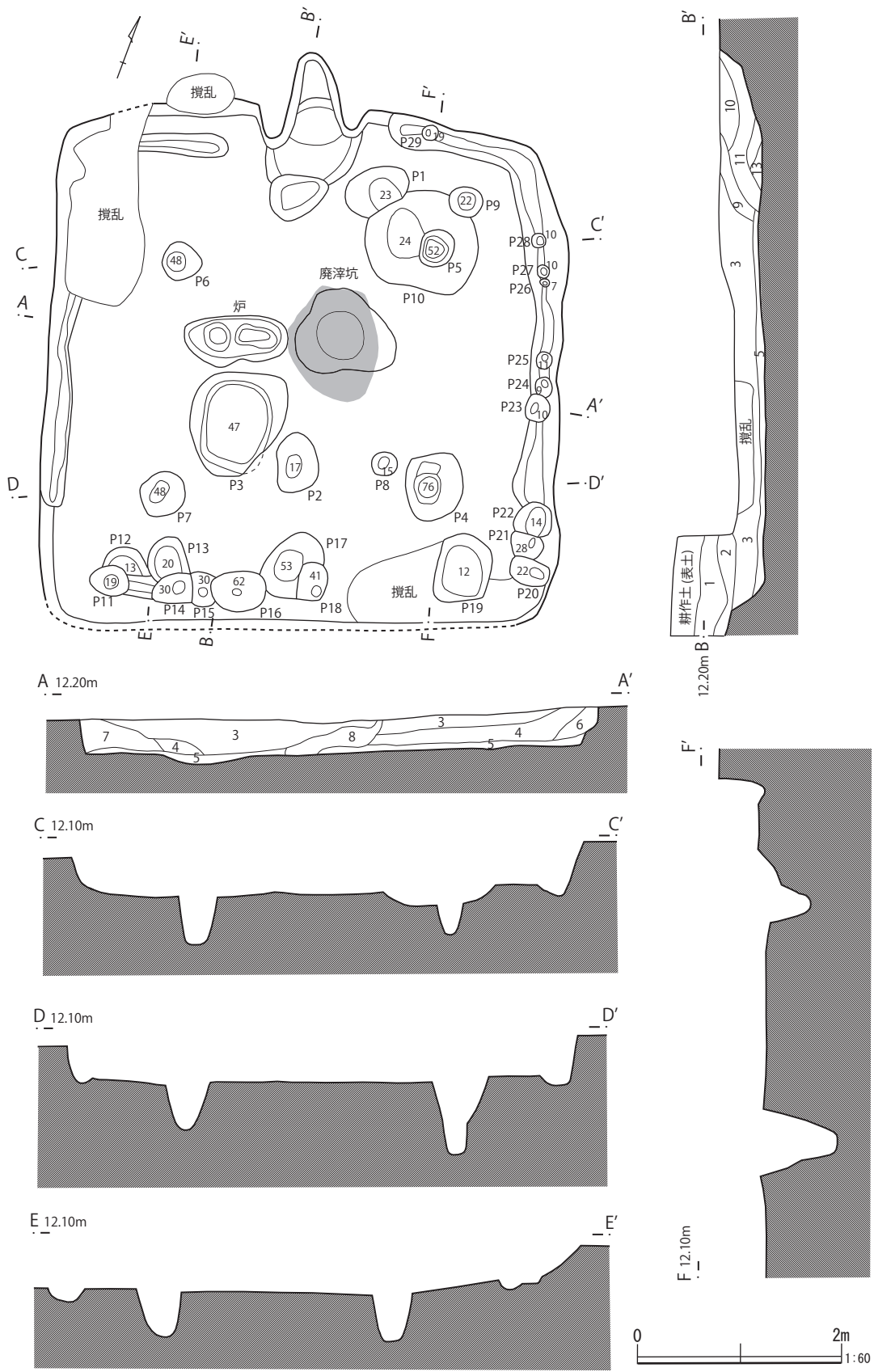
P3の底面付近では、第48図2の完形の須恵器杯が口縁部を上にして正置した状態で出土した。工房廃絶時に意図的に埋納したものであろうか。

工房の中央部で混土貝層を検出した。貝層の範囲は長径約1.0m、短径約0.6mを測る。貝層の堆積は厚さ15～20cm程で、工房の床面からは8～10cm程浮いた状態で検出した。工房の廃絶後に投棄されたものと考えられる。出土貝類の組成は第16表の通りであるが、マガキやハマグリといった海水産貝類とマツカサガイやオオタニシ等の淡水産貝類、さらには陸生貝類が混じった状態で出土した。

### 出土遺物（第45・46・47・48・49・50・51・52・53図）

**土器** 第45図1～16は胎土に繊維を含む。1は縦位の条痕文の上に、斜行する4条のミミズ腫れ状の細隆起線が観察される。2は平縁の口縁部で、口唇部に隆帯が認められる。器面が粗い。3～10は表裏に横位から斜位の条痕文が施される。11は平縁の口縁部で、外面に斜位の条痕文が施される。口唇部には刻みが施される。12～15は器面の凹凸が目立つ。外面に斜位の条痕文が施されるが、一部撫で消されているものもある。16は無節縄文による羽状縄文が施される。1～16の縄文土器は直接的に遺構の帰属時期を示す資料ではないが、条痕文系土器がまとまった点数出土しており、周辺に縄文時代早期の遺構が展開していた可能性が高いと思われる。

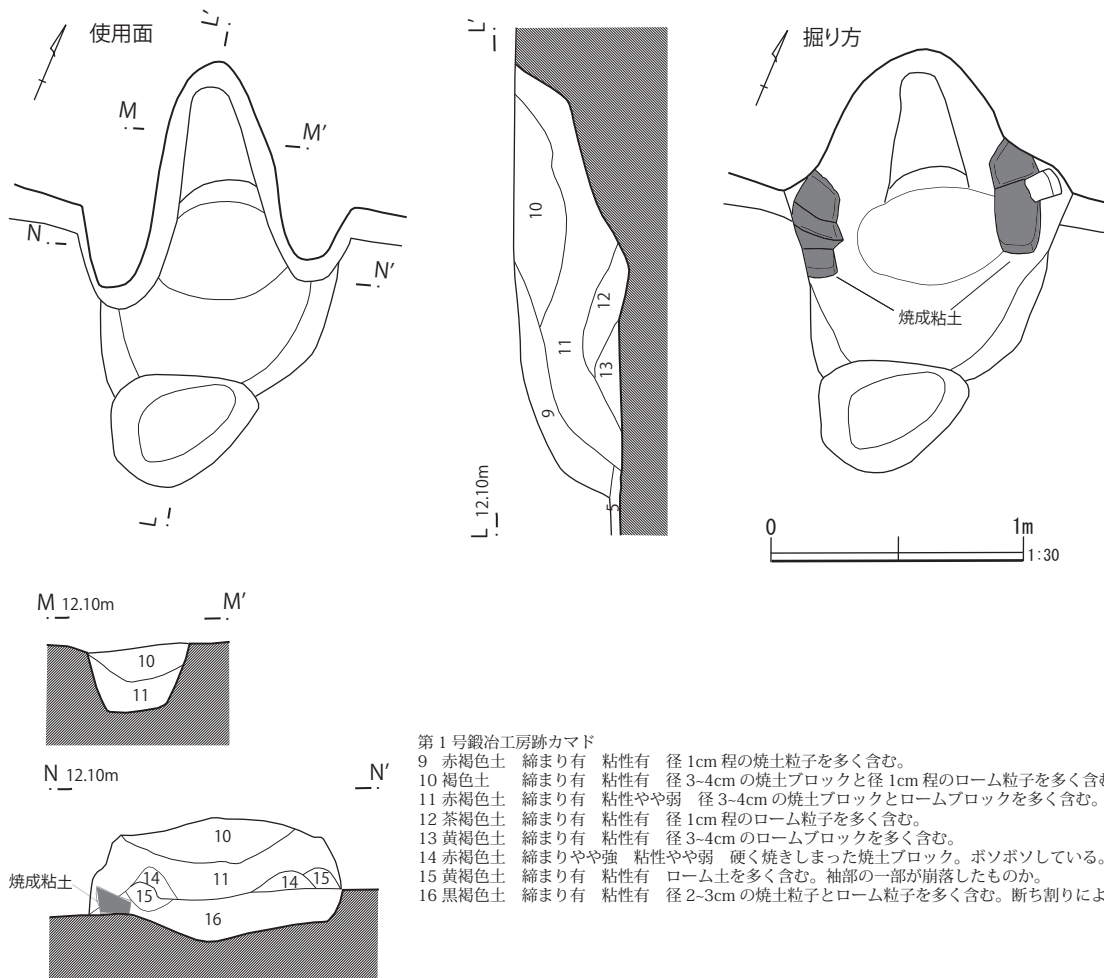
17～39・第46図1～5は土師器杯である。1～33は丸底で、口縁部が小さく内湾し、体部との境が明瞭でない。第45図34～39、第46図1～3は丸底ではあるが、口縁部が長く立ち上がり、体部との境が明瞭であ



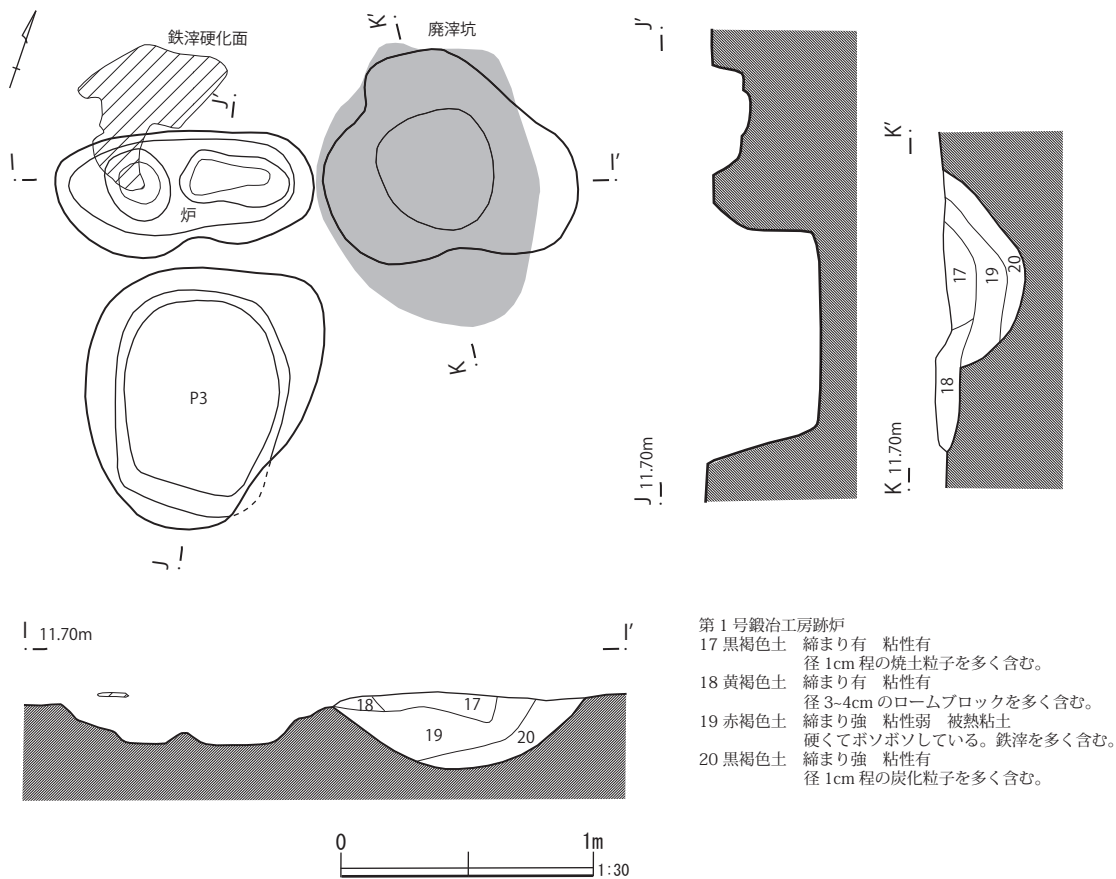
- 第1号鍛冶工房跡
- 1 黒色土 締まり有 包含層
  - 2 灰褐色土 粘性有 包含層
  - 3 黒褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程のローム粒子と焼土粒子を多く含む。
  - 4 茶褐色土 締まり有 粘性有 径1cmほどのローム粒子と焼土粒子を多く含む。
  - 5 褐色土 締まりやや強 粘性有 径1cmほどの焼土粒子と鉄滓を多く含む。床直の土層。
  - 6 黄褐色土 締まり有 粘性有 径3-5cmのロームブロックを多く含む。
  - 7 黄褐色土 締まりやや強 粘性やや強 ローム土を多く含む。
  - 8 黒色土 締まり弱 粘性弱 混貝土層 二枚貝を多く含む。

第40図 第1号鍛冶工房跡

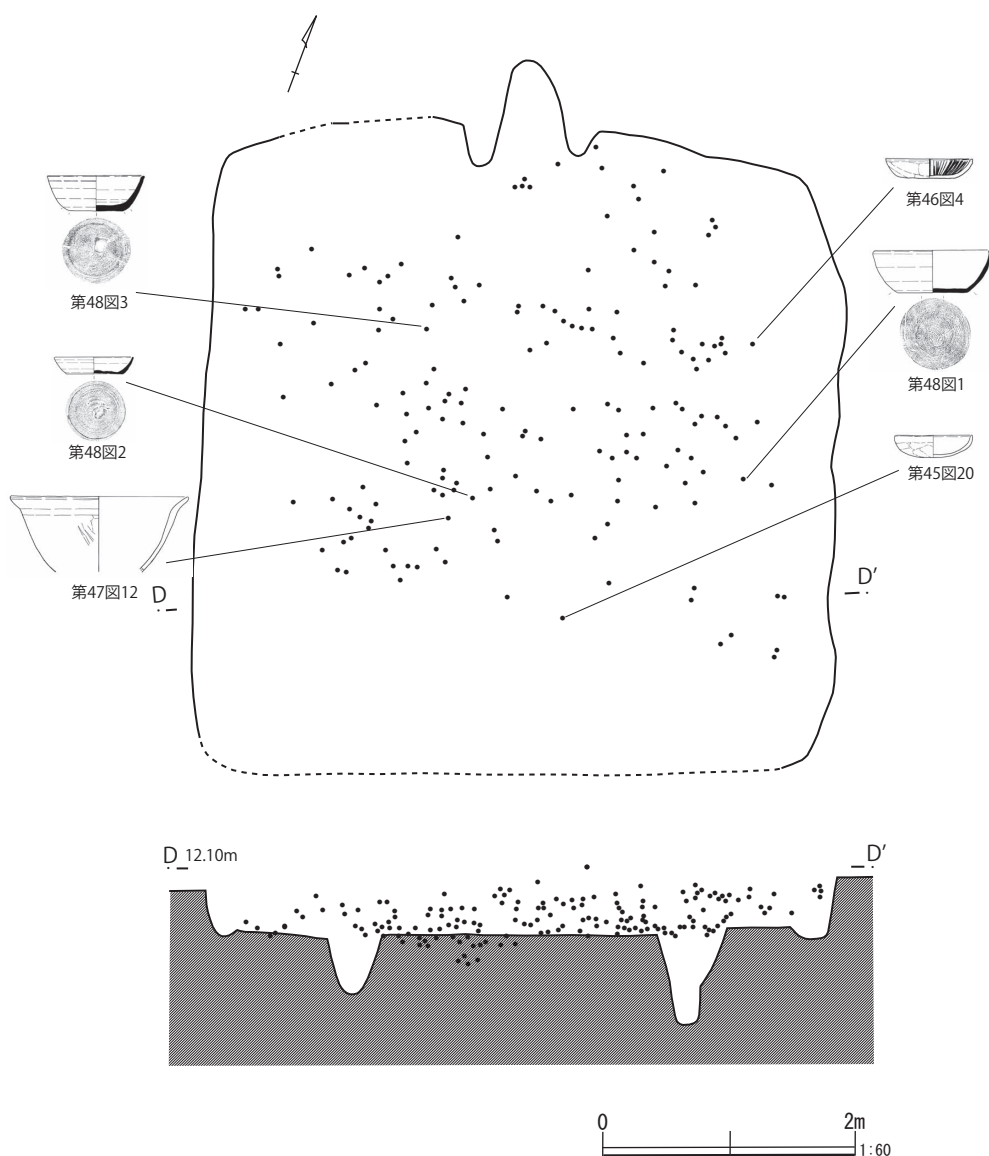




第41図 第1号鍛冶工房跡カマド



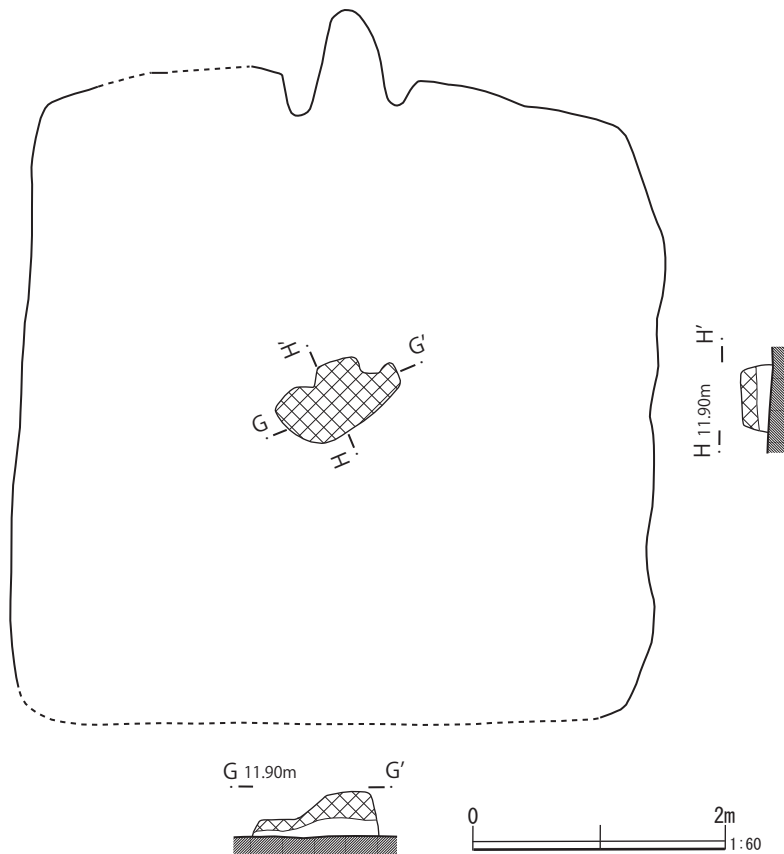
第42図 第1号鍛冶工房跡炉



第43図 第1号鍛冶工房跡遺物分布図

る。4は平底で体部内面に放射状の暗文が施される。6は土師器鉢である。7は内黒の土師器坏で平底である。9は土師器有台坏である。須恵器有台坏の模倣であろうか。8はかわらけである。10～21・第47図1～10は土師器甕である。口縁部が長く、外反の強い長胴甕が多く認められる。14・21は口縁部が直立する。胴部外面の調整は縦方向のヘラケズリを基本としている。第47図11は土師器台付甕の脚部片である。12は土師器鉢である。口縁部が大きく外反する。

第48図1・3は須恵器碗、2・4～18・第49図1～6は須恵器坏である。1は推定口径18cm、底径11.2cmを測る大型の資料である。胎土に白色針状物質が認められ、南比企産と考えられる。7は内面に火樨が認められる。8は口縁部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。14は口縁部外面に光沢を帯びている部位がある。出土須恵器坏の内、大半は胎土に白色針状物質が認められ、南比企産と考えられる。7～10は須恵器有台坏である。いずれも高台部は貼り付けによるものである。10は底部外面に三本線が刻まれる。11～13は須恵器蓋である。11は円盤状つまみ、12は環状つまみをもつ。14～17・第50図1～3は須恵器甕の胴部片



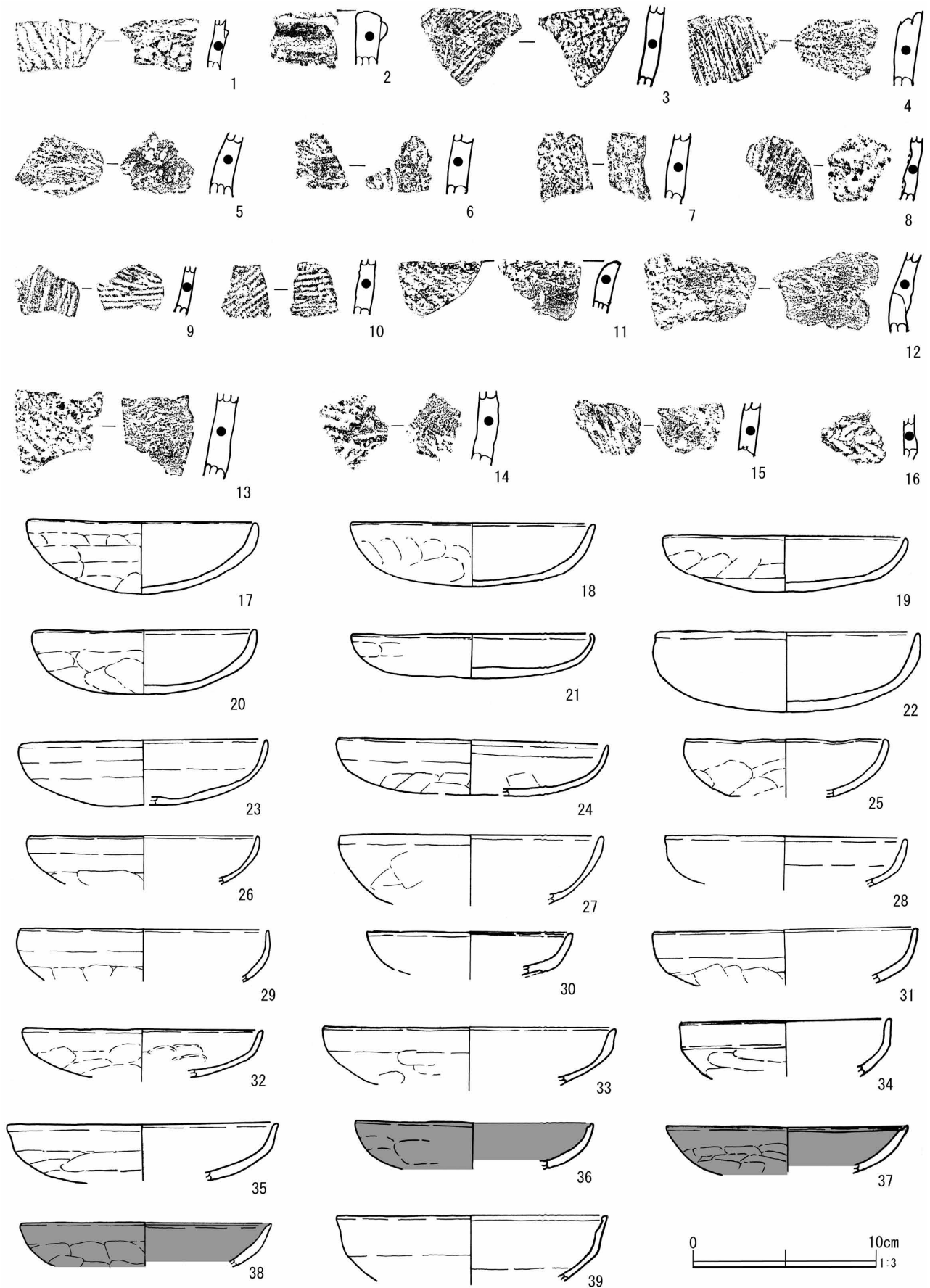
第44図 第1号鍛冶工房跡貝層

第15表 第1号鍛冶工房跡出土貝類組成表

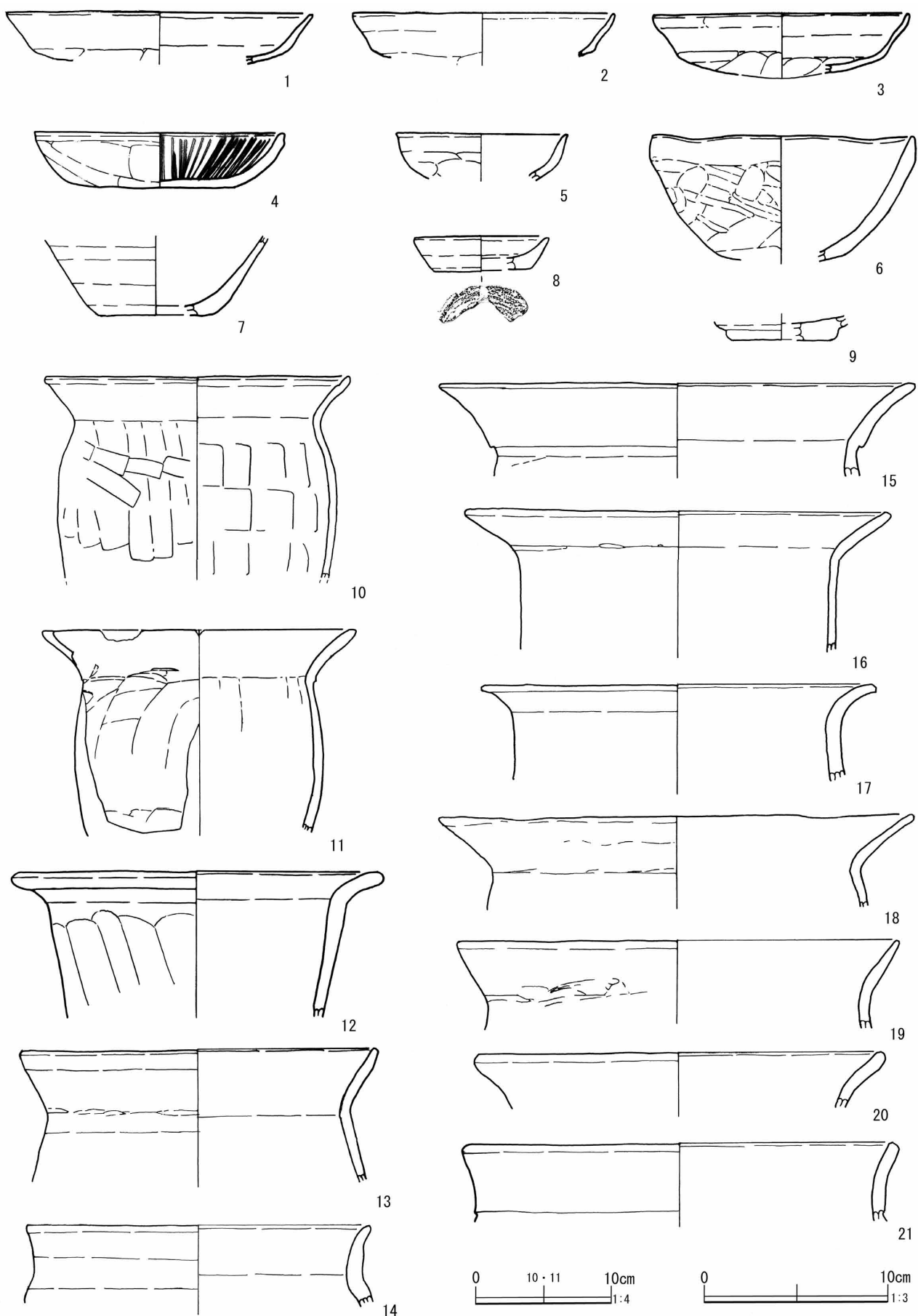
生息域	貝種	最小個体数(点)	重量(g)	
海水生	マガキ	25	470	
	ハマグリ	左殻	9	70
		右殻	6	
淡水生	マツカサガイ	左殻	164	1,430
		右殻	152	
	オオタニシ		40	240
	カワニナ		1	1
陸生	ヒカリキセルガイ	14	2	
	ウラジロベッコウマイマイ	4	1	

である。内面に当て具痕である青海波文が認められる。

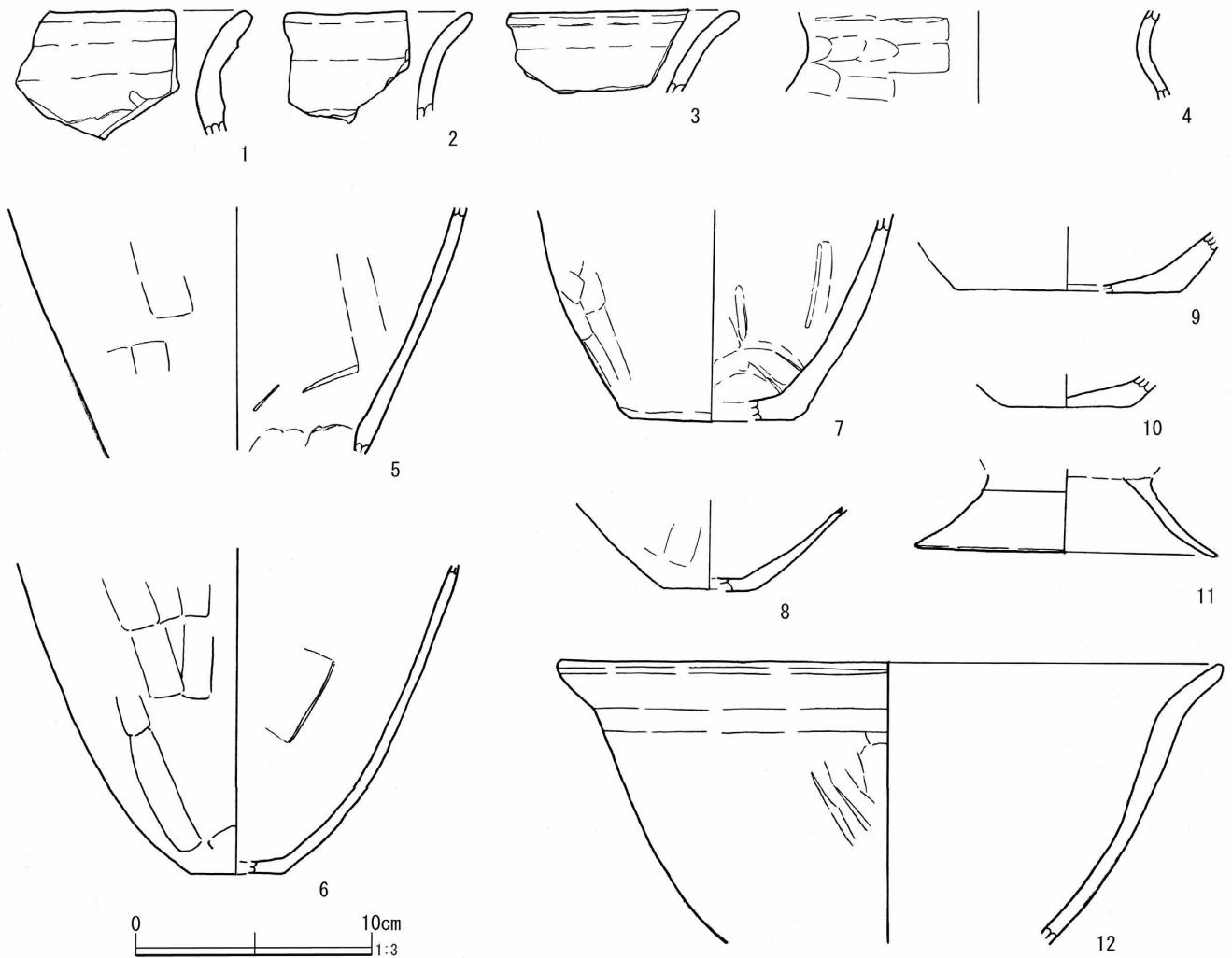
工房北東部の床面直上から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、7世紀中頃から後半の値を得ている(IV章の1参照)。出土土器を概観すると、土師器坏については、有段口縁坏や坏蓋模倣坏が認められず、北武蔵型坏が主体を占める。土師器甕については、ヘラケズリ調整が施される武蔵型甕が主体となる。口縁部から底部まで復元し得た資料はないが、長胴化のピークは過ぎたものが多いと思われる。須恵器坏については、南比企産のものが多く認められ、口径は14~15cm前後、底径は8~9cm前後のものが多い。底部は糸切りの後に周辺をヘラケズリによって調整している。以上の特徴と土器組成に占める土



第45图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (1)



第46图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (2)

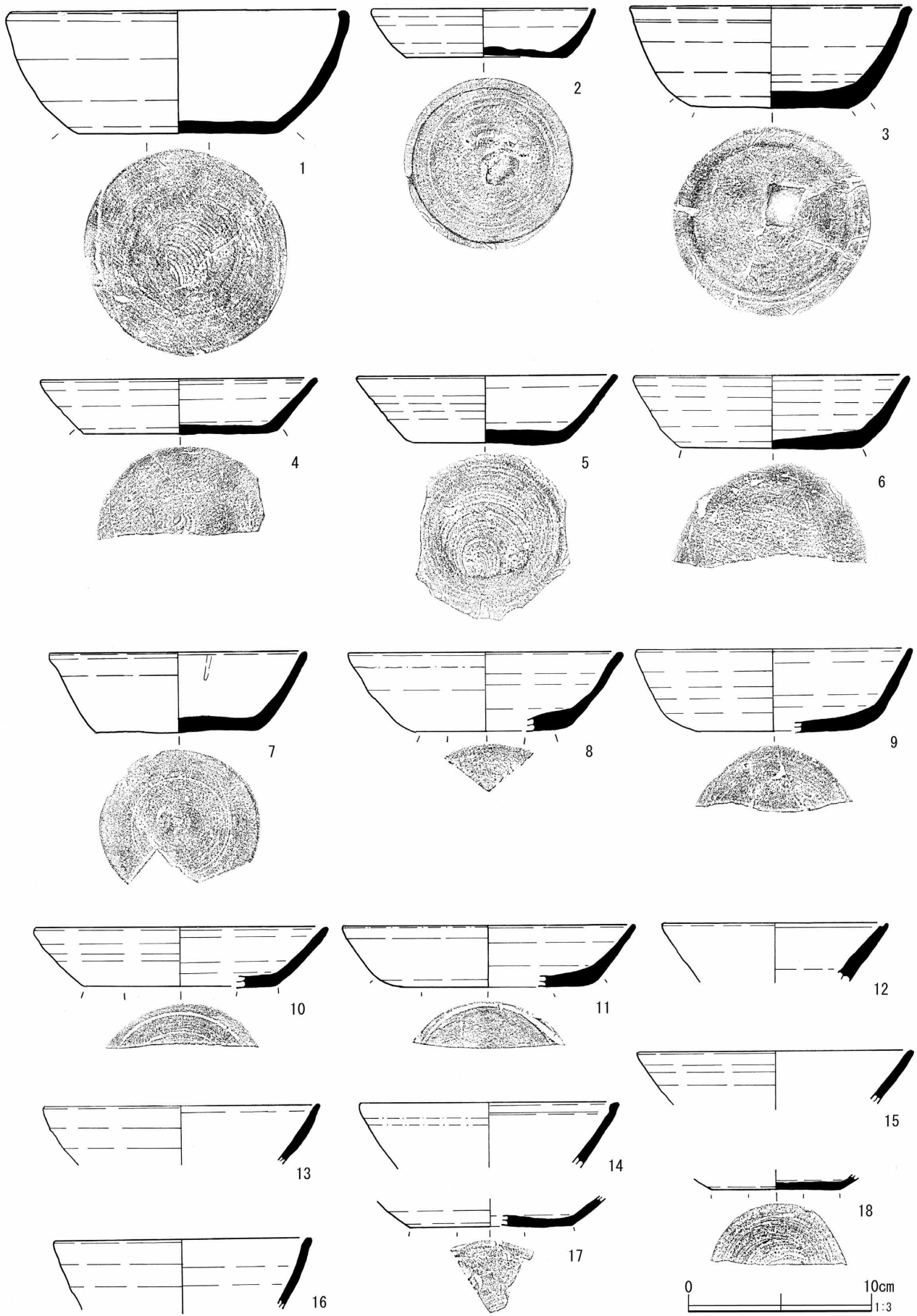


第47図 第1号鍛冶工房跡出土遺物(3)

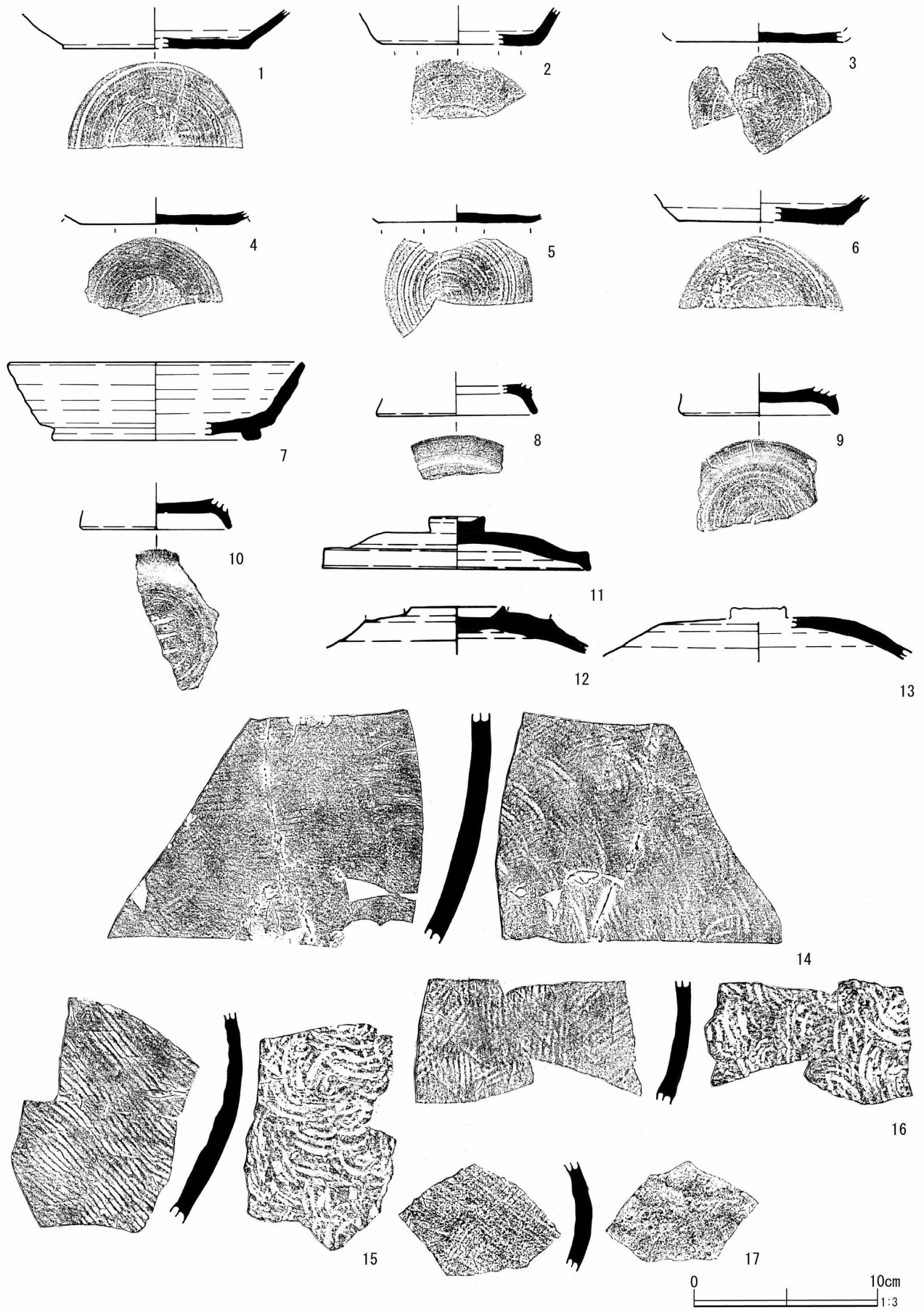
師器坏の割合の多さから、工房の年代は8世紀前半に帰属すると考えられる。放射性炭素年代測定の結果も加味し、8世紀初頭から前半までの時間幅を考えておきたい。

**土製品** 第50図4は十字模様が描かれた泥面子である。重量は1.8gを測る。5~8は土錘である。孔径は概ね0.2~0.5cmを測り、貫通している。9~12土玉である。孔径は概ね0.5~0.9cmを測り、貫通している。13~21・第51図1~5は鞆の羽口である。小片で図化できなかった資料が重量に換算して3,138gあり、掲載資料と合わせて、総計7,285gの羽口が出土した。出土羽口の内、外径の最大値は9.4cm、内径の最大値は4.8cmを測る。外径の平均値は7.8cm、内径の平均値は3.4cmを測る。極端に数値が高く大口径になるものではなく、精錬炉や鍛冶に用いられたものと考えられる。外形や通風孔が直線的な形態のものが多い中、第50図13は通風孔が先端部でラッパ状に外開きする。

**石器** 第51図6は磨石で表裏ともに使用面が顕著である。7は敲石で下部に大きく敲面が認められる。8・9は敲石兼磨石である。10~16は軽石である。用途ははっきりしないが、被熱を受け赤化した部分が認められる。17は砥石と思われる。円盤状を呈し、表裏ともに削痕が認められる。

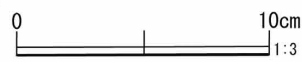
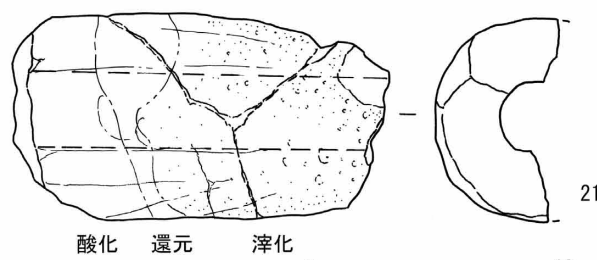
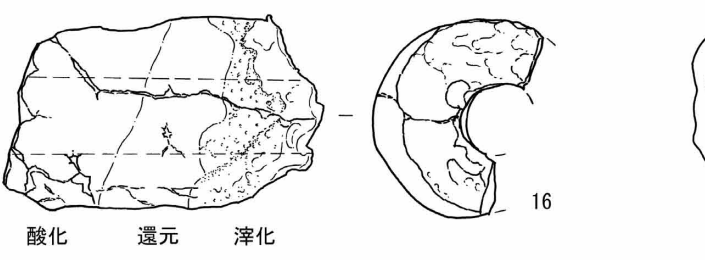
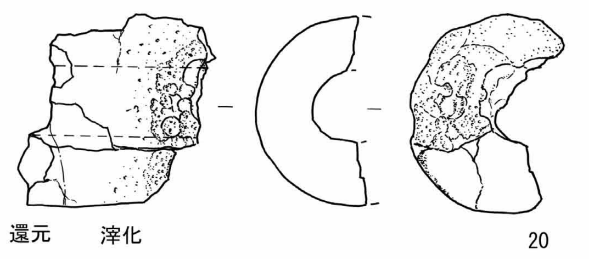
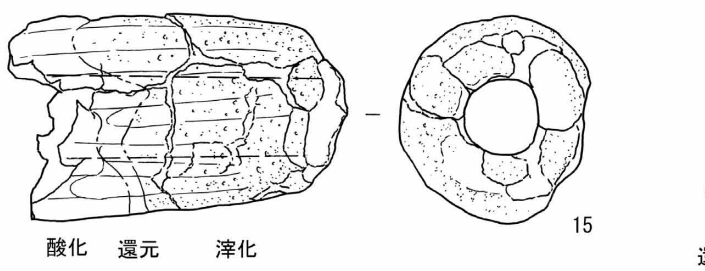
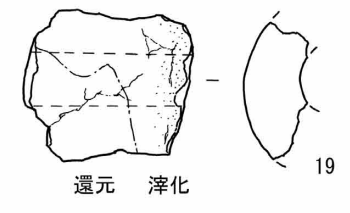
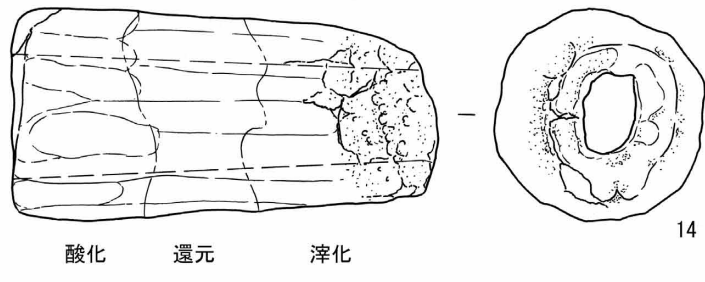
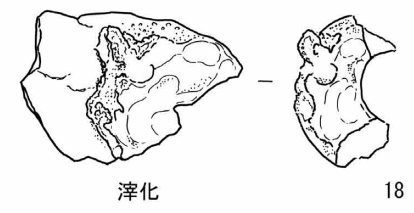
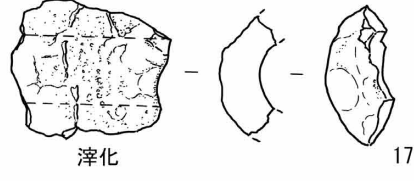
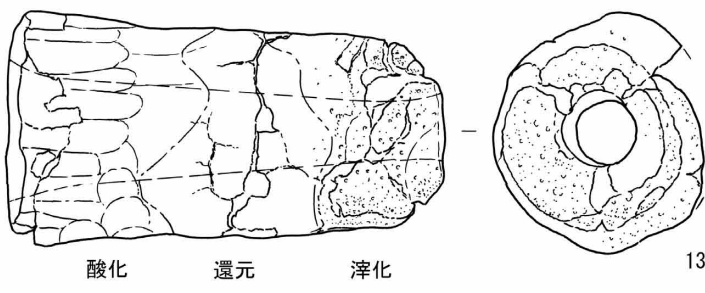
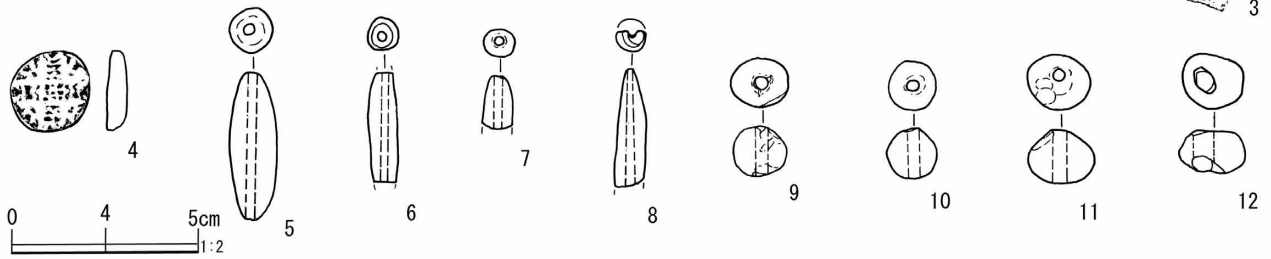
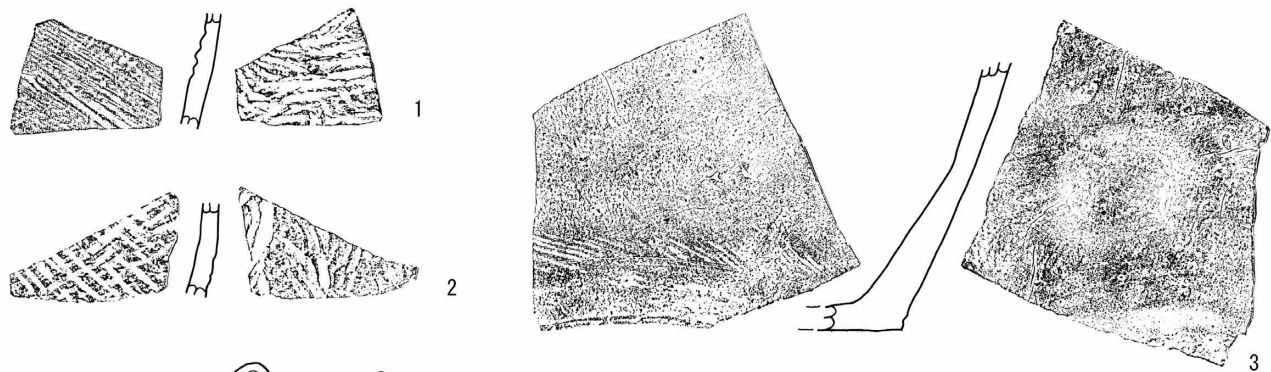


第48图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (4)

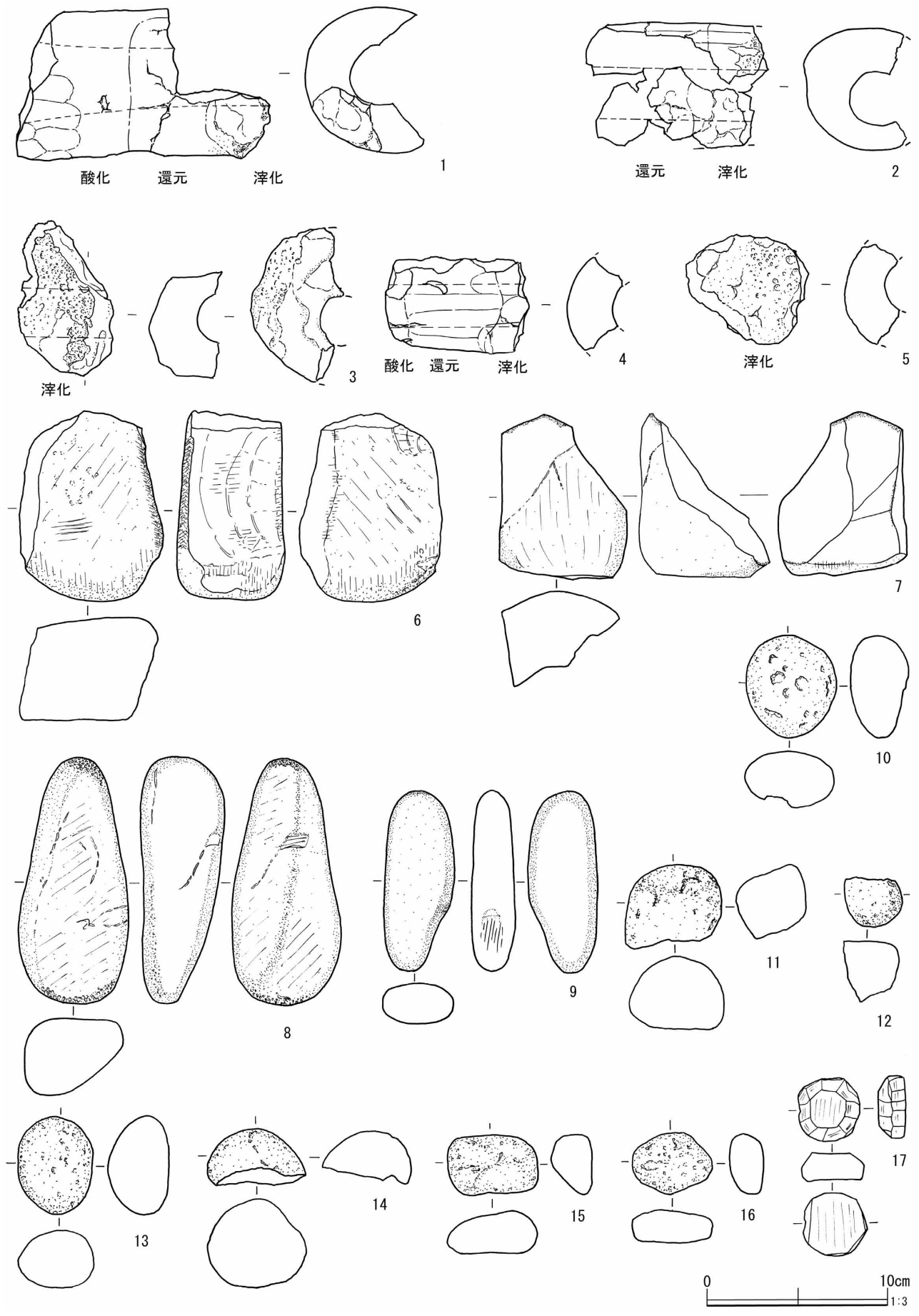


第49图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (5)

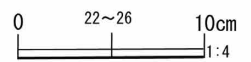
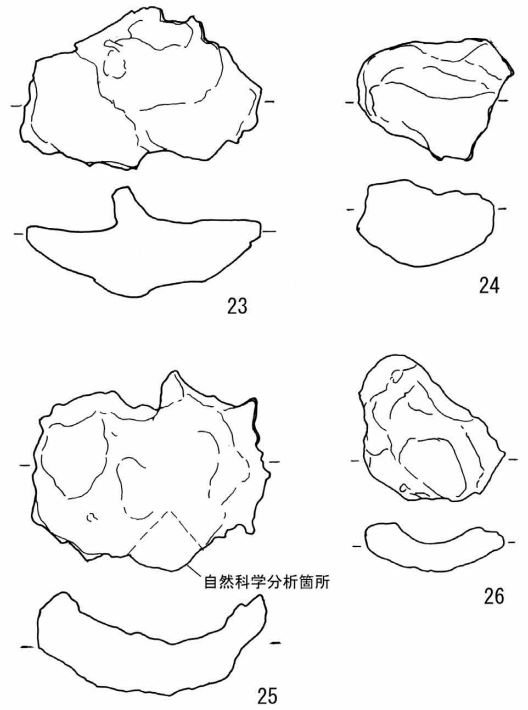
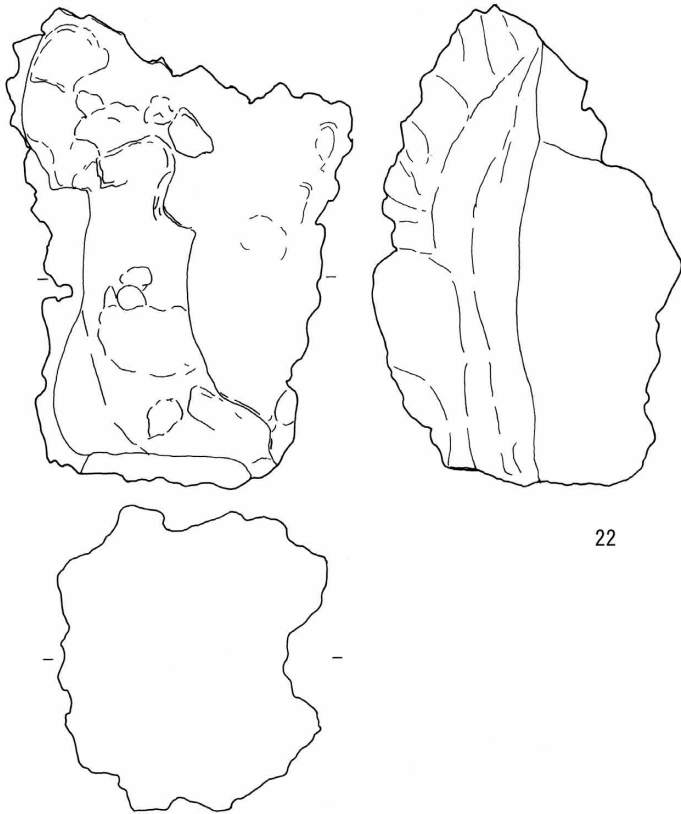
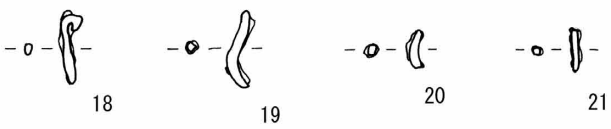
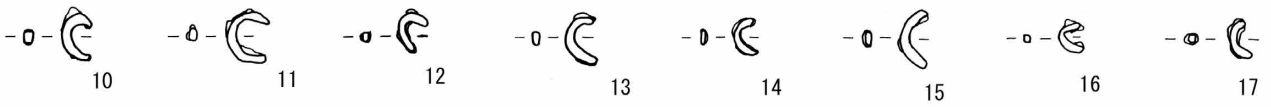
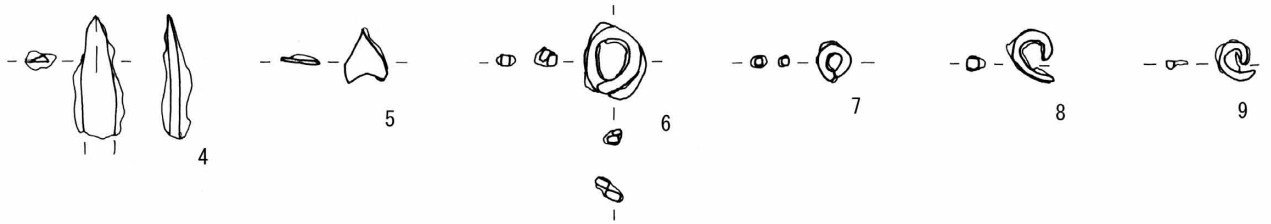
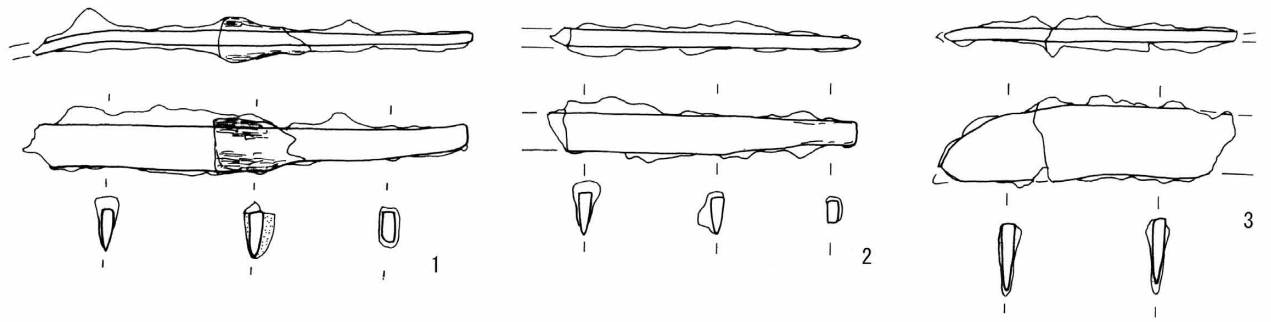




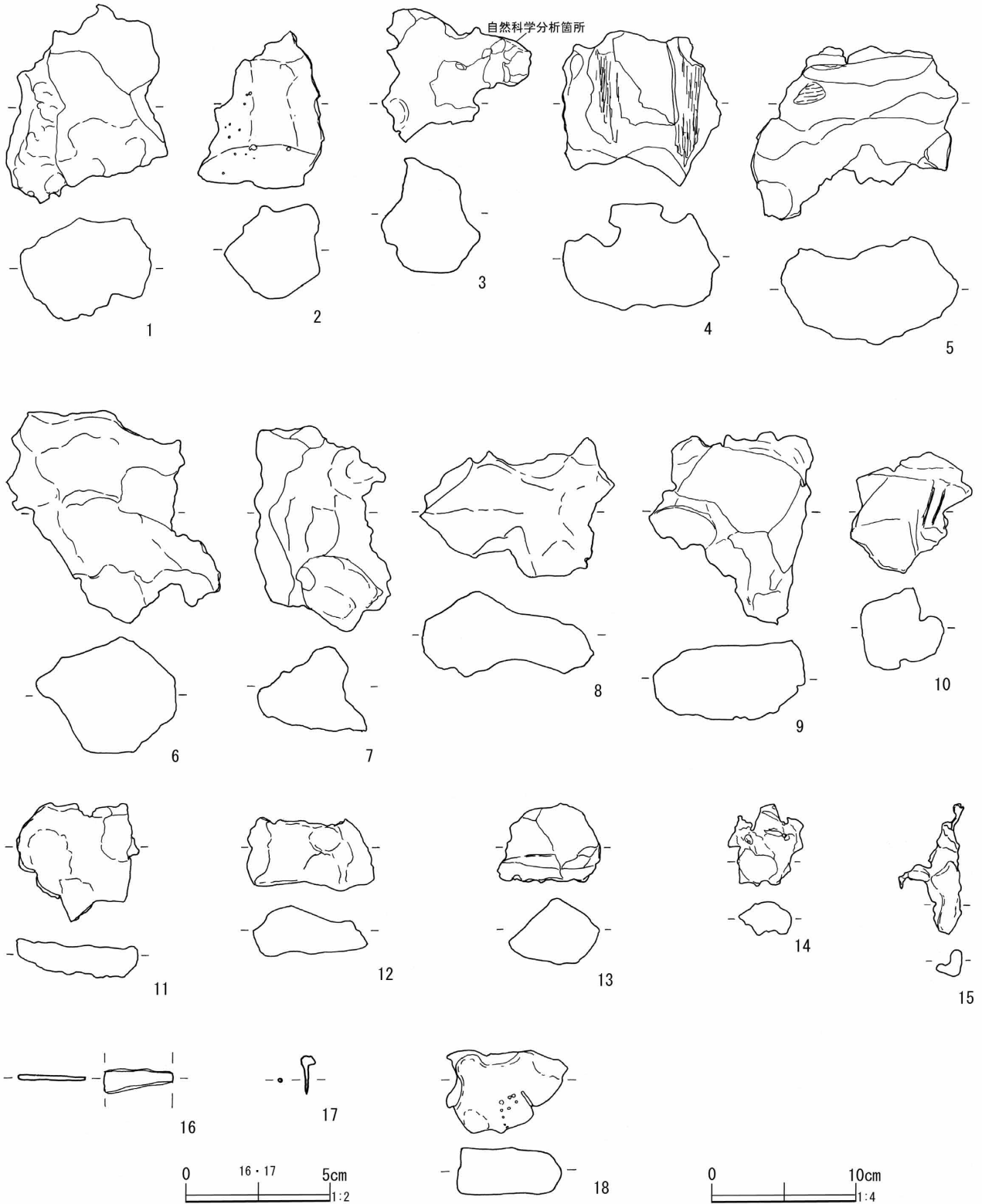
第50图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (6)



第51図 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (7)



第52图 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (8)



第53図 第1号鍛冶工房跡出土遺物 (9)

**鉄器** 第52図1・2は鉄刀子である。1は先端を欠損するが、身部長6.6cm、茎部長5.1cm、身部幅1.2cm、茎部幅1.0cm、身部厚0.4cm、茎部厚0.3cmを測る。関部には木製把の把縁が遺存する。関の形態は撫関である。2も先端を欠損するが、身部長5.5cm、茎部長2.7cm、身部幅1.0cm、茎部幅0.8cm、身部厚0.4cm、茎部厚0.3cmを測る。関の形態は無関に近い撫関で、1のような装具の痕跡は認められなかった。3は鉄鎌

で基部を欠くが、刃部が直線的に延びる。4は鉄鉤である。先端のみであるが裏すきが認められる。5～21は鍛錬鍛冶によって生じた裁断片などの微小鉄片である。工房の床面付近の覆土やカマドやピット内の覆土をフルイにかけて見つけたものが多い。5は鉄板を鑿切りした際に生じる二又状（鎌状）と考えられる。6～21も鍛錬鍛冶の際に生じた棒状の端切れと思われ、丸みを帯び鉤状になっているものも認められた。

**鉄滓** 椀形鍛冶滓、炉内滓、流動滓、炉外流出滓が認められた。第52図25・第53図3は自然科学分析によって精錬鍛冶滓であるという結果を得ている（IV章の2参照）。第52図22・第53図5・11の炉内滓は、人工的に打ち欠いたような破面が認められた。製鉄炉の炉壁の内、炉底塊に近い部分を工人が割り砕いた可能性がある。メタルが多い部分を意図的に持ち出そうとしたものであろうか。22は特に大型で重量もあり、調査地点付近に製鉄炉が展開した可能性を示唆させる資料である。第53図14・15は廃滓坑より出土した炉外流出滓である。15の形態は鳥脚状を呈し、炉外流出直後に冷え固まったものと考えられる。図化し得たもの以外にも数多くの鉄滓が出土しており、後述のV章の1において、出土鉄滓の集計を掲載するとともに若干の検討を加えた。

**銅製品** 鉄器や鉄滓に混じって、僅かだが銅製品と銅滓の出土も認められた。工房内で銅の鋳造も行っていた可能性を示唆させる資料である。第53図16は板状銅製品の断片である。両端を欠損している。17は針状銅製品である。先端が鋭く尖る。18は銅滓である。部分的に発泡しており脆い。

第16表 第1号鍛冶工房跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
45	17	土師器	坏	12.6	—	4.0	50	黒	普通	明褐色	
45	18	土師器	坏	13.4	—	3.5	60	角・砂粒	普通	明褐色	
45	19	土師器	坏	13.3	—	3.0	40	白	普通	にぶい赤褐色	
45	20	土師器	坏	12.2	—	3.5	40	砂粒	普通	明赤褐色	
45	21	土師器	坏	[13.0]	—	(3.1)	40	角・白	普通	橙色	
45	22	土師器	坏	[14.2]	—	(4.3)	20	角・白・礫	普通	橙色	
45	23	土師器	坏	[13.4]	—	(3.5)	30	雲母・角・白・黒	普通	橙色	
45	24	土師器	坏	[14.8]	—	(2.9)	30	雲母・角・白	良好	橙色	P10出土
45	25	土師器	坏	[11.0]	—	(3.2)	20	石英・角・白・礫	普通	橙色	
45	26	土師器	坏	[12.6]	—	(2.6)	10	雲母・角	普通	橙色	P3出土
45	27	土師器	坏	[4.2]	—	(3.7)	20	雲母・角	普通	橙色	P10出土
45	28	土師器	坏	[13.2]	—	(2.6)	10	雲母・角・白・黒	普通	橙色	
45	29	土師器	坏	[13.6]	—	(2.8)	10	石英・角・白	普通	橙色	
45	30	土師器	坏	[11.3]	—	(2.3)	20	雲母・角・白・黒	普通	橙色	
45	31	土師器	坏	[14.4]	—	(2.9)	20	石英・角・白・赤	良好	橙色	
45	32	土師器	坏	[13.2]	—	(3.2)	10	角・白・黒	良好	橙色	
45	33	土師器	坏	[16.0]	—	(3.2)	10	石英・角・白	良好	橙色	
45	34	土師器	坏	[11.4]	—	(3.1)	20	雲母・角・白・黒	普通	橙色	
45	35	土師器	坏	[14.8]	—	(3.2)	20	雲母・角・黒	普通	明赤灰色	
45	36	土師器	坏	[9.7]	—	(3.2)	10	白・赤	普通	赤灰色	内外面赤彩
45	37	土師器	坏	[13.2]	—	(2.6)	20	白・黒	良好	赤褐色	内外面赤彩
45	38	土師器	坏	[13.6]	—	(2.3)	10	白・黒	良好	赤褐色	内外面赤彩
45	39	土師器	坏	[14.8]	—	(3.6)	10	角・白・黒	普通	橙色	
46	1	土師器	坏	[6.6]	—	(2.6)	10	雲母・角・白	普通	橙色	
46	2	土師器	坏	[10.4]	—	(2.2)	10	白・黒	普通	橙色	
46	3	土師器	坏	[13.8]	—	(2.8)	10	石英・角・白	普通	橙色	
46	4	土師器	坏	13.6	—	3.0	60	雲母・角・白・黒	普通	赤褐色	内面放射状暗文
46	5	土師器	坏	[9.3]	—	(2.6)	20	角・白・黒・礫	良好	橙色	
46	6	土師器	鉢	[14.2]	—	(6.8)	30	雲母・白	普通	橙色	内面茶褐色
46	7	土師器	坏	—	[6.0]	(4.4)	30	白・黒	良好	褐色	内黒土器
46	8	かわらけ	坏	[7.2]	[5.0]	(1.8)	20	白	普通	橙色	
46	9	土師器	有台坏	—	[5.6]	(1.6)	10	白・黒	普通	橙色	
46	10	土師器	甕	22.2	—	(14.7)	50	雲母・角・白	良好	褐色	
46	11	土師器	甕	[23.6]	—	(14.7)	20	雲母・角・白	普通	橙色	
46	12	土師器	甕	[20.2]	—	(8.0)	10	角・白・礫	普通	褐色	
46	13	土師器	甕	[19.4]	—	(7.3)	10	角・白	普通	褐色	
46	14	土師器	甕	[18.6]	—	(4.4)	10	雲母・角・白・黒	良好	橙色	

46	15	土師器	甕	[26.0]	—	(5.0)	10	雲母・角・白・黒・礫	普通	橙色	
46	16	土師器	甕	[23.2]	—	(7.8)	10	角・白	普通	褐色	
46	17	土師器	甕	[21.0]	—	(5.2)	10	角・白	普通	橙色	
46	18	土師器	甕	[26.0]	—	(5.0)	10	角・白・黒	普通	褐色	
46	19	土師器	甕	[39.2]	—	(4.8)	10	角・白	普通	褐色	
46	20	土師器	甕	[20.0]	—	(3.0)	10	雲母・角・白・黒	普通	褐色	カマド出土
46	21	土師器	甕	[23.2]	—	(4.2)	10	雲母・角・白・黒	普通	褐色	
47	1	土師器	甕	—	—	(5.4)	10	雲母・白	普通	褐色	
47	2	土師器	甕	—	—	(4.6)	10	角・白	普通	褐色	
47	3	土師器	甕	—	—	(3.4)	10	雲母・角・白	普通	褐色	
47	4	土師器	甕	—	—	(3.7)	10	雲母・角・白	普通	褐色	
47	5	土師器	甕	—	—	(10.5)	10	角・白	普通	褐色	
47	6	土師器	甕	—	[4.0]	13.2	40	雲母・角・白・礫	良好	黒褐色	内面赤褐色
47	7	土師器	甕	—	[6.8]	(8.8)	20	雲母・白・黒	普通	褐色	
47	8	土師器	甕	—	[4.0]	(3.6)	10	石英・雲母・角	普通	褐色	P9出土
47	9	土師器	甕	—	[9.4]	(2.6)	10	雲母・角・白	普通	褐色	
47	10	土師器	甕	—	[5.0]	(1.3)	10	雲母・白・黒	普通	褐色	
47	11	土師器	台付甕	—	[13.0]	(3.4)	10	角・白	普通	褐色	
47	12	土師器	鉢	[28.0]	—	(12.0)	20	雲母・白	普通	褐色	
48	1	須恵器	坏	[18.0]	11.2	6.7	70	針・白・黒	良好	灰色	南比企産
48	2	須恵器	坏	16.2	8.5	2.7	100	黒・砂粒・礫	良好	灰色	P3出土
48	3	須恵器	坏	15.3	8.4	5.5	80	針・白・黒・礫	良好	灰色	南比企産
48	4	須恵器	坏	[15.0]	[10.2]	(3.0)	30	白・黒・礫	普通	灰色	
48	5	須恵器	坏	[14.2]	8.2	(3.6)	40	針・白・黒	良好	灰色	南比企産
48	6	須恵器	坏	15.0	9.6	3.2	60	針・白	良好	灰色	南比企産
48	7	須恵器	坏	14.0	8.8	4.3	50	白・黒	良好	灰白色	
48	8	須恵器	坏	[15.0]	[7.8]	(4.3)	10	針・白	普通	灰色	南比企産
48	9	須恵器	坏	15.0	9.4	4.5	50	針・白	普通	灰色	南比企産
48	10	須恵器	坏	[16.0]	[10.6]	(3.2)	20	針・白	普通	灰色	南比企産
48	11	須恵器	坏	[15.9]	[9.5]	3.4	20	白・礫	良好	灰色	湖西産か
48	12	須恵器	坏	[12.2]	—	(3.0)	10	白・黒・礫	良好	灰色	
48	13	須恵器	坏	[15.0]	—	(3.2)	20	針・白・礫	良好	灰色	南比企産
48	14	須恵器	坏	[14.0]	—	(3.5)	10	針・白	良好	暗灰色	南比企産
48	15	須恵器	坏	[15.0]	—	(2.9)	10	針・白	良好	灰色	南比企産
48	16	須恵器	坏	[14.0]	—	(3.9)	10	針・白	良好	灰色	南比企産
48	17	須恵器	坏	—	[8.8]	(1.6)	10	針・白・礫	普通	灰色	南比企産
48	18	須恵器	坏	—	[7.0]	(0.8)	10	針・白・礫	良好	灰色	南比企産
49	1	須恵器	坏	—	[10.0]	(2.0)	20	針・白	良好	灰色	南比企産
49	2	須恵器	坏	—	[8.5]	(2.0)	10	針・白・礫	良好	灰色	南比企産
49	3	須恵器	坏	—	[7.5]	(0.5)	10	針・白・黒	普通	灰白色	南比企産
49	4	須恵器	坏	—	[8.4]	(0.5)	10	針・白	良好	灰色	南比企産
49	5	須恵器	坏	—	8.0	(0.5)	10	針・白・礫	良好	灰色	南比企産
49	6	須恵器	坏	—	[9.0]	(1.6)	10	角・白・黒	良好	灰白色	
49	7	須恵器	有台坏	[16.0]	[11.2]	(4.3)	20	黒	普通	灰白色	
49	8	須恵器	有台坏	—	[9.0]	(1.5)	10	白	普通	暗灰色	
49	9	須恵器	有台坏	—	[8.8]	(1.4)	10	白	普通	暗灰色	
49	10	須恵器	有台坏	—	[8.5]	(1.8)	10	白	普通	暗灰色	
49	11	須恵器	蓋	14.5	—	2.5	50	白・黒・砂粒	良好	灰白色	
49	12	須恵器	蓋	—	—	(2.5)	30	針・白・礫	良好	灰色	南比企産
49	13	須恵器	蓋	—	—	(1.9)	10	針・白	普通	灰色	南比企産
49	14	須恵器	甕	—	—	(12.2)	10	白・黒	良好	灰色	
49	15	須恵器	甕	—	—	(13.0)	10	白・黒	良好	暗灰色	
49	16	須恵器	甕	—	—	(7.2)	10	白・黒	良好	暗灰色	
49	17	須恵器	甕	—	—	(6.0)	10	白・黒	良好	灰色	
50	1	須恵器	甕	—	—	(4.6)	10	白・黒	良好	暗灰色	
50	2	須恵器	甕	—	—	(4.5)	10	白・黒	良好	暗灰色	
50	3	須恵器	甕	—	—	(10.8)	10	白・黒・礫	良好	灰色	
図版	番号	種別	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考	
50	5	土錘	5.7	1.9	0.5	16.3	石英・白・黒	普通	にぶい褐色		
50	6	土錘	(4.3)	1.2	0.3	5.8	白・黒	普通	明褐色		
50	7	土錘	(2.1)	1.2	0.2	2.8	白	普通	にぶい褐色		
50	8	土錘	(4.6)	1.2	0.3	3.3	白	普通	にぶい褐色		
50	9	土玉	2.0	2.1	0.5	6.5	白・黒	普通	黄橙	カマド出土	
50	10	土玉	1.9	1.9	0.4	5.5	石英・角・白・黒	普通	明赤褐色		
50	11	土玉	2.1	2.5	0.5	8.8	白	普通	明赤褐色		
50	12	土玉	2.1	2.5	0.9	6.6	白	普通	にぶい褐色		
図版	番号	種別	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考	
50	13	羽口	17.2	9.4	2.9	905.0	白・砂粒	普通	褐色	P10出土	
50	14	羽口	18.8	8.4	3.5	835.0	白・砂粒	普通	褐色		
50	15	羽口	(12.8)	8.2	3.0	430.0	白・砂粒	普通	褐色	P3出土	

50	16	羽口	(12.0)	8.7	3.0	310.0	白・砂粒	普通	橙色	
50	17	羽口	(6.1)	6.6	4.4	65.8	白・砂粒	普通	橙色	
50	18	羽口	(8.2)	7.2	3.0	104.9	白・砂粒	普通	橙色	
50	19	羽口	(6.5)	8.4	3.8	78.1	白・砂粒	普通	橙色	P3出土
50	20	羽口	(6.6)	7.5	3.0	158.8	白・砂粒	普通	橙色	
50	21	羽口	(14.9)	8.0	4.8	430.0	白・砂粒	普通	橙色	
51	1	羽口	(13.3)	8.1	3.6	360.0	白・砂粒	普通	橙色	
51	2	羽口	(9.9)	6.9	2.9	175.2	白・砂粒	普通	橙色	
51	3	羽口	(5.3)	7.2	4.6	93.0	白・砂粒	普通	橙色	
51	4	羽口	(7.9)	7.6	3.6	116.2	白・砂粒	普通	橙色	
51	5	羽口	(6.7)	7.2	2.1	84.2	白・砂粒	普通	橙色	
図版	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考		
51	6	磨石	砂岩	(10.5)	(7.6)	5.5	870.0			
51	7	敲石	砂岩	(9.0)	(7.1)	5.4	420.0			
51	8	敲石兼磨石	砂岩	13.6	6.0	4.1	460.0			
51	9	敲石兼磨石	砂岩	10.0	3.9	2.2	53.6			
51	10	不明	軽石	5.5	4.9	3.0	34.5			
51	11	不明	軽石	(4.3)	5.2	4.0	38.4			
51	12	不明	軽石	2.7	3.3	3.3	10.7			
51	13	不明	軽石	5.3	4.1	3.2	35.8			
51	14	不明	軽石	(3.0)	5.3	5.0	29.3			
51	15	不明	軽石	5.0	3.2	2.3	9.7			
51	16	不明	軽石	4.4	3.5	1.8	9.8			
51	17	砥石	砂岩	3.5	3.5	1.4	25.9			
図版	番号	器種		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考		
52	1	鉄刀子		(11.7)	1.2	0.4	24.6	P3出土		
52	2	鉄刀子		(8.2)	1.0	0.4	9.6			
52	3	鉄鎌		(7.8)	2.0	0.3	13.7	P3出土		
52	4	鉄鉈		(3.2)	0.9	0.3	4.4			
52	5	板状鉄製品		1.4	1.1	0.1	0.5			
52	6	棒状鉄製品		—	0.4	0.3	1.5			
52	7	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.3			
52	8	棒状鉄製品		—	0.3	0.3	0.6			
52	9	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.4	カマド出土		
52	10	棒状鉄製品		—	0.3	0.3	0.4			
52	11	棒状鉄製品		—	0.3	0.3	0.4			
52	12	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.2			
52	13	棒状鉄製品		—	0.2	0.3	0.3			
52	14	棒状鉄製品		—	0.2	0.3	0.2	カマド出土		
52	15	棒状鉄製品		—	0.2	0.3	0.5	カマド出土		
52	16	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.1	P10出土		
52	17	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.2	P10出土		
52	18	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.4			
52	19	棒状鉄製品		—	0.3	0.3	0.3			
52	20	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.1	P10出土		
52	21	棒状鉄製品		—	0.2	0.2	0.1	P10出土		
図版	番号	器種		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	磁着度	備考	
52	22	炉内滓		25.4	18.3	16.3	5,320.0	0	炉壁付着、人工の破面有	
52	23	椀形鍛冶滓		8.5	12.7	5.8	425.0	2	P3出土	
52	24	椀形鍛冶滓		6.4	8.1	4.6	248.0	2	P3出土、砂粒付着、一部錆化	
52	25	椀形鍛冶滓		10.5	12.5	5.5	667.0	2	自然科学分析試料 No.1	
52	26	椀形鍛冶滓		7.6	7.7	2.7	172.0	1		
53	1	炉内滓		13.6	11.1	7.0	1,050.0	1	炉壁付着	
53	2	炉内滓		10.8	8.5	6.9	680.0	2	炉壁付着、一部発砲	
53	3	流動滓		9.1	10.4	7.3	434.0	2	自然科学分析試料 No.2	
53	4	炉内滓		10.7	10.8	6.2	800.0	2	スサ痕跡	
53	5	炉内滓		12.0	14.2	7.3	840.0	1	一部錆化、人工の破面有	
53	6	炉内滓		14.5	14.5	8.0	1,185.0	0		
53	7	炉内滓		14.1	9.3	5.8	610.0	2	砂粒付着、一部発砲	
53	8	炉内滓		9.5	13.3	5.9	770.0	2	砂粒付着	
53	9	炉内滓		13.2	11.2	5.5	655.0	0	P3出土	
53	10	炉内滓		8.2	8.4	5.5	365.0	2	P3出土、スサ痕跡	
53	11	炉内滓		8.3	8.4	2.7	141.0	2	スサ痕跡	
53	12	炉内滓		5.0	8.7	3.5	169.0	1	砂粒付着、人工の破面有	
53	13	炉内滓		5.5	7.1	4.5	257.0	1		
53	14	炉外流出滓		5.7	5.1	2.2	55.0	1	廃滓坑出土	
53	15	炉外流出滓		8.9	4.6	1.8	62.0	1	廃滓坑出土、鳥脚状	
図版	番号	器種		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考		
53	16	板状銅製品		(2.3)	0.7	0.2	1.0	P10出土		
53	17	針状銅製品		1.3	0.5	0.1	0.2			
53	18	銅滓		3.8	2.9	1.9	30.1	カマド出土		

### (3) 土坑

#### ●第1号土坑 (第54・58図)

E2グリッドに位置し、遺構の北隅は調査区外に延びる。検出部分から平面形は長径約2.0m、短径約1.7mの不整円形を呈すものと推定される。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面北寄りが浅く窪む。

出土遺物 (第58図1)

土器 1は土師器坏の口縁から体部片である。

#### ●第2号土坑 (第54・58図)

F2グリッドに位置する。平面形は長径約2.2m、短径約1.6mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mであるが、遺構の南隅に円形の掘り込みが認められ、その底面までの深さは約0.7mを測る。

出土遺物 (第58図2)

土器 2は土師器坏の口縁から底部片である。

#### ●第3号土坑 (第54・58図)

D2・3グリッドに位置する。平面形は長径約1.7m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物 (第58図3～5)

土器 3～5は胎土に繊維を含む胴部片である。表裏に斜位の条痕文が施される。

#### ●第4号土坑 (第54・58図)

E2・F2グリッドに位置し、遺構の北半部は調査区外に延びる。平面形は、長径は不明であるが、短径は約3.0mを測る。確認面からの深さは約0.7mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物 (第58図6～16)

土器 6～9は胎土に繊維を含む胴部片である。表裏に斜位の条痕文が施される。8には一部条痕文を撫で消した痕が認められる。10・11は陶器碗の底部片である。いずれも高台部は貼り付けによるものである。12は灯明皿の底部片である。13・14は磁器碗で、13は口縁部から体部片、14は底部片である。15・16は焙烙の口縁部片である。

#### ●第5号土坑 (第54図)

D3グリッドに位置し、第6号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

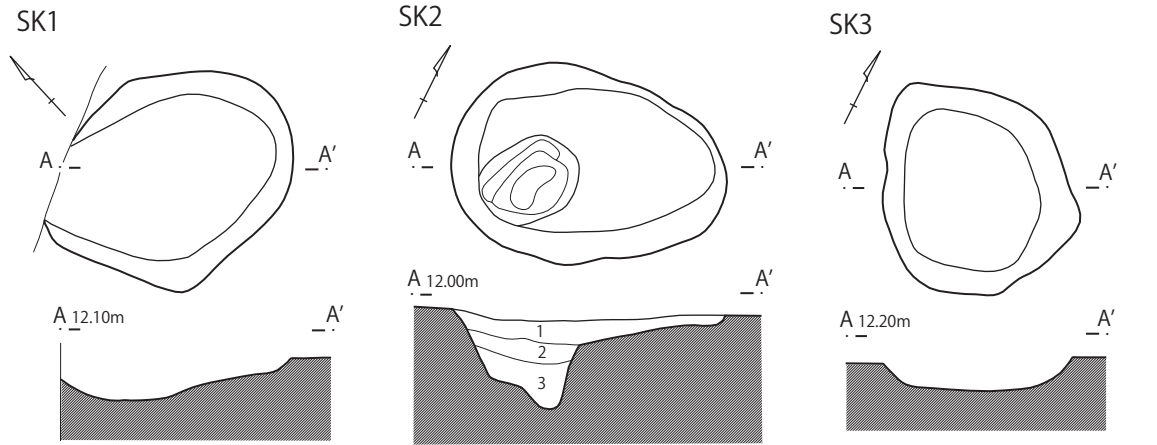
#### ●第6号土坑 (第54・58図)

D3・E3グリッドに位置し、第7号土坑を切り、第5号土坑に切られる。平面形は長径約2.5m、短径約1.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (第58図17)

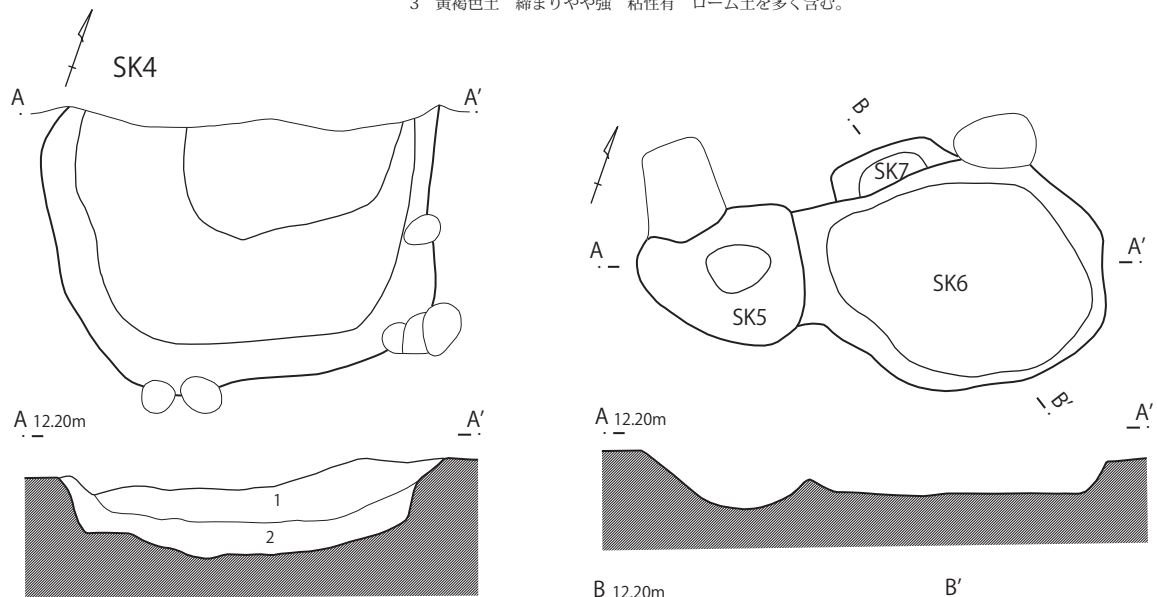
土器 17は陶器碗の底部片である。高台部は削り出しによるものである。





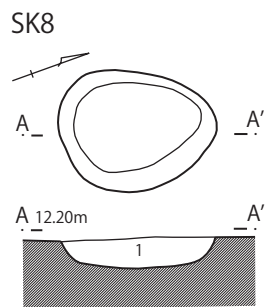
SK2

- 1 灰褐色土 締まり有 粘性有 径1-2cmのローム粒子を多く含む。
- 2 褐色土 締まり有 粘性有 径1-2cmのローム粒子を多く含む。
- 3 黄褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム土を多く含む。



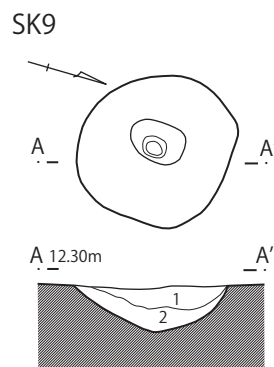
SK4

- 1 灰褐色土 締まりやや有 粘性有 径1-2cmのローム粒子を若干含む。
- 2 黒褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程のローム粒子を多く含む。



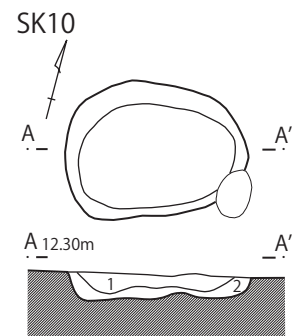
SK8

- 1 灰黄褐色土 締まり有 粘性有 径3-4cmのロームブロックを多く含む。



SK9

- 1 黒褐色土 締まり有 粘性有 径3cm程のロームブロックを若干含む。
- 2 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。



SK10

- 1 灰褐色土 締まり有 粘性有 径5cm程のロームブロックを若干含む。
- 2 黄褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム土を多く含む。



第54図 第1~10号土坑

●第7号土坑（第54・58図）

D3・E3グリッドに位置し、第6号土坑に切られる。大半を第6号土坑に切られるが、検出範囲内での直径は0.9mを測る。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第58図18）

土器 18は土師器の底部片である。

●第8号土坑（第54・58図）

E2・3グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第58図19）

土器 19は胎土に繊維を含む胴部片である。表裏に斜位の条痕文が施される。

●第9号土坑（第54図）

E4・F4グリッドに位置し、第15号土坑を切る。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

●第10号土坑（第54図）

F4グリッドに位置する。平面形は長径約1.5m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面中央付近と東寄りで浅く窪む箇所がある。

●第11号土坑（第55・58図）

E3グリッドに位置し、第12号土坑を切り、第17号土坑に切られる。平面形は長径約1.4m、短径約1.3mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面の北寄りとは南寄りで浅く窪む箇所がある。

出土遺物（第58図20）

土製品 20は土玉である。孔径は概ね0.4～0.9cmを測り、貫通している。

●第12号土坑（第55図）

E3グリッドに位置し、第16号土坑を切り、第11・13号土坑と攪乱に切られる。平面形は判然としないが、検出範囲から不整形が推定される。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第13号土坑（第55・58図）

E3・F3グリッドに位置し、第12・14・16号土坑を切り、攪乱に切られる。平面形は長径約1.3m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第58図21・22）

土器 21は土師器甕の底部片である。22は須恵器甕の胴部片である。

●第14号土坑（第55図）

E3・F3グリッドに位置し、第16号土坑を切り、第13・15号土坑に切られる。検出範囲内での直径は1.4mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第15号土坑（第55図）

E4・F3・4グリッドに位置し、第14号土坑を切り、第9号土坑に切られる。平面形は長径約1.5m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第16号土坑（第55図）

E3グリッドに位置し、第12・13・14号土坑に切られる。検出範囲内での直径は1.1mを測る。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。

●第17号土坑（第55図）

E3・F3グリッドに位置し、第11号土坑を切る。平面形は長径約1.2m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.8mを測り、底面西寄りが浅く窪む。

●第18号土坑（第55・58図）

C3グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.3mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mであるが、遺構の中央に円形の掘り込みが認められ、その底面までの深さは約0.8mを測る。

出土遺物（第58図23）

土器 23は胎土に繊維を含む胴部片で、外面に斜位の、内面に縦位の条痕文が施される。

●第19号土坑（第55図）

D3グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面は平坦である。

●第20号土坑（第55図）

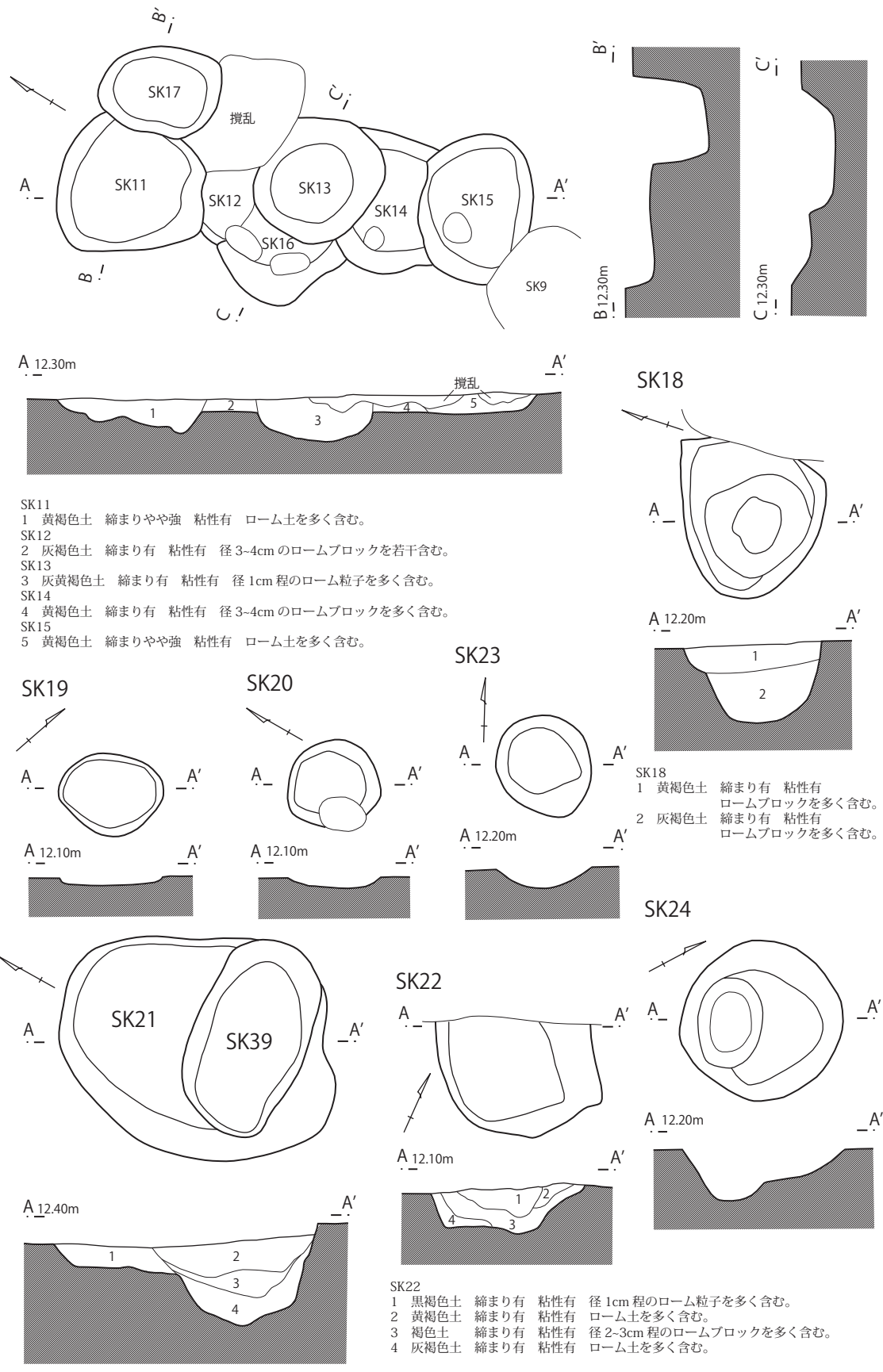
C3・D3グリッドに位置する。平面形は長径約0.9m、短径約0.8mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.1mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

●第21号土坑（第55・58図）

D5グリッドに位置し、第39号土坑に切られる。平面形は長径約3.0m、短径約2.3mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第58図24）

土器 24は胎土に繊維を含む、平縁の口縁部片である。外面に縦位から斜位の、内面に横位の条痕文が施される。



第55図 第11~24・39号土坑

●第22号土坑（第55図）

E2グリッドに位置し、遺構の北半部は調査区外に延びる。平面形は、長径は不明であるが、短径は約1.6mを測る。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面東寄りが浅く窪む。

●第23号土坑（第55図）

B4・5グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

●第24号土坑（第55図）

C4グリッドに位置する。平面形は直径約1.6mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mであるが、遺構の南隅に円形の掘り込みが認められ、その底面までの深さは約0.5mを測る。

●第25号土坑（第56・58図）

C3・4グリッドに位置し、攪乱に切られる。平面形は長径約1.7m、短径約1.5mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面南寄りが浅く窪む。遺構の北隅で黄褐色土と褐色土の堆積が僅かに認められた。

出土遺物（第58図25）

土器 25は胎土に繊維を含む平縁の口縁部片で口唇部を僅かに欠く。外面に列点と縦位の沈線文が施され、口唇部には刻みが施される。

●第26号土坑（第56・58図）

B4グリッドに位置する。平面形は長径約2.3m、短径約1.6mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第58図26）

土器 26は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。

●第27号土坑（第56・58図）

B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.9m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.5mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第58図27・28）

土器 27は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。28は土師器甕の頸部片である。

●第28号土坑（第56図）

A4・B4グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

●第29号土坑（第56図）

A6・7グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.3mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面西寄りが浅く窪む。

●第30号土坑（第56図）

B4・5グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約1.4mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面西寄りが浅く窪む。

●第31号土坑（第56・58図）

B6・C6グリッドに位置する。平面形は直径約1.5mの円形を呈す。確認面からの深さは約0.8mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物（第58図29）

土器 29は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に横位から斜位の条痕文が施される。

●第32号土坑（第56図）

C5グリッドに位置する。平面形は長径約1.3m、短径約1.1mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面東寄りが浅く窪む。

●第33号土坑（第56図）

C6グリッドに位置する。平面形は長径約1.6m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.6mを測り、底面西寄りが浅く窪む。

●第34号土坑（第56図）

B6グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.7mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面南寄りが浅く窪む。

●第35号土坑（第56図）

B5・6グリッドに位置する。平面形は長径約1.4m、短径約1.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面西寄りが浅く窪む。

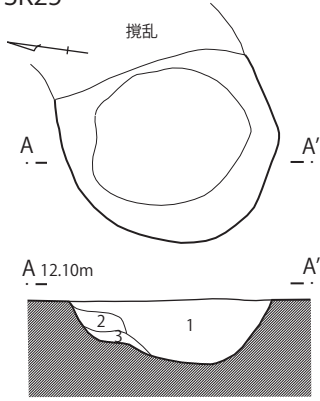
●第36号土坑（第56図）

C4・D4グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約0.9mの方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。近代の平瓦片が敷きつめられていた。

●第37号土坑（第56・58図）

D4グリッドに位置する。平面形は長径約1.0m、短径約0.9mの方形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面は平坦である。第36号土坑同様に近代の平瓦片が敷きつめられていた。

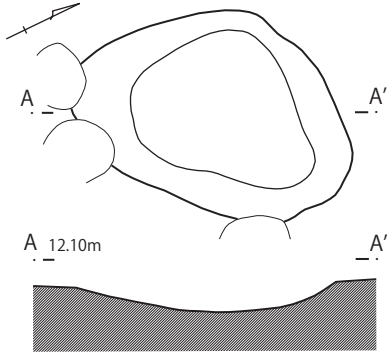
SK25



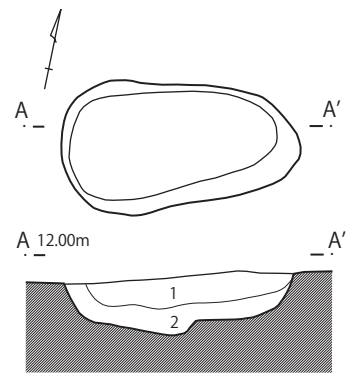
SK25

- 1 黒褐色土 締まり有 粘性有 径2-3cmのローム粒子を多く含む。  
 2 黄褐色土 締まり有 粘性有 ローム土を多く含む。  
 3 褐色土 締まり有 粘性有 径2-3cmのローム粒子を多く含む。

SK26



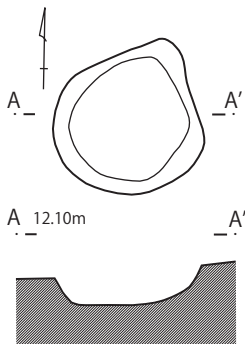
SK27



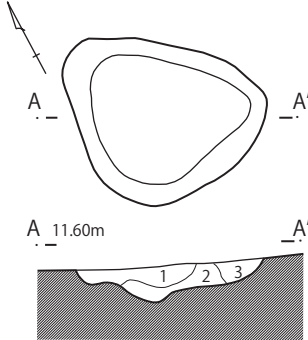
SK27

- 1 褐色土 締まり有 粘性有 径4-5cmのロームブロックを多く含む。  
 2 灰褐色土 締まりやや強 粘性有 ローム土を多く含む。

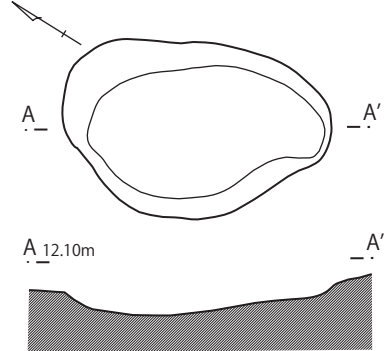
SK28



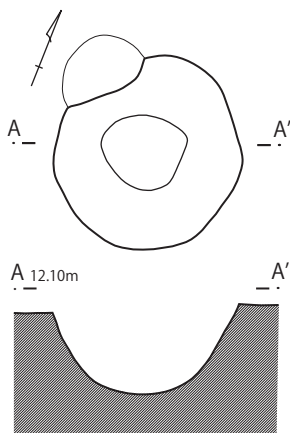
SK29



SK30



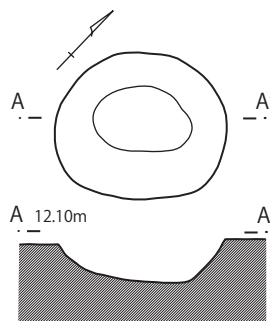
SK31



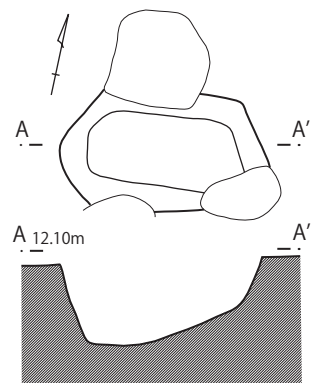
SK29

- 1 黒褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程のローム粒子を多く含む。  
 2 灰褐色土 締まり有 粘性有 径1cm程のローム粒子を多く含む。  
 3 黄褐色土 締まり有 粘性有 径3-5cmのロームブロックを多く含む。

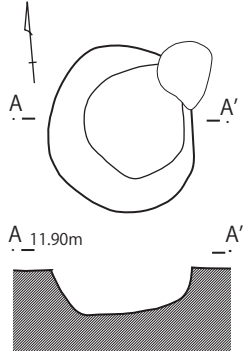
SK32



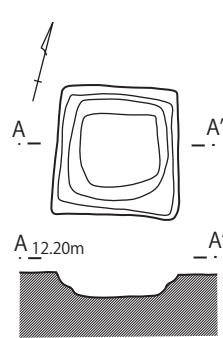
SK33



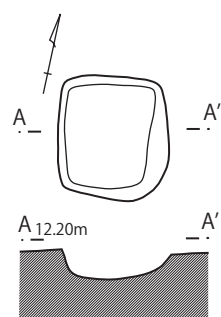
SK35



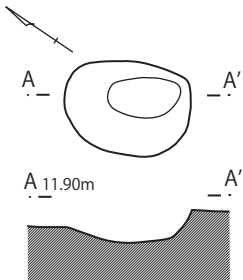
SK36



SK37



SK34



第56図 第25~37号土坑

出土遺物 (第58図30)

土器 30は胎土に繊維を含む胴部片で、外面に縦位の、内面に横位の条痕文が施される。

●第38号土坑 (第57図)

C5・6グリッドに位置し、第11号住居跡を切る。平面形は長径約1.6m、短径約1.4mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mであるが、遺構の中央に円形の掘り込みが認められ、その底面までの深さは約0.3mを測る。

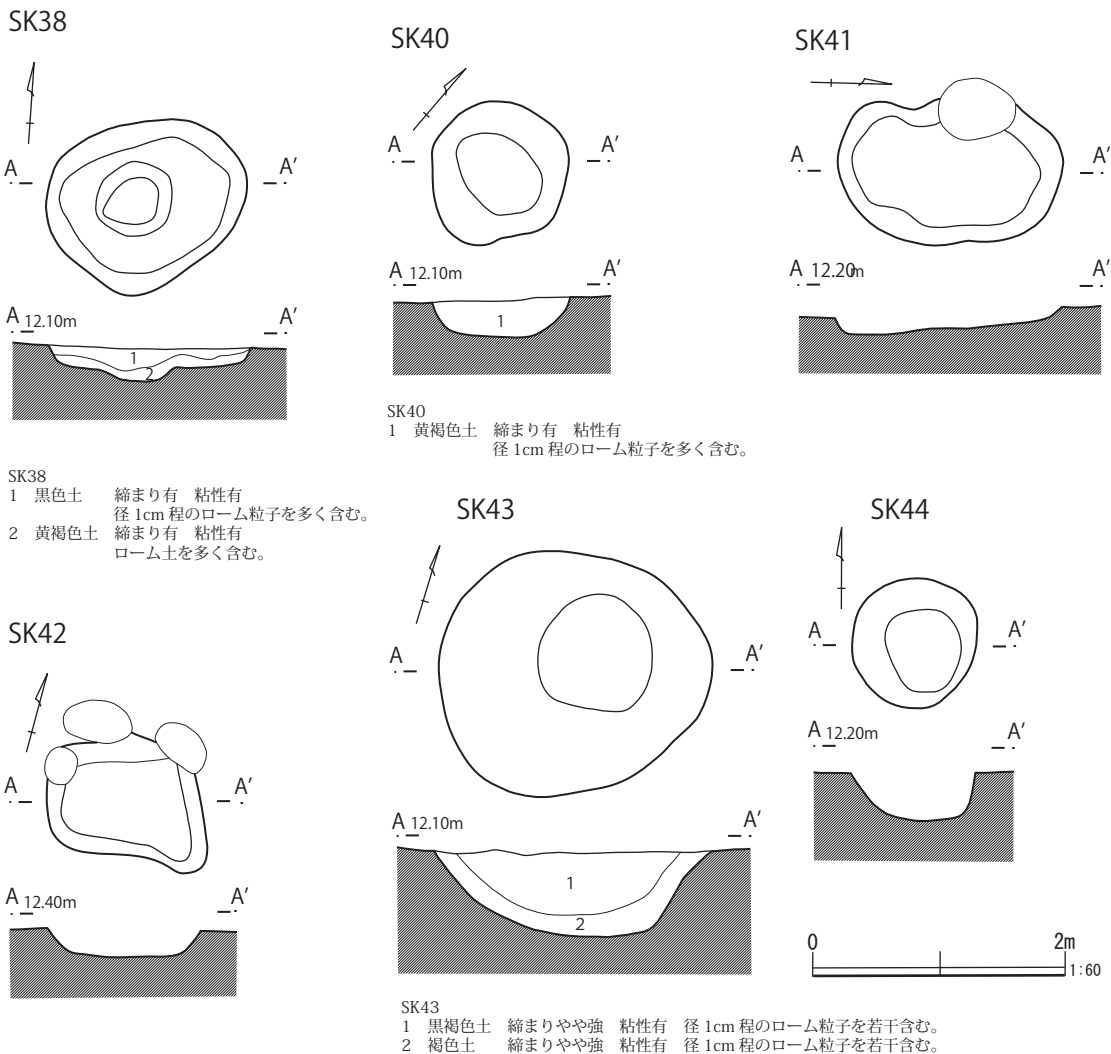
●第39号土坑 (第55・58図)

D5グリッドに位置し、第21号土坑を切る。平面形は長径約2.0m、短径約1.1mの楕円形を呈す。確認面からの深さは約1.0mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

出土遺物 (第58図31~33)

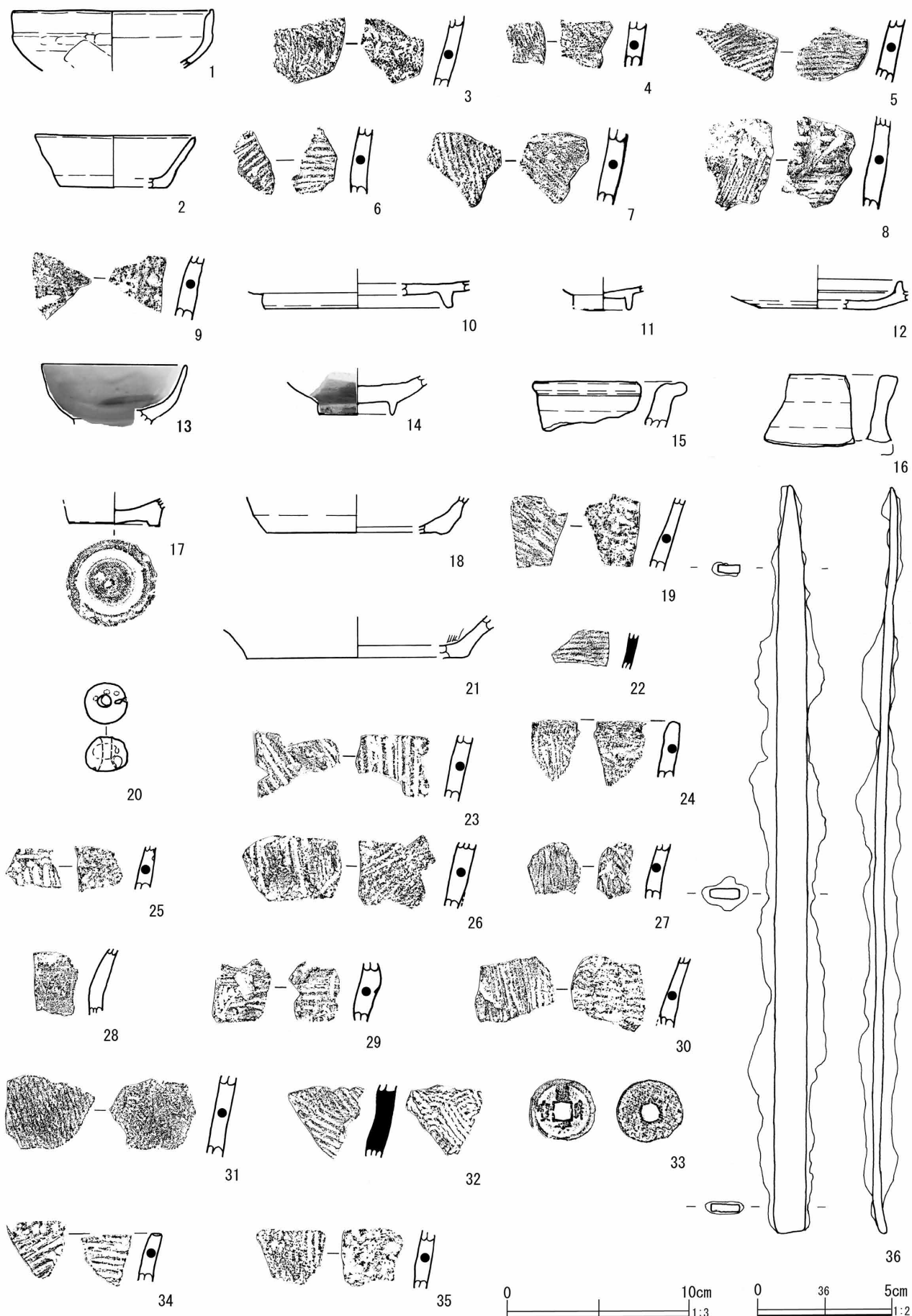
土器 31は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕が施される。32は須恵器甕の胴部片である。

銭貨 33は聖宋元宝である。初鑄年は康和3年(1101年)の北宋銭である。文字の書体は篆書体である。



第57図 第38・40~44号土坑





第58图 土坑出土遺物 (1)

●第40号土坑（第57・58図）

C6グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面東寄りが浅く窪む。

出土遺物（第58図34）

土器 34は胎土に繊維を含む平縁の口縁部で、表裏に斜位の条痕文が施される。口唇部には刻みが施される。

●第41号土坑（第57・58図）

D6グリッドに位置する。平面形は長径約1.8m、短径約1.2mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.2mを測り、底面南寄りが浅く窪む。

出土遺物（第58図35）

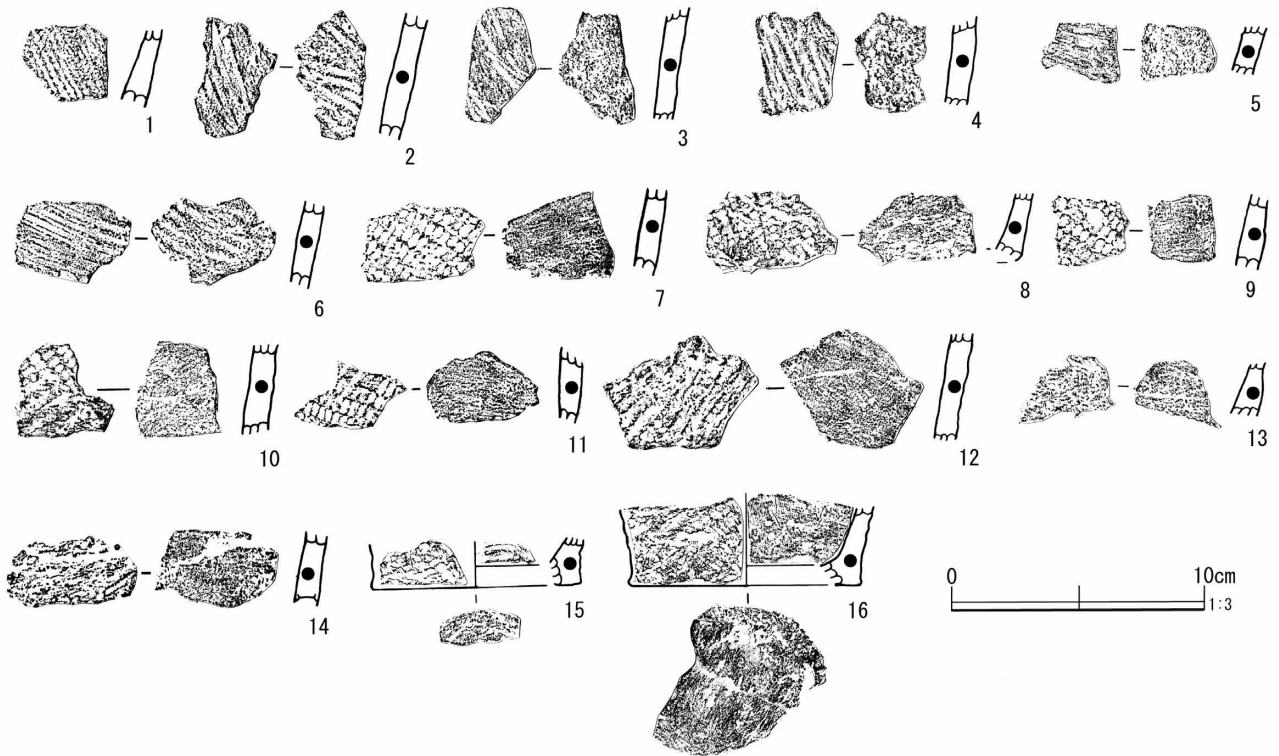
土器 35は胎土に繊維を含む胴部片で、外面に縦位の条痕文が施される。

●第42号土坑（第57・58図）

F8グリッドに位置する。平面形は長径約1.2m、短径約1.0mの不整円形を呈す。確認面からの深さは約0.3mを測り、底面は平坦である。

出土遺物（第58図36）

鉄器 36は、棒状鉄製品とした。平面形は小刀あるいは刀子に似た形状であるが、横断面は長方形を呈し、刃部は認められない。先端が鋭利なことから、鉄鏝のような機能を果たしていた可能性も考えられる。



第59図 土坑出土遺物（2）

●第43号土坑（第57・59図）

G6・H6グリッドに位置する。平面形は長径約2.1m、短径約2.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.7mを測り、底面中央付近が浅く窪む。

条痕文系土器がまとまって出土している。

出土遺物（第59図）

土器 1は撚糸文系土器の胴部片である。2～17の胎土には繊維を含む。2～6は表裏に斜位の条痕文が施される胴部片である。7～12は外面に斜位の単節縄文が施される胴部片である。器面の凹凸が目立つ。13～14は無文の胴部片である。15・16は底部片で、外面に斜位の単節縄文が施される。

●第44号土坑（第57図）

F5グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦である。

第17表 土坑出土遺物観察表

図版	番号	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
58	1	SK1	土師器	坏	[11.6]	—	(3.2)	10	角・白・黒・礫	良好	赤褐色	
58	2	SK2	土師器	坏	[8.8]	[6.0]	(2.8)	10	石英・角・白・黒	普通	橙色	
58	10	SK4	陶器	埴	—	[10.0]	(1.4)	10	黒	良好	灰白色	
58	11	SK4	陶器	埴	—	[3.2]	(1.4)	10	白・黒	良好	灰色	
58	12	SK4	陶器	灯明皿	—	[6.0]	(1.6)	20	白・黒	良好	灰色	釉薬は黒褐色
58	13	SK4	磁器	碗	[8.0]	[4.2]	(3.3)	20	黒	良好	灰白色	
58	14	SK4	磁器	碗	—	[4.0]	(2.3)	30	黒	良好	灰白色	
58	15	SK4	瓦質土器	焙烙	—	—	(3.9)	10	角・白・黒	普通	橙色	
58	16	SK4	瓦質土器	焙烙	—	—	(2.5)	10	角・白・黒	良好	浅黄橙色	
58	17	SK6	陶器	埴	—	[5.0]	(1.5)	10	白・黒	良好	浅黄色	釉薬は黒褐色
58	18	SK7	土師器	坏	—	[9.8]	(2.0)	10	白・黒	普通	橙色	
58	21	SK13	土師器	甕	—	[12.0]	(2.3)	10	角・白・黒	普通	明赤褐色	
58	22	SK13	須恵器	甕	—	—	(1.9)	10	黒	良好	灰色	
58	32	SK39	須恵器	甕	—	—	(4.0)	10	白・黒	良好	灰色	
図版	番号	出土遺構	種別	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考	
58	20	SK11	土玉	1.9	2.3	1.0	7.3	白・黒	普通	橙色		
図版	番号	出土遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考				
58	36	SK42	棒状鉄製品	27.5	1.2	0.4	109.9	鉄鏝か				
図版	番号	出土遺構	種別	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考				
58	33	SK39	聖宋元宝	2.5	6.0	0.9	2.1					

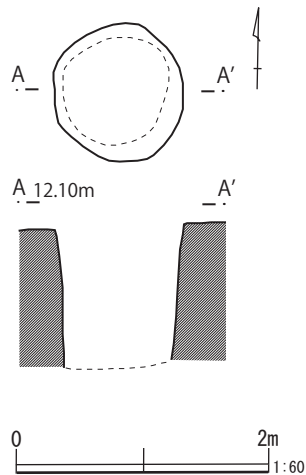
(4) 井戸跡

●第1号井戸跡（第60・61図）

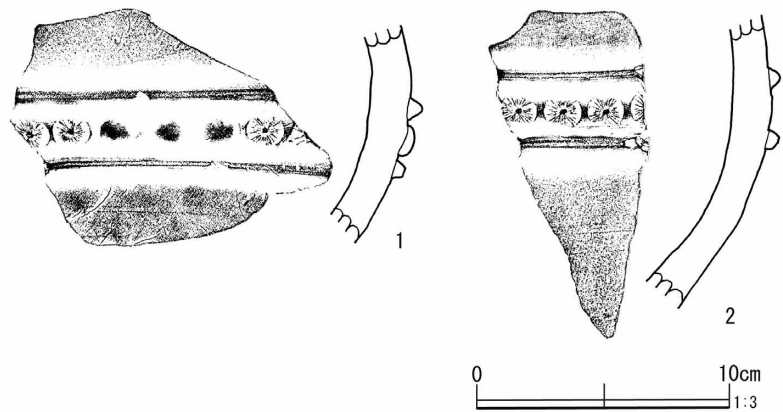
D5・6グリッドに位置する。平面形は長径約1.1m、短径約1.0mの不整形円形を呈す。開口部が狭く直線的に落ち込む。近世以降の所産と考えられる。

出土遺物（第61図）

土器 1・2は火鉢の胴部片である。円形の浮文が貼り付けられる。



第60図 第1号井戸跡



第61図 第1号井戸跡出土遺物

第18表 第1号井戸跡出土遺物観察表

図版	番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
61	1	瓦質土器	火鉢	—	—	(8.5)	10	白・黒	良好	灰白色	
61	2	瓦質土器	火鉢	—	—	(11.2)	10	白・黒	良好	灰白色	

### (5) 地下式坑

#### ●第1号地下式坑 (第62図)

F3グリッドに位置する。平面形は長径約2.8m、短径約1.7mを測り、不整円形を2つ繋げたような形状を呈す。確認面からの深さは1.4mを測り、底面は平坦である。壁面がオーバーハングするが、遺構の西寄りで顕著となり、横断面形はフラスコ形を呈す。

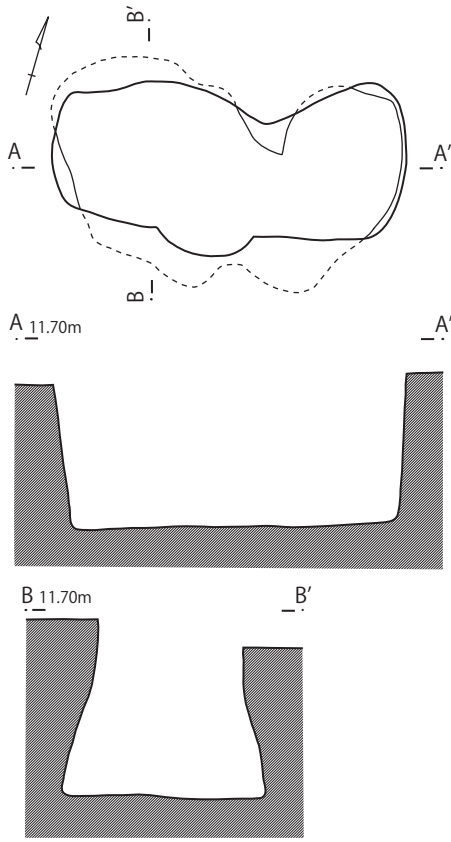
#### ●第2号地下式坑 (第62図)

F3・G3グリッドに位置し、第2号住居跡を切る。平面形は長径約2.5m、短径約2.3mの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.5mを測り、底面は平坦である。南側に張り出しており、この箇所には縦穴が付けられたものと推定される。壁面はオーバーハングしており、底面から0.2m程上部に横方向に延びるピットが3箇所認められた。

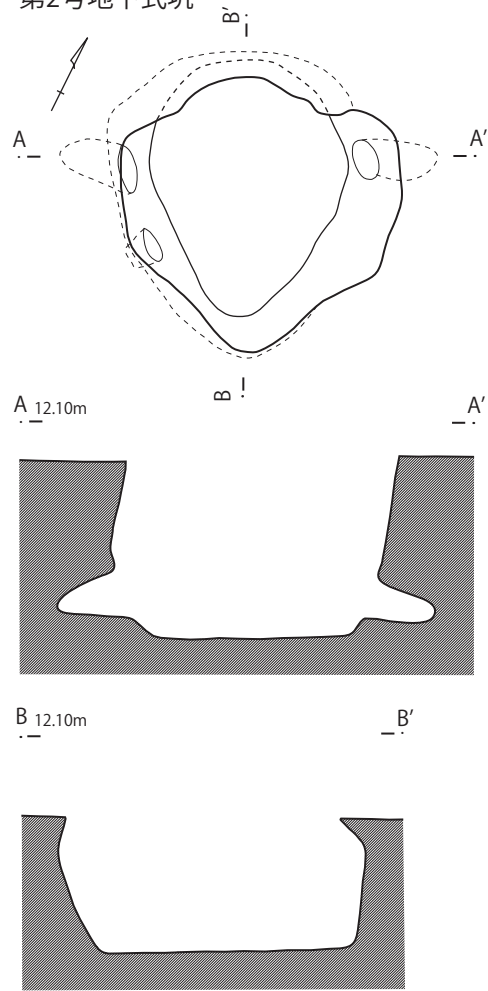
#### ●第3号地下式坑 (第62図)

B6・7グリッドに位置する。平面形は長径約2.3m、短径約2.0mの不整円形を呈す。確認面からの深さは1.0mを測り、底面は平坦である。南側に張り出しており、この箇所には縦穴が付けられたものと推定される。

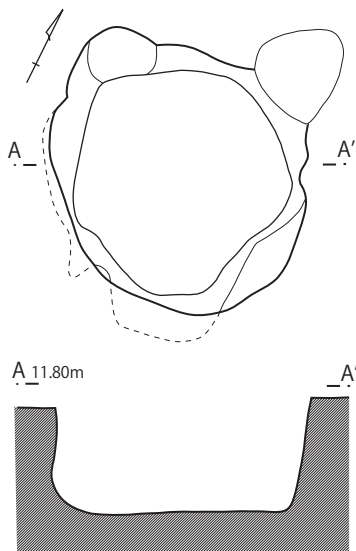
第1号地下式坑



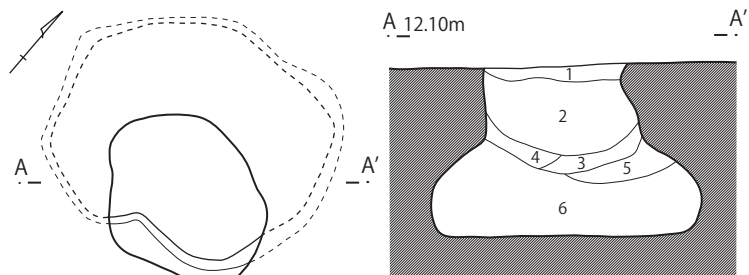
第2号地下式坑



第3号地下式坑



第4号地下式坑



第4号地下式坑

- 1 灰褐色土 縮まり有 粘性有 径 3-4cm のロームブロックと灰色の粘土ブロックを多く含む。
- 2 褐色土 縮まり有 粘性有 径 3-4cm のロームブロックと灰色の粘土ブロックを多く含む。
- 3 灰褐色土 縮まり有 粘性有 径 4-5cm の灰色の粘土ブロックを多く含む。
- 4 灰褐色土 縮まりやや強 粘性やや強 径 4-5cm の灰色の粘土ブロックを多く含む。
- 5 褐色土 縮まりやや強 粘性やや強 径 4-5cm の灰色の粘土ブロックを多く含む。
- 6 黄褐色土 縮まりやや弱 粘性有 径 3-4cm のロームブロックを多く含む。



第62図 第1~4号地下式坑

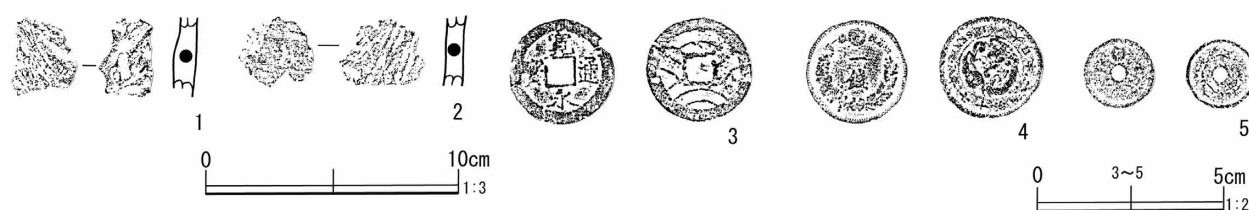
●第4号地下式坑（第62・63図）

B6・7・C6・7グリッドに位置し、天井部の大半が残った状態で検出された。平面形は長径約2.4m、短径約2.2mの不整形円形を呈す。確認面からの深さは1.3mを測り、底面は平坦である。壁面がオーバーハンクしており、袋状の横断面形を呈す。南東寄りに竪穴が付けられる。

出土遺物（第63図）

土器 1・2は胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。

銭貨 3は寛永通宝である。背に波模様をもつ銅四文銭で、「寶」の字体から寛文8年（1668年）以降に鑄造された新寛永銭と思われる。4は一銭銅貨で「明治十年」の刻印が読める。5は大正期の小型五銭白銅貨である。



第63図 地下式坑出土遺物

第19表 地下式坑出土遺物観察表

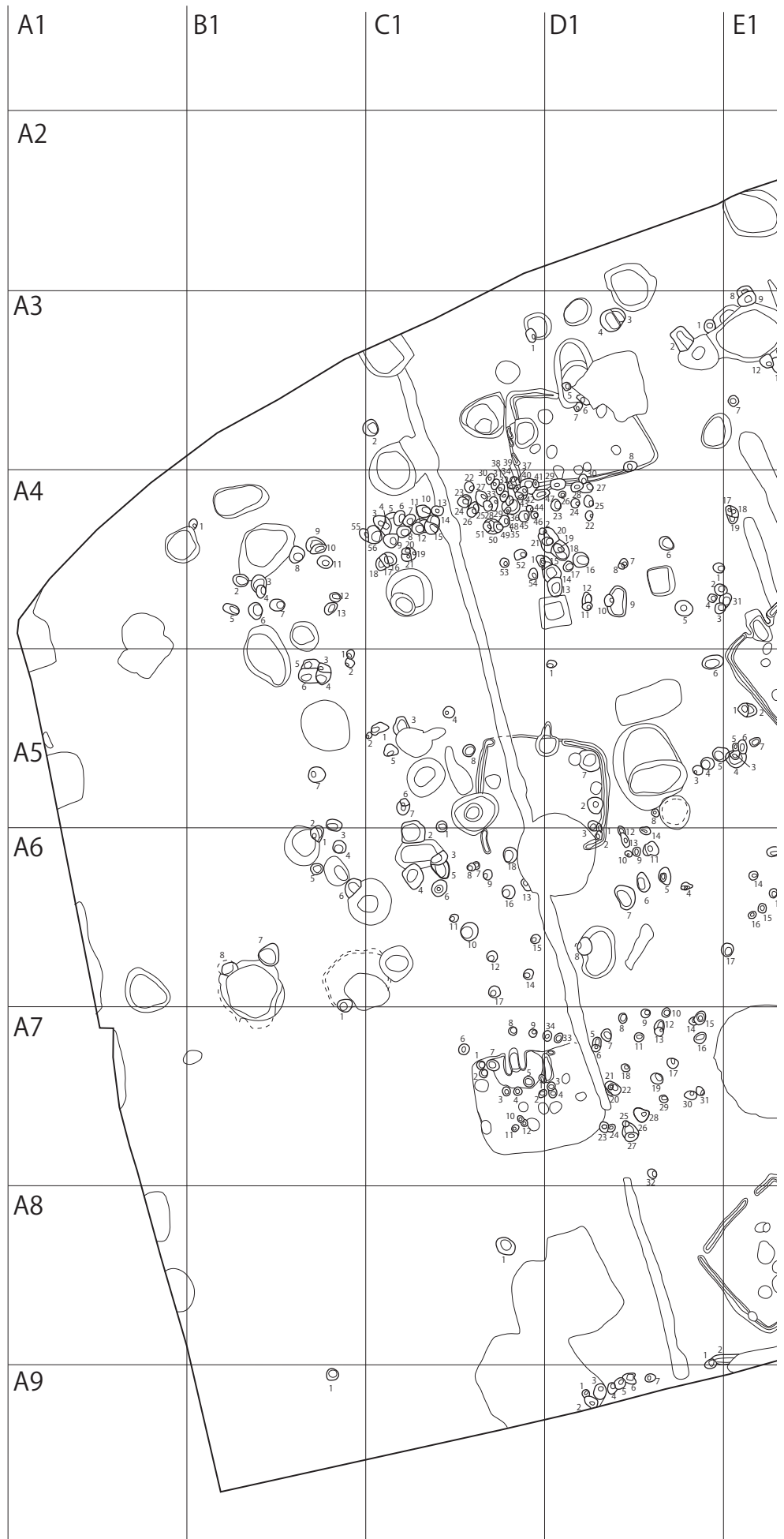
図版	番号	出土遺構	種別	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
63	3	第5号地下式坑	寛永通宝	29.0	6.2	0.8	3.4	
63	4	第5号地下式坑	一銭銅貨	28.0	—	1.3	6.5	明治十年
63	5	第5号地下式坑	小型五銭白銅貨	19.1	3.1	1.0	2.3	

(6) ピット（第64・65図）

検出されたピットは552基を数えるが、遺物の出土は多くはなかった。明確な柱穴列や掘立柱建物跡として認定することはできなかった。ピットの計測値は第22表に示した通りである。

出土遺物（第65図）

土器 1はC4グリッドP1出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、外面には斜位の条痕文と隆帯が観察される。内面には横位の条痕文が施される。2は、C4グリッドP28出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、外面に斜位の、内面には縦位の条痕文が施される。3はD4グリッドP2出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。5・6はD5グリッドP7出土資料で、土師器杯の口縁部から体部片である。6は内外面に赤彩が施される。7はD6グリッドP4出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、外面に斜位、内面に横位の条痕文が施される。10はE4グリッドP10出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、外面に縦位の条痕文が施される。11・12はF1グリッドP3出土資料である。11は須恵器甕の胴部片、12は土師器甕の頸部片である。13はF2グリッドP5出土資料で、筒茶碗である。14はF4グリッドP3出土資料である。胎土に繊維を含む胴部片で、表裏に斜位の条痕文が施される。





第64図 第10地点ピット配置図



第20表 第10地点ピット計測表

グリッド	番号	長径	短径	深さ	グリッド	番号	長径	短径	深さ
B4	1	(30)	28	17	C4	23	38	(13)	15
	2	64	40	14		24	40	32	27
	3	56	50	13		25	36	(20)	20
	4	46	32	17		26	26	24	27
	5	56	30	24		27	54	40	28
	6	58	48	23		28	36	28	35
	7	52	42	35		29	40	(22)	40
	8	56	48	25		30	36	(16)	31
	9	52	(26)	12		31	36	(16)	19
	10	60	28	17		32	36	24	26
	11	52	38	20		33	54	(24)	22
	12	38	30	22		34	32	24	25
	13	50	34	15		35	26	18	34
B5	1	30	28	34	36	60	(30)	27	
	2	34	28	28	37	(32)	28	17	
	3	50	32	16	38	(24)	(18)	15	
	4	52	(40)	21	39	34	26	37	
	5	50	(30)	11	40	(42)	50	28	
	6	(56)	(50)	19	41	28	18	17	
	7	60	50	28	42	34	(26)	36	
B6	1	46	(20)	23	43	32	22	24	
	2	50	28	15	44	24	22	13	
	3	50	38	19	45	40	36	21	
	4	45	40	16	46	24	22	14	
	5	45	38	23	47	56	(30)	18	
	6	64	(44)	34	48	38	(36)	19	
	7	70	70	86	49	36	30	21	
	8	56	(38)	56	50	50	(16)	17	
B7	1	50	42	12	51	32	26	18	
B9	1	42	36	14	52	42	30	51	
C3	1	46	32	30	53	32	32	26	
	2	56	50	18	54	38	30	40	
C4	1	42	28	54	55	50	32	14	
	2	20	20	43	56	60	(46)	12	
	3	50	36	26	C5	1	50	30	23
	4	(60)	(26)	22		2	20	20	25
	5	(72)	(20)	16		3	(42)	52	16
	6	52	36	24		4	40	38	29
	7	44	34	30		5	46	44	19
	8	48	38	20		6	32	24	46
	9	51	44	28		7	(42)	42	47
	10	50	40	20		8	44	40	14
	11	(48)	(4)	10	C6	1	36	34	11
	12	42	38	18		2	80	76	43
	13	40	32	16		3	64	(34)	45
	14	44	(26)	14		4	82	70	58
	15	50	(38)	28		5	(50)	52	33
	16	46	(26)	21		6	58	50	51
	17	46	22	21		7	24	(14)	14
	18	42	24	17		8	26	26	15
	19	40	(16)	8		9	34	29	49
	20	28	(20)	22		10	60	58	25
	21	30	(24)	22		11	28	26	22
	22	46	32	21		12	38	34	24

※単位は全てcm

グリッド	番号	長径	短径	深さ
C6	13	46	(22)	21
	14	34	30	20
	15	34	32	30
	16	44	44	11
	17	40	40	22
	18	52	48	14
C7	1	42	32	21
	2	34	(22)	8
	3	30	26	13
	4	30	26	13
	5	36	34	10
	6	38	36	34
	7	28	24	16
	8	30	28	6
	9	30	28	26
	10	(24)	20	15
	11	24	22	16
	12	24	(20)	15
C8	1	70	54	36
D3	1	46	36	18
	2	76	56	30
	3	62	(30)	12
	4	72	58	30
	5	27	24	22
	6	46	(26)	20
	7	30	23	11
	8	44	35	9
D4	1	38	34	14
	2	46	38	23
	3	40	32	29
	4	28	26	26
	5	62	52	33
	6	52	42	9
	7	28	(16)	24
	8	24	20	36
	9	102	(41)	11
	10	42	30	30
	11	32	24	34
	12	(34)	30	10
	13	66	50	20
	14	60	(40)	21
	15	(42)	38	20
	16	54	50	17
	17	36	32	15
	18	(64)	56	20
	19	36	28	17
	20	(68)	58	36
	21	36	24	27
	22	32	26	14
	23	40	32	14
	24	30	28	11
	25	38	30	15
	26	26	24	25
	27	44	(32)	26
	28	42	30	25
	29	50	36	20

グリッド	番号	長径	短径	深さ
D4	30	(30)	28	5
	31	(38)	36	27
D5	1	33	23	18
	2	55	49	19
	3	33	33	32
	4	46	42	24
	5	56	47	15
	6	71	47	18
	7	81	68	35
	8	26	25	41
D6	1	(16)	(26)	15
	2	30	20	16
	3	28	27	22
	4	39	22	59
	5	30	22	51
	6	67	40	23
	7	88	60	21
	8	60	48	50
	9	29	28	30
	10	26	22	21
	11	52	49	52
	12	(23)	24	21
	13	54	25	27
	14	36	23	29
D7	1	30	21	15
	2	34	25	21
	3	27	26	16
	4	(30)	26	10
	5	(23)	29	12
	6	27	24	20
	7	44	33	15
	8	34	29	20
	9	32	28	19
	10	31	29	16
	11	29	28	25
	12	(27)	32	10
	13	30	30	22
	14	(13)	25	23
	15	46	36	55
	16	44	31	20
	17	39	34	32
	18	30	22	9
	19	44	36	24
	20	(15)	(9)	15
	21	22	17	16
	22	53	33	49
	23	38	35	16
	24	(25)	25	9
	25	23	20	29
	26	(20)	43	23
	27	48	27	35
	28	52	36	15
	29	25	22	18
	30	41	30	26
	31	34	25	23
	32	31	28	23

グリッド	番号	長径	短径	深さ
D7	33	36	28	17
	34	37	29	36
D8	1	39	29	16
	2	55	33	18
D9	1	(23)	24	15
	2	(42)	36	34
	3	53	41	31
	4	42	34	25
	5	35	34	21
	6	52	35	22
	7	36	30	27
E2	1	69	44	23
	2	60	37	15
	3	(27)	29	22
	4	35	35	25
E3	1	41	23	13
	2	39	21	11
	3	24	19	22
	4	52	50	18
	5	54	52	15
	6	53	41	16
	7	35	35	26
	8	50	(22)	10
	9	63	42	15
	10	37	27	42
	11	56	48	26
	12	41	37	24
E4	1	37	36	41
	2	73	65	37
	3	37	30	20
	4	(27)	36	50
	5	28	19	49
	6	(20)	25	10
	7	34	27	43
	8	63	56	50
	9	35	26	12
	10	77	67	40
	11	(24)	37	35
	12	32	22	18
	13	(27)	39	34
	14	61	56	34
	15	55	46	55
	16	39	34	41
	17	38	21	29
	18	(28)	26	32
	19	(26)	36	24
	20	49	37	9
E5	1	45	37	32
	2	(28)	43	15
	3	(37)	27	17
	4	69	57	38
	5	24	(18)	54
	6	46	27	48
	7	32	25	32
	8	(74)	60	16
	9	28	24	31

グリッド	番号	長径	短径	深さ
E5	10	66	33	15
	11	98	47	86
	12	44	34	48
	13	35	31	36
E6	14	41	37	13
	1	39	31	20
	2	(27)	23	26
	3	33	23	30
	4	53	39	33
	5	33	28	50
	6	33	32	22
	7	53	30	24
	8	26	24	28
	9	34	30	22
	10	51	33	42
	11	32	26	95
	12	42	30	51
	13	28	25	30
	14	30	29	14
	15	31	25	17
	16	24	22	13
	17	42	39	47
	18	34	27	32
	19	32	28	17
	20	(23)	(38)	12
21	21	16	17	
E7	1	48	35	59
	2	(29)	25	18
	3	30	26	18
	4	(19)	19	11
	5	(22)	24	12
	6	22	19	13
	7	20	19	15
	8	35	26	30
	9	27	23	16
	10	38	31	19
	11	28	22	36
	12	32	30	30
	13	27	21	22
	14	21	20	14
	15	22	20	19
	16	28	19	21
	17	37	28	38
E8	1	37	37	34
	2	(34)	37	26
	3	41	35	18
	4	42	32	18
	5	31	26	28
	6	86	59	34
	7	47	38	25
	8	39	31	22
	9	31	24	12
	10	87	59	45
	11	(29)	47	38
	12	53	(40)	29
F1	1	28	(21)	29

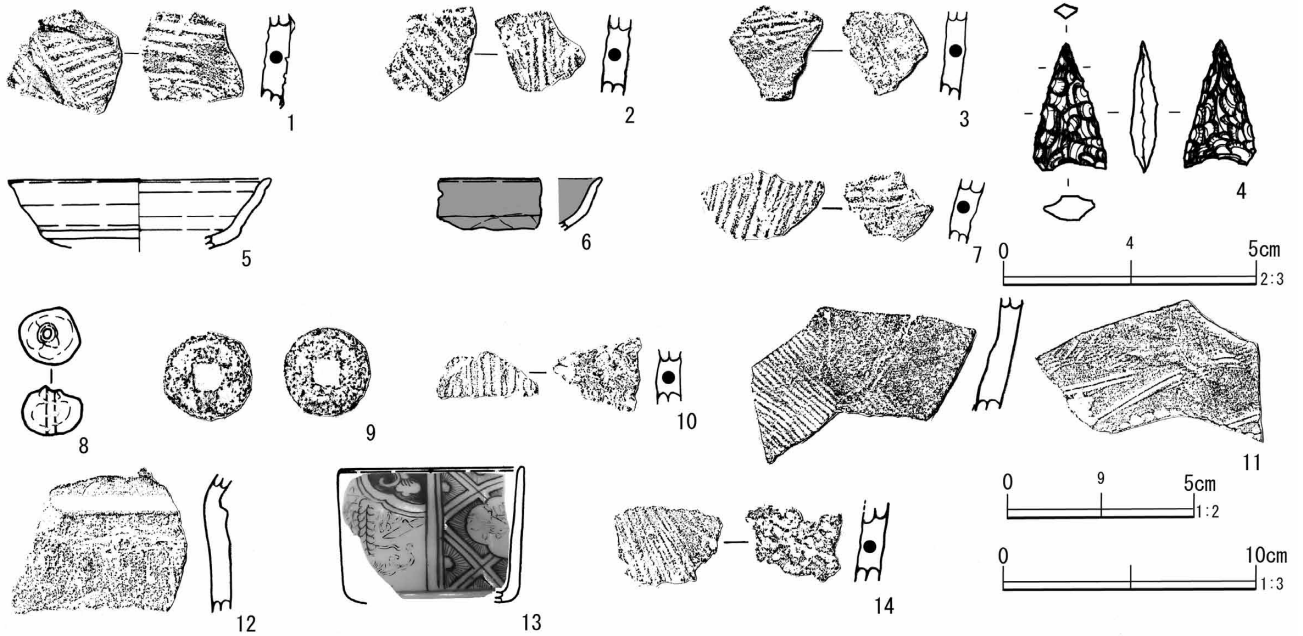
グリッド	番号	長径	短径	深さ
F1	2	40	29	51
	3	(41)	36	29
	4	(31)	24	14
	5	(25)	24	24
	6	29	20	24
F2	1	(15)	20	12
	2	57	42	33
	3	25	25	43
	4	25	25	42
	5	68	49	55
	6	26	(15)	28
	7	28	25	13
	8	28	24	19
	9	29	17	19
	10	28	23	23
	11	(57)	52	23
	12	(17)	29	16
	13	26	17	18
	14	25	21	16
	15	21	(10)	30
	16	(24)	(18)	14
	17	42	23	23
	18	29	(18)	24
	19	32	27	14
	20	26	26	9
	21	30	24	27
	22	34	26	8
	23	45	37	53
	24	40	(14)	11
	25	39	35	18
	26	25	24	28
	27	31	22	11
	28	28	26	15
	29	33	27	20
	30	34	33	18
31	(13)	25	12	
32	(22)	29	16	
33	29	26	34	
34	81	(43)	15	
35	67	(43)	20	
36	23	23	20	
37	(17)	19	16	
38	42	33	9	
39	36	30	25	
40	(27)	30	32	
41	26	23	12	
42	34	24	12	
43	(16)	(13)	19	
44	23	20	12	
45	(17)	(31)	32	
46	41	29	42	
47	33	20	16	
48	42	35	25	
49	(38)	(36)	10	
50	(47)	31	21	
F3	1	19	16	4

グリッド	番号	長径	短径	深さ
F3	2	77	65	16
	3	58	44	46
	4	(28)	69	33
	5	65	(41)	37
	6	70	59	58
	7	(36)	(19)	22
	8	(63)	51	47
	9	(46)	41	36
	10	33	29	31
	11	43	39	32
	12	(20)	39	9
	13	46	(33)	11
	14	62	42	17
	15	(27)	90	10
	16	43	(26)	19
	F4	1	57	39
2		38	25	37
3		50	(39)	32
4		59	(41)	60
5		(35)	83	25
6		56	48	38
7		31	27	22
F5	1	30	19	15
	2	28	(16)	13
	3	39	28	52
	4	43	35	19
	5	39	31	15
	6	31	30	23
	7	35	27	14
F6	1	31	28	35
	2	29	25	18
	3	38	33	48
	4	23	23	17
	5	29	28	37
	6	34	29	10
F7	1	21	19	15
	2	44	34	34
	3	26	20	50
	4	32	27	54
	5	34	29	16
	6	26	22	16
	7	23	19	10
	8	20	18	34
	9	26	17	19
	10	26	19	18
	11	22	21	9
	12	22	17	7
	13	31	31	13
	14	29	27	12
	15	32	24	10
16	27	18	11	
17	26	20	8	
18	36	36	31	
19	48	38	29	
20	40	33	20	
21	25	20	22	

グリッド	番号	長径	短径	深さ
F7	22	38	29	22
	23	58	39	25
	24	30	26	24
	25	25	23	29
	26	37	35	11
	27	38	26	16
	28	30	37	17
	29	50	41	27
	30	39	39	29
	31	30	22	7
	32	31	26	16
	33	39	35	29
	34	31	28	7
	35	21	(11)	33
	36	(24)	25	21
	37	19	19	22
	38	(32)	37	6
	39	26	20	7
	40	(50)	47	11
	41	28	26	13
	42	32	27	18
	F8	1	51	45
2		33	24	18
3		27	17	27
4		(18)	35	22
5		38	27	22
6		(44)	43	13
7		38	29	25
8		51	28	14
9		28	(24)	14
10		25	22	15
11		34	31	16
12		41	24	29
13		(21)	25	13
14		(31)	34	16
15		41	27	17
16		(29)	31	17
17		32	32	14
18		25	19	21
19		53	29	35
20		34	28	20
21		41	32	26
22		37	24	35
23		37	34	33
24		28	24	39
25		34	27	47
26		42	38	20
27		(26)	34	19
28		(37)	36	31
29		55	49	46
30		36	25	28
31		48	29	31
32		(29)	33	34
33		(26)	28	23

グリッド	番号	長径	短径	深さ	
F8	34	31	25	26	
	35	50	(18)	15	
	36	(26)	24	24	
	37	31	21	34	
	38	26	24	9	
	39	26	24	21	
	40	33	30	12	
	41	38	(26)	26	
	42	47	(25)	29	
	43	43	(36)	29	
	44	33	27	13	
	45	30	28	20	
	46	(26)	21	16	
	47	27	26	20	
	48	49	46	17	
	49	25	24	24	
	50	37	28	39	
	51	(30)	28	26	
	52	(34)	33	37	
	G4	1	(62)	55	19
		2	82	72	15
		3	53	39	17
4		53	37	22	
G5	1	29	24	19	
	2	61	37	77	
	3	66	(22)	60	
	4	37	(23)	46	
	5	45	41	91	
	6	42	31	20	
	7	(71)	65	12	
	8	26	24	15	
	9	(26)	26	15	
	10	55	31	16	
	11	(29)	34	19	
	12	59	(32)	20	
G6	1	39	32	15	
	2	32	26	37	
	3	31	31	9	
	4	39	36	18	
G7	1	35	21	37	
	2	46	39	28	
	3	40	35	37	
	4	51	39	35	
	5	44	26	22	
G8	1	32	27	26	
	2	31	29	51	
H6	1	41	34	40	
	2	72	(39)	18	
H7	1	30	18	32	
	2	(19)	23	22	
	3	34	31	13	
	4	25	22	25	
	5	34	31	22	

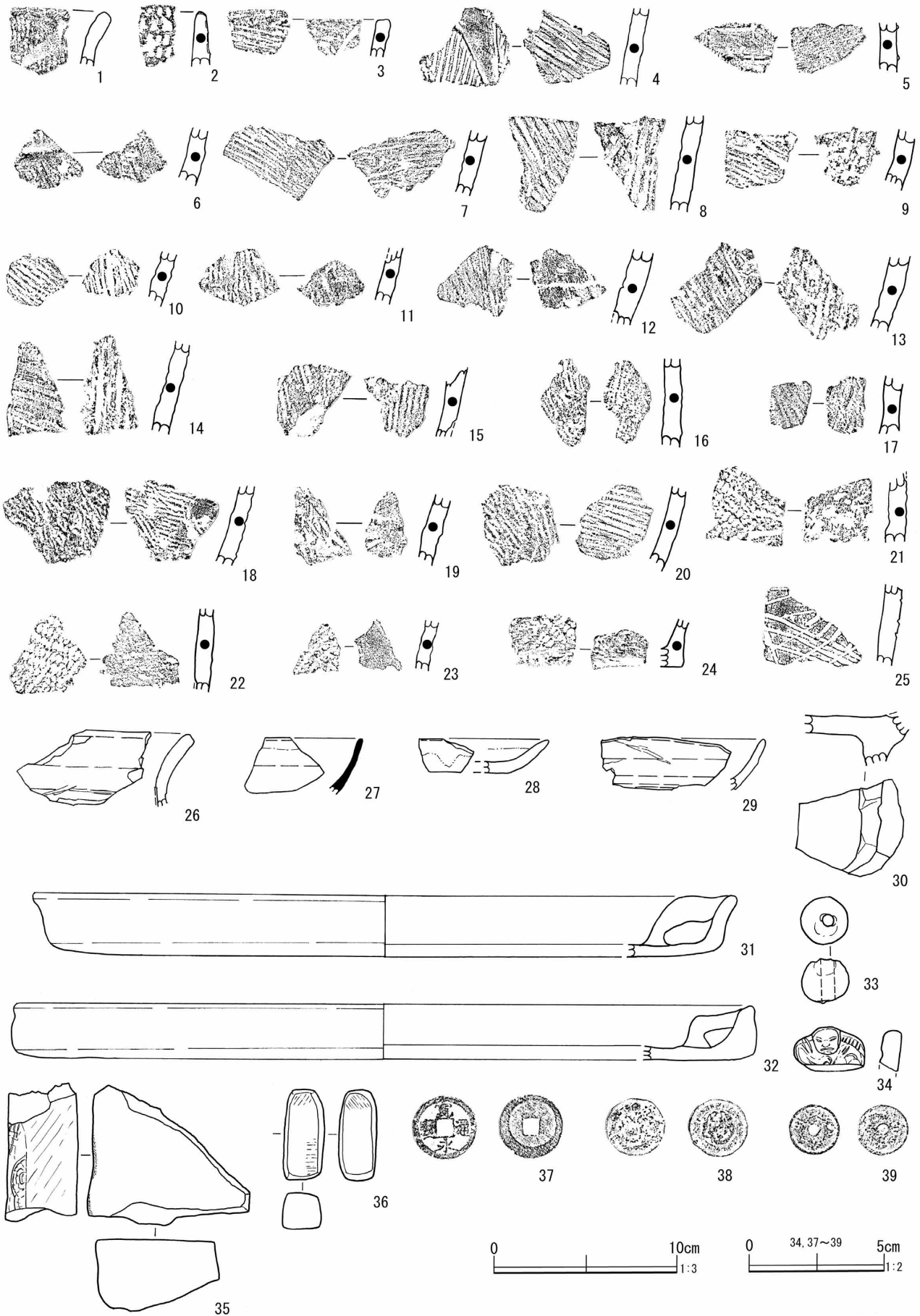
土製品 8はE3グリッドP4出土資料で、土玉である。孔径は概ね0.5cmを測り、貫通している。  
 石器 4はD5グリッドP1出土資料である。凹基無茎の石鏃で、両側縁に規則的な剥離が施される。  
 銭貨 9はE4グリッドP8出土資料で、銅銭である。表面の摩耗が著しく文字等は判読不能である。



第65図 グリッドピット出土遺物

第21表 グリッドピット出土遺物観察表

図版	番号	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
65	5	D5 P7	土師器	坏	[10.4]	—	(2.8)	10	角・白	普通	褐色	
65	6	D5 P7	土師器	坏	—	—	(2.0)	10	白	普通	褐色	内外面赤彩
65	11	F1 P3	須恵器	甕	—	—	(5.7)	10	黒	良好	灰白色	
65	12	F1 P3	土師器	甕	—	—	(5.5)	10	白・砂粒	普通	橙色	
65	13	F2 P5	磁器	筒茶碗	[7.3]	—	(5.3)	20	黒	良好	灰白色	
図版	番号	出土遺構	種別	器種	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考
65	8	E3 P4	土玉		1.9	2.4	0.5	6.6	白・黒	普通	明褐色	
図版	番号	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
65	4	D5 P1	石鏃	チャート	2.4	1.4	0.5	1.3	凹基無茎			
図版	番号	出土遺構	種別	器種	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考			
65	9	E4 P8	銅銭		23.5	7.0	0.9	2.1	判読不能			



第66図 グリッド出土遺物

(7) グリッド出土遺物 (第66図)

**土器** 1は撚糸文系土器の口縁部片である。口唇部が玉縁状に肥厚し、やや外反する。2～24の胎土には繊維を含む。2は平縁の口縁部片で半裁竹管状の施文具による刺突文が施される。口唇部には刻みが施される。3は平縁の口縁部片で斜位の条痕文が施される。4は胴部片で外面は微隆起による区画の中に斜位の沈線が施される。内面には斜位の条痕文が施される。5～20は表裏に横位から斜位の条痕文が施される胴部片である。19・20は器面の凹凸が目立つ。21～23は胴部片で斜位の単節縄文が施される。24は底部片で斜位の単節縄文が施される。25は胴部片でヘラ状施文具によって格子目状に沈線が描出される。26は土師器甕の口縁部片である。27は須恵器坏の口縁部片である。外面に重ね焼きの痕跡が認められる。28は縁釉小皿の口縁部片である。29は志野碗の口縁部片である。30は瓦質土器の壺の底部片である。31・32は焙烙である。内耳が底面に付き、底部は平底である。

**土製品** 33は土玉である。孔径は概ね0.6cmを測り、貫通している。34は人物を模した泥面子である。重量は2.2gを測る。

**石器** 35は敲石である。被熱を受けて全面が赤みを帯びている。36は砥石である。全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。

**銭貨** 37は寛永通宝の銅一文銭で、「寶」の字体から寛永3年から明暦2年(1626～1656年) 鑄造の古寛永銭と思われる。38は半銭銅貨で「明治十六年」の刻印が読める。39は大正期の小型五銭白銅貨である。

第22表 グリッド出土遺物観察表

図版	番号	出土遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
66	26	E5	土師器	甕	—	—	(4.0)	10	白	普通	橙色	
66	27	F3	須恵器	坏	—	—	(3.0)	10	白	普通	灰色	
66	28	E4	陶器	縁釉小皿	—	—	(1.8)	10	黒色粒子	普通	灰白色	釉薬は淡黄色
66	29	表採	陶器	志野碗	—	—	(2.8)	10	黒・礫	普通	灰白色	
66	30	G4	瓦質土器	壺	—	—	(2.9)	10	白	普通	灰褐色	
66	31	表採	瓦質土器	焙烙	[38.0]	[36.0]	3.4	10	角・白	普通	浅黄橙色	
66	32	E5	瓦質土器	焙烙	[40.0]	[38.0]	2.9	10	雲母・白	普通	浅黄橙色	
図版	番号	出土遺構	種別	器種	長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	胎土	焼成	色調	備考
66	33	E5	土玉		2.2	2.6	0.6	11.6	砂粒	普通	にぶい褐色	
図版	番号	出土遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
66	35	試掘	敲石	砂岩	(8.8)	(7.6)	4.0	305.0				
66	36	D3 攪乱	砥石	砂岩	5.0	2.2	2.0	35.3				
図版	番号	出土遺構	種別	器種	径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考			
66	37	D9 攪乱	寛永通宝		24.0	5.6	0.9	2.7				
66	38	C4	半銭銅貨		22.2	—	1.0	3.3	明治16年			
66	39	D3	小型五銭白銅貨		19.1	3.5	0.9	2.1				



### 3 第12・17地点の遺構と遺物

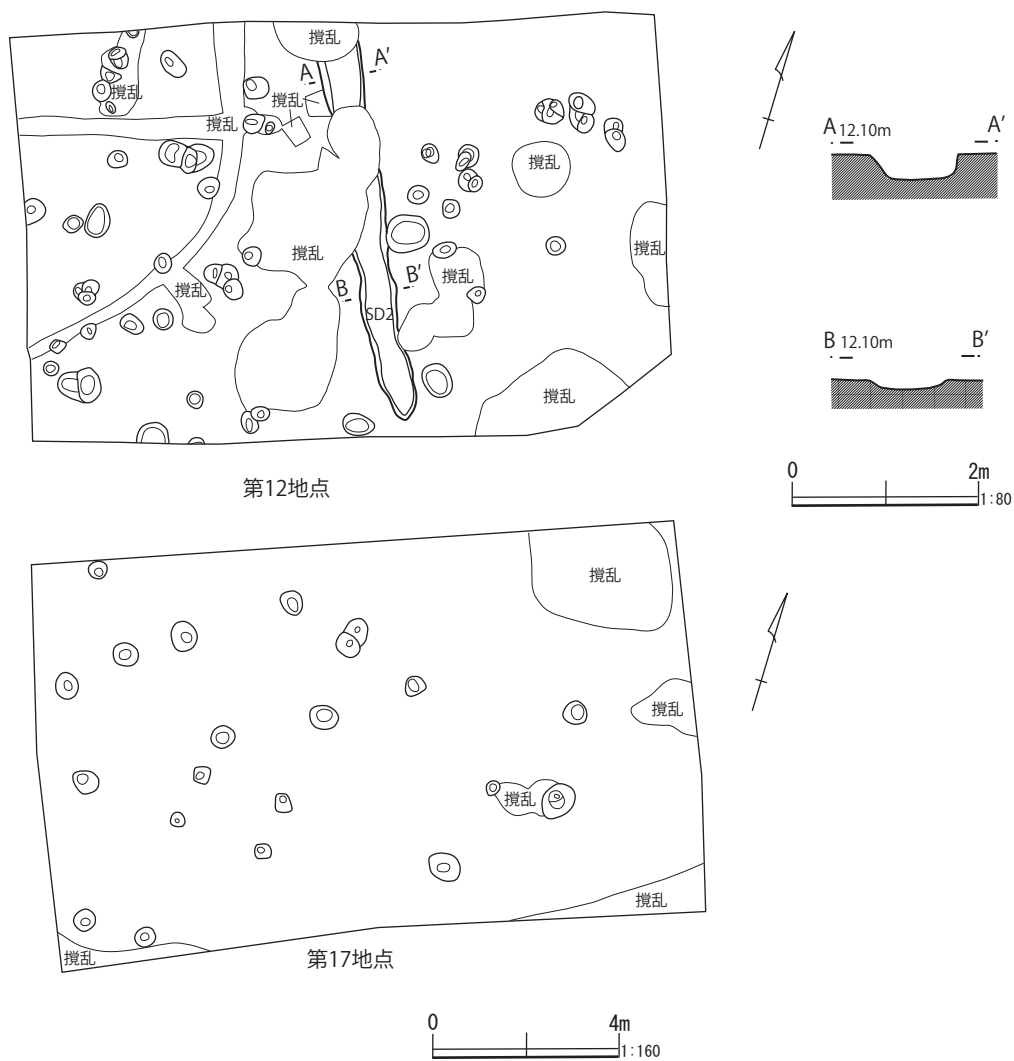
#### (1) 溝跡

##### ●第2号溝跡 (第67図)

第12地点を南北方向に延伸する。幅は約0.8m、確認面からの深さは約0.2mを測る。掘り込みは浅く、調査区の南端に達する手前で途切れる。出土遺物は認められなかった。

#### (2) ピット (第68図)

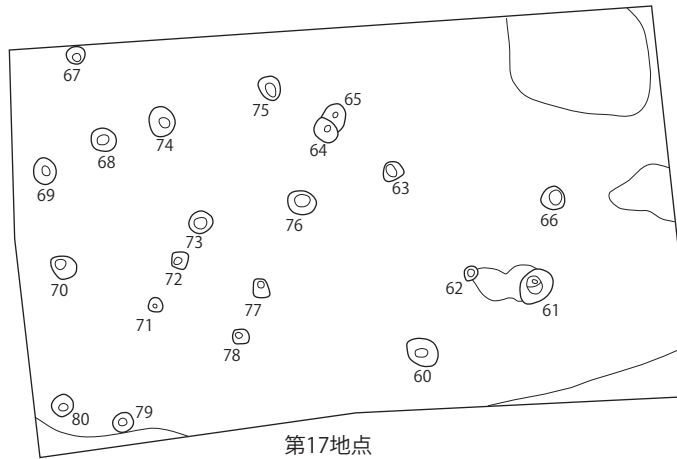
検出されたピットは80基を数えるが、遺物の出土は僅かな小破片のみで帰属時期は判然としない。ピットの計測値は第24表に示した通りである。



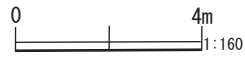
第67図 第12・17地点全測図及び遺構図



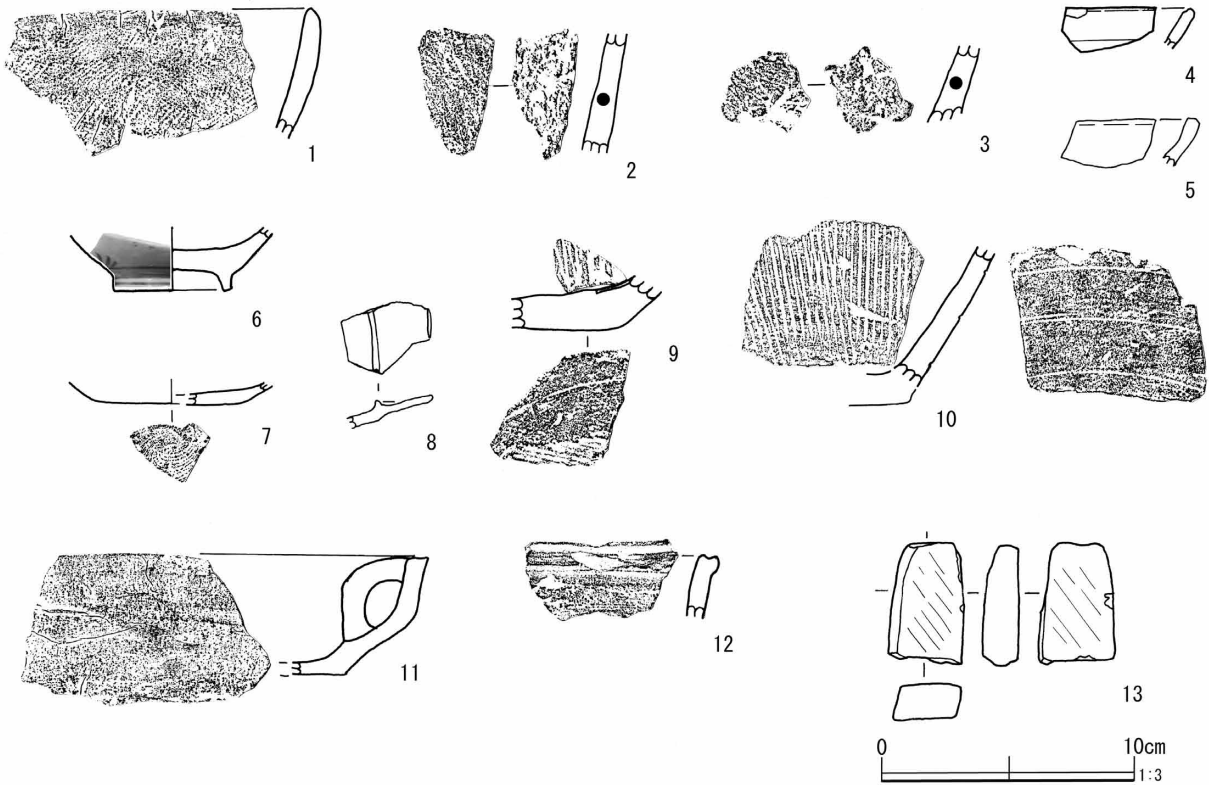
第12地点



第17地点



第68図 第12・17地点ピット配置図



第69図 第12・17地点出土遺物

第23表 第12・17地点ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
1	96	80	25	28	(14)	28	26	55	32	30	27
2	40	16	17	29	64	40	42	56	(44)	68	24
3	52	50	53	30	38	24	52	57	36	(14)	17
4	38	34	20	31	(24)	36	40	58	38	34	12
5	40	40	14	32	46	26	42	59	52	34	27
6	78	56	27	33	44	40	72	60	74	59	33
7	68	46	17	34	30	16	27	61	82	63	101
8	50	38	53	35	(40)	56	19	62	35	28	34
9	38	(22)	29	36	56	34	79	63	47	43	68
10	(54)	(38)	30	37	(52)	54	33	64	54	44	31
11	60	38	39	38	48	40	57	65	(41)	47	38
12	(44)	30	23	39	72	52	23	66	51	48	34
13	44	22	51	40	42	34	22	67	40	(32)	42
14	(46)	(16)	29	41	(40)	46	63	68	55	50	27
15	54	(30)	37	42	52	(24)	39	69	57	50	48
16	44	(24)	34	43	42	42	37	70	58	50	53
17	40	30	38	44	42	(34)	28	71	31	30	28
18	36	28	44	45	44	36	75	72	36	34	28
19	44	(18)	12	46	46	42	53	73	50	46	67
20	46	26	28	47	52	36	32	74	65	54	55
21	48	38	35	48	(26)	36	21	75	53	42	61
22	44	36	49	49	36	28	31	76	58	51	31
23	44	40	83	50	(20)	40	14	77	41	32	26
24	50	44	66	51	36	32	33	78	34	31	55
25	50	40	55	52	38	30	48	79	44	40	20
26	28	14	21	53	78	48	84	80	45	43	24
27	54	46	35	54	(44)	60	70				

※単位は全てcm

第24表 第12・17地点出土遺物観察表

図版	番号	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	備考
69	4	攪乱	陶器	皿	—	—	(1.5)	10	白・黒	良好	淡黄色	第12地点
69	5	調査区	かわらけ	坏	—	—	(1.8)	10	角・白・黒	普通	橙色	第17地点
69	6	攪乱	磁器	碗	—	4.6	(2.2)	20	黒	良好	灰白色	第12地点
69	7	調査区	かわらけ	坏	—	—	(0.5)	10	角・白・黒	普通	橙色	第17地点
69	8	調査区	陶器	灯明皿	—	—	(0.4)	10	白・黒	良好	褐色	第17地点
69	9	調査区	陶器	搦鉢	—	—	(1.6)	10	白・黒	普通	橙色	第12地点
69	10	攪乱	陶器	搦鉢	—	—	(5.0)	10	白・黒	良好	褐色	第12地点
69	11	調査区	瓦質土器	焙烙	—	—	5.1	10	雲母・白・礫	普通	褐色	第17地点
69	12	調査区	瓦質土器	焙烙	—	—	(2.4)	10	白	普通	褐色	第12地点
図版	番号	遺構	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
69	13	攪乱	砥石	砂岩	4.8	2.8	1.5	35.5	第12地点			

(3) 調査区出土遺物 (第69図)

**土器** 1は平縁の口縁部片である。斜位の単節縄文が施される。2・3は胎土に繊維を含む胴部片である。外面に斜位の条痕文が施される。4は瀬戸美濃産の小皿で17～18世紀の所産と考えられる。5はかわらけの口縁部片である。6は磁器碗の底部片である。7はかわらけの底部片で糸切の痕跡が認められる。8は灯明皿の口縁部片である。9は搦鉢の底部片、10は搦鉢の胴部片で内外面に鉄釉が施される。11は焙烙で、内耳が付き底部は平底である。12は焙烙の口縁部片である。

**石器** 13は砥石で全面に使用痕が認められ、よく使い込まれている。

## IV 自然科学分析

### 1 中妻遺跡（第10地点）出土炭化材の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

中妻遺跡（埼玉県白岡市篠津地内）は、大宮台地東部の白岡支台（松丸国照，1975など）と称される台地上に立地する。本遺跡では、これまでに数次に渡る発掘調査が実施され、縄文時代早期、古墳時代、奈良・平安時代、中世などの各時代にわたる集落跡が確認されている。今回の第10地点の発掘調査では、奈良・平安時代の集落の存在が明らかにされ、とくに精錬作業を行ったとみられる遺構の検出が特筆される。

本報告では、第10地点の発掘調査により検出された住居跡および上述した精錬作業を行ったとみられる遺構（鍛冶工房跡）の年代観の検討を目的として、各遺構より出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定を実施した。

#### 1. 試料

放射性炭素年代測定の対象とされた試料は、奈良・平安時代頃と推定される第14号住居跡および出土遺物から8世紀代と推定される第1号鍛冶工房跡よりそれぞれ採取された炭化材2試料（試料1,2）である。以下に、各試料の概要を記す。

##### (1) 第14号住居跡

第14号住居跡は、平面が一辺約3.5mを測る方形を呈し、北側にカマドを有する。帰属時期は奈良・平安時代頃と推定されている。試料（試料1；中妻10 14H 炭化物）は住居跡の床面直上付近より採取された炭化材であり、試料の観察では径約2cm未満の芯持丸木状を呈するものやミカン割あるいは板状に割れた細片が確認された。測定には、径約1.6cmの芯持丸木を選択し、樹皮直下付近の最外年輪を含む数年輪を供している。

##### (2) 第1号鍛冶工房跡

第1号鍛冶工房跡は、平面が一辺約5mを測る方形を呈し、北側にカマドを有する。帰属時期は、出土した土師器や須恵器等から8世紀代と推定されている。試料（試料2；中妻10 鍛冶工房跡1 床直A）は、遺構北東部の床面直上付近より採取された炭化材であり、試料の観察では分割材状（ミカン割状を含む）を呈する1～3cm角程度の破片が多数確認された。測定には、半径約3cm（8～9年生）以上と見積もられるミカン割状を呈する破片を選択し、樹皮直下付近の最外年輪を含む数年輪を供している。

なお、上記の測定試料とした炭化材2点については、試料の履歴（樹種）に関わる情報を得るため、炭化材の樹種の確認も行っている。各試料の樹種は、結果とともに第25表に記したので参照されたい。

#### 2. 分析方法

測定試料に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超

音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 7.0.1（Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.0.1 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正結果は  $\sigma \cdot 2\sigma$ （ $\sigma$  は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲）の値を示す。また、表中の相対比は、 $\sigma \cdot 2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。なお、較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

### 3. 結果

各遺構より出土した炭化材の同位体効果による補正を行った測定年代（補正年代）は、14H 炭化物（試料 1）が  $1,360 \pm 20\text{yrBP}$ 、鍛冶工房跡 1 床直 A（試料 2）が  $1,370 \pm 20\text{yrBP}$  である。これらの補正年代に基づく暦年較正結果（ $1\sigma$ ）は、14H 炭化物（試料 1）が calAD 652-calAD 670、鍛冶工房跡 1 床直 A（試料 2）が calAD 647-calAD 664 である（第 25 表、第 70 図）。

### 4. 考察

上記した第 14 号住居跡および第 1 号鍛冶工房跡のそれぞれ床面直上付近より出土した炭化材の暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、いずれも 7 世紀中頃から後半までの範囲を示した。調査所見によれば第 8 号住居跡が奈良・平安時代、第 1 号鍛冶工房跡が 8 世紀代という年代観が推定されているが、今回の炭化材試料より得られた暦年較正年代はそれよりもやや古く奈良時代頃に相当する。また、2 試料の暦年代範囲は概ね一致する状況にあることから、同時期あるいは比較的近い年代の遺構であった可能性も考えられる。

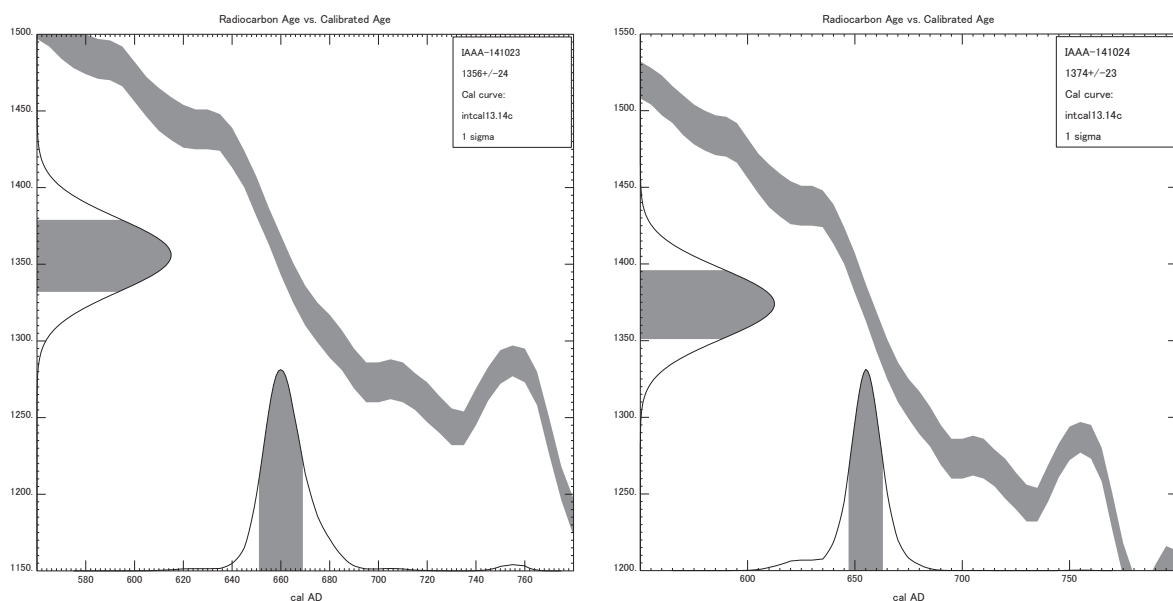
なお、測定に供した炭化材の樹種は、14H 炭化物（試料1）がコナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）、鍛冶工房跡1 床直 A（試料2）がコナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）に同定された。クヌギ節やコナラ節は、いわゆる二次林を構成する落葉高木であり、クヌギ節はより湿った土地を好むとされる。埼玉県内の古代の竪穴住戸跡から出土した炭化材では、クヌギ節やコナラ節の利用が多い傾向がある。一方、製鉄関連では、中堀遺跡（上里町）の鍛冶炉出土炭化材にクリを主体として、クヌギ節、クマシデ属、サクラ属、モモ、ケヤキ等が混じる組成が確認されている。

引用文献

松丸国照, 1975, 前橋図葉地形説明書. 利根・県南開発地域 土地分類基本調査 鴻巣 5万分の1 国土調査, 埼玉県, 13-20.

第25表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果			相対比	測定機関 CodeNo.
				$\sigma$	cal AD	cal BP		
試料1: 中妻10 14H 炭化物 炭化材(クヌギ節)	1,360 ± 20	-26.33 ± 0.57	1,356 ± 24	$\sigma$	cal AD 652 - cal AD 670	cal BP 1,298 - 1,280	1.000	IAAA-141023
				2 $\sigma$	cal AD 639 - cal AD 689	cal BP 1,311 - 1,261	0.999	
					cal AD 755 - cal AD 756	cal BP 1,195 - 1,194	0.001	
試料2: 中妻10 鍛冶工房跡1 床直 A 炭化材(コナラ節)	1,370 ± 20	-26.25 ± 0.50	1,374 ± 23	$\sigma$	cal AD 647 - cal AD 664	cal BP 1,303 - 1,286	1.000	IAAA-141024
				2 $\sigma$	cal AD 625 - cal AD 676	cal BP 1,325 - 1,274	1.000	



第70図 暦年較正結果 (1  $\sigma$ )

## 2 中妻遺跡（第10地点）出土鉄滓分析

日鉄住金テクノロジー株式会社

### 1. いきさつ

中妻遺跡（埼玉県白岡市篠津地内）は、大宮台地東部の白岡支台と称される台地上に立地する。第10地点では奈良・平安時代の集落の存在が明らかにされた。特に鍛冶工房跡からは、鉄製品・土器とともに夥しい数の鉄滓や羽口が検出された。本報告は、8世紀代と推定される鍛冶工房跡から出土した鉄滓2点について、金属学的調査を行ったものである。

### 2. 測定試料

- ① 試料 No.1；椀形鍛冶滓
- ② 試料 No.2；流動滓  
の2点である。

### 3. 測定項目と方法

#### (1) 外観観察

試料は肉眼およびデジタルカメラ・実体顕微鏡により表面の特徴を観察・記録する。使用装置は以下の通りである。

デジタルカメラ G10型（キャノン製）

実体顕微鏡 VHX-500型（キーエンス製）

#### (2) 断面マクロ・ミクロ組織観察

外観観察後、代表的な箇所をダイヤモンドカッターにて約20×20mmに切取った。洗浄・乾燥後、真空下でエポキシ系樹脂にて埋め込み組織を固定した。固化後、鏡面まで研磨して光学顕微鏡にて断面組織を観察記録した。装置は以下の通りである。

光学顕微鏡 BX51M型（オリンパス製）

#### (3) 鉱物相の成分分析（EPMA）

上記、埋め込み試料を用いて鉱物相の成分構成を、X線マイクロアナライザー（EPMA）にて分析した。検出元素濃度は、X線強度（CPS）からZAZ法により計算にて求めた。装置および測定条件は以下の通りである。

X線マイクロアナライザー（EPMA） JXA8100型（日本電子製）

加速電圧；15KV

照射電流；10.5 $\mu$ A

### 4. 調査結果と考察

#### (1) 調査試料の大きさ

第26表に、調査試料の大きさを示した。

第26表 出土鉄滓の大きさ

試料名	大きさ(mm)	重量(gr)	特徴
No.1	150×160×80	667	直径150～160mmの椀形滓
No.2	120×80×40	434	小砂利・耐火材が付着した流動滓

(2) 試料 No.1 (椀形鍛冶滓) の断面組織および鉱物相の成分

第71図に試料 No.1 (椀形鍛冶滓) の外観、断面マクロ・ミクロ組織を示した。また、第73・74図には各鉱物相のX線スペクトルを、第27表には各鉱物相の構成元素濃度を示した。大きさは150×160×80mm、重さ667grを測る。表面は茶褐色で凹凸の激しい表面形状で中央部が椀形状の凹みを呈する鉄滓である。断面組織をみると、大小の丸みを帯びた空孔を有するが存在量少なく、比較的緻密な組織を呈する。構成鉱物は、1.35%のチタン分を含むウスタイト (白色; 理論化学組成 FeO)、18%のアルミニウム分と13%のチタン分および若干のクロムやバナジンを含むスピネル鉱物 (明灰色)、4%のマグネシウム分を含む長柱状結晶のファヤライト (灰色; 理論化学組成 2FeO・SiO<sub>2</sub>) および暗灰色のガラス質珪酸塩からなる。

ウスタイトおよびスピネル鉱物に含まれるチタン分の濃度から、この鉄滓の始発原料は砂鉄でクロムやバナジンを含むことを特徴とするものである。また、スピネル鉱物中には多くのアルミニウム分が含まれていることから、生成過程で炉材と激しく反応したことが窺える (高温・低酸素雰囲気)<sup>1)</sup>。また、同鉄滓は椀形状の大きさから、炉容は直径約150～160mmを測る精錬炉であったことが窺える。

第27表 各鉱物層の検出元素濃度 (重量%)

分析箇所	FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	TiO <sub>2</sub>	MgO
1 (ウスタイト)	96.0	0.93	0.88	...	1.35	0.81
2 (スピネル鉱物)	59.9	...	18.5	...	13.1	2.17
3 (ファヤライト)	57.4	34.4	1.17	2.20	0.56	4.07
4 (ガラス質)	26.9	36.8	16.9	11.7	1.67	0.39
	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	
1 (ウスタイト)	...	...	...	...	...	
2 (スピネル鉱物)	...	...	...	0.55	5.73	
3 (ファヤライト)	...	0.29	...	...	...	
4 (ガラス質)	1.18	3.80	1.21	...	...	

\*注: 1~4は、第73・74図中に記した分析箇所を示す

(3) 試料 No.2 (流動滓) の組織

第72図に試料 No.2 (流動滓) の外観と断面マクロ・ミクロ組織を示した。大きさは、120×80×40mm、重さ434grを測る。表面は小砂利や耐火物の小片が付着し、凹凸の著しい鉄滓である。付着物を除いた表面は、暗灰色で油脂感のある鉄滓である。この鉄滓は反応過程で溶け出した成分が炉外へ流出する際、周囲の土砂成分を巻き込んで固化したものと推測される。構成鉱物は、白色で丸みを帯びた結晶のウスタイト (理論化学組成 FeO)、僅かの明灰色のスピネル鉱物、短冊状のファヤライト (理論化学組成 2FeO・SiO<sub>2</sub>) およびガラス質珪酸塩からなる。構成鉱物は、前記の試料 No.1と同様であるが圧倒的に鉄分の高い鉄滓であり、スピネル鉱物は少ない。恐らく、精錬操作の反応過程の初期に生成した熔融物が炉外に流れ出て固化したものと考えられる。

各鉱物相の成分分析は実施していないが、前記の試料 No.1の鉱物組成とほぼ同様のものと考えられる。



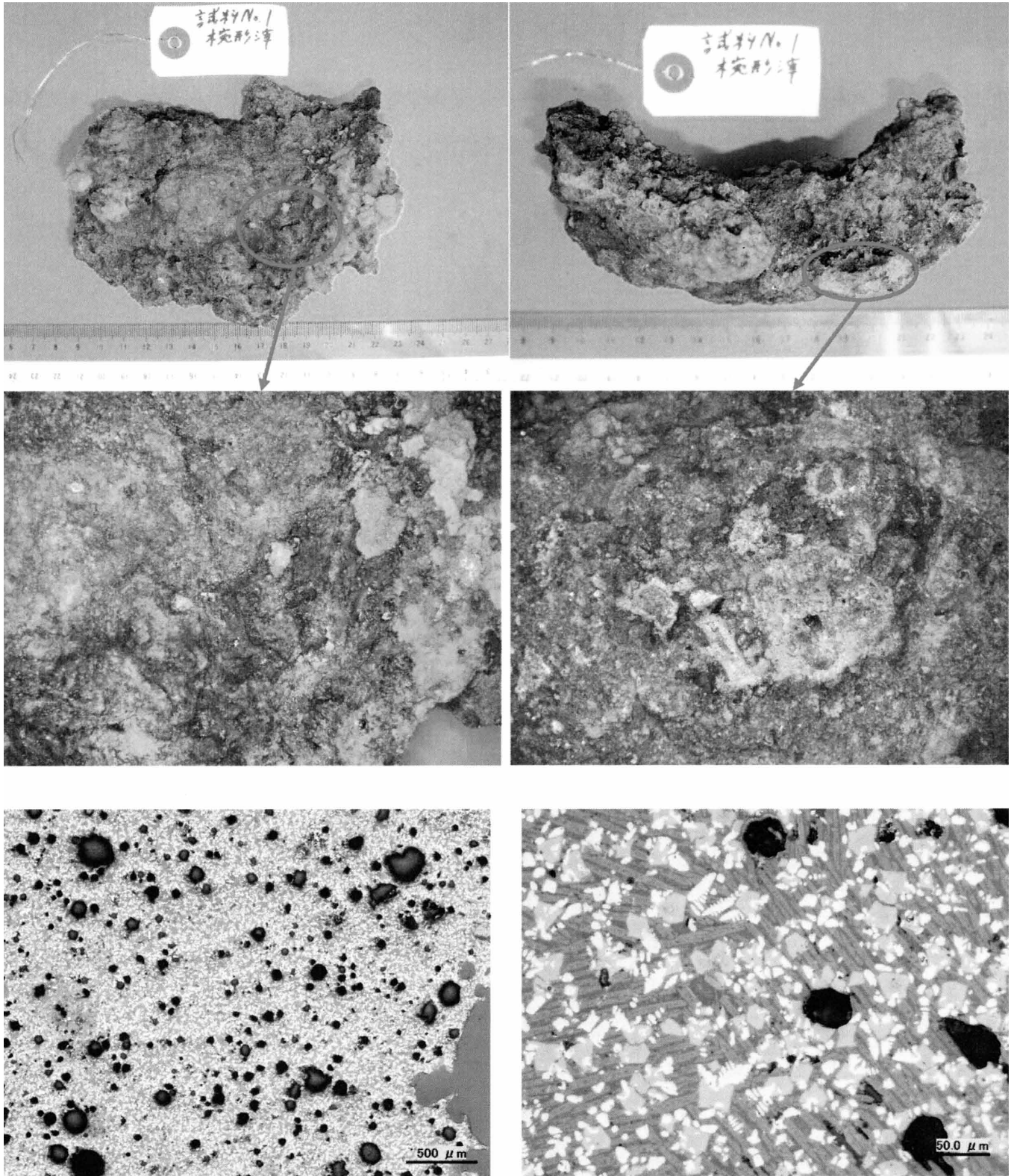
## 5. まとめ

中妻遺跡第10地点鍛冶工房跡から出土した鉄滓2点（椀形鍛冶滓・流動滓）の金属学的調査を行った結果は以下の通りである。

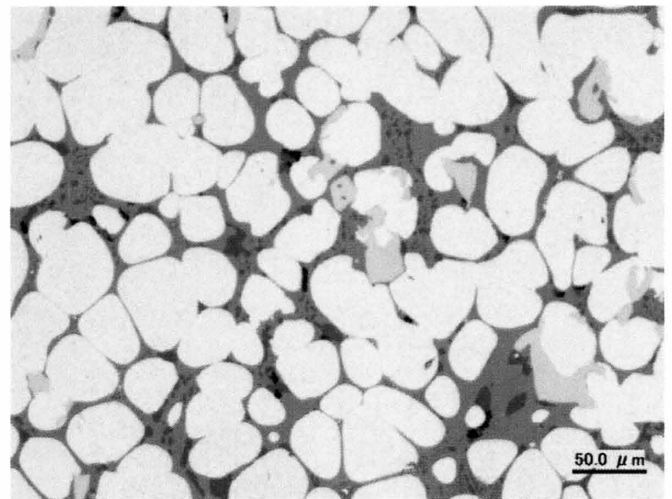
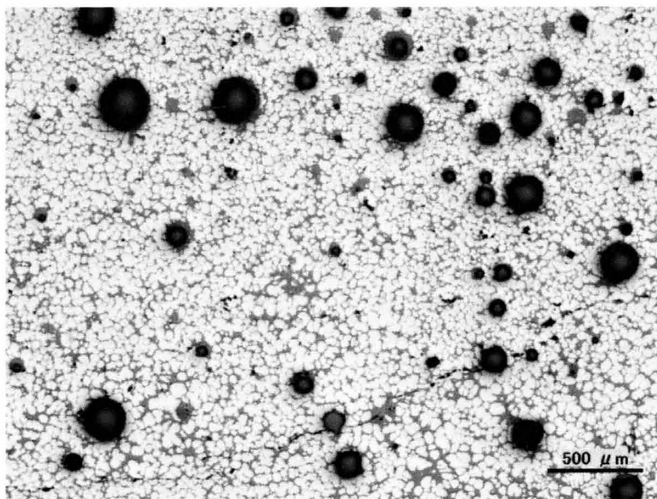
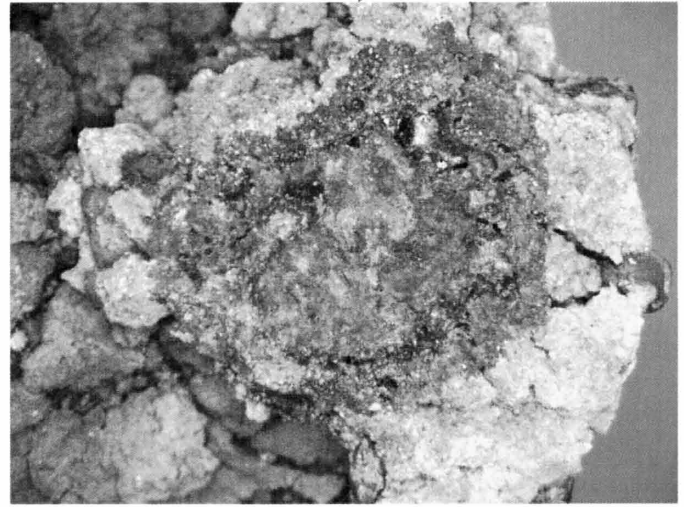
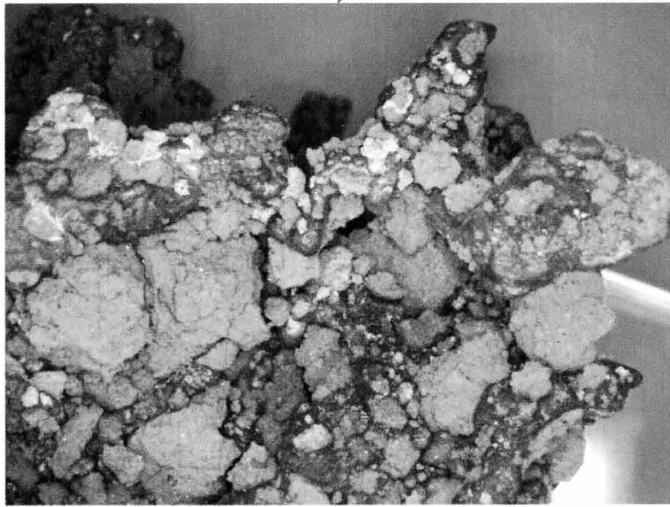
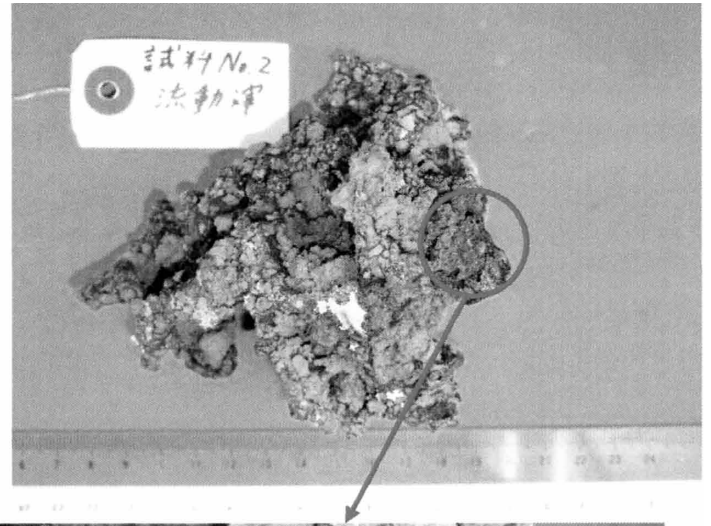
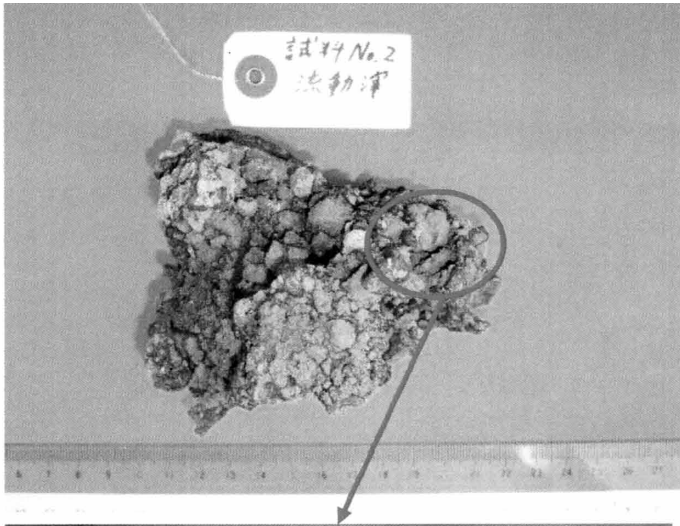
- (1) 2試料の鉄滓は精錬過程において、No.1は炉内反応生成物、No.2は初期に炉外に流出した鉄滓と考えられた。
- (2) 2試料の鉄滓は、チタン(Ti)のほか、クロム(Cr)やバナジウム(V)を含んだもので、始発原料は砂鉄と考えられる。クロムやバナジウムを含む鉄滓は、隣接した千葉北西部の遺構からも検出している<sup>2)</sup>。
- (3) 本遺跡の近傍（3～4km）には、砂鉄を原料とした製鉄遺構として知られる大山遺跡が存在することから、本遺構の鉄素材は同遺構から調達したことが推測される<sup>3)</sup>。

### 引用文献

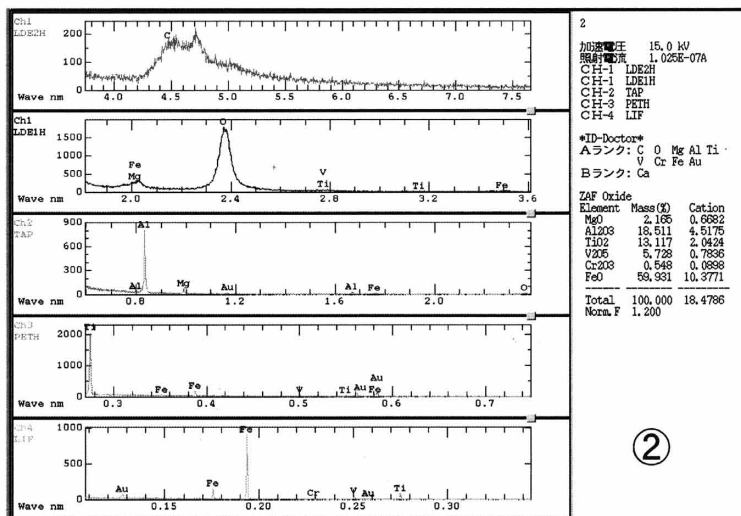
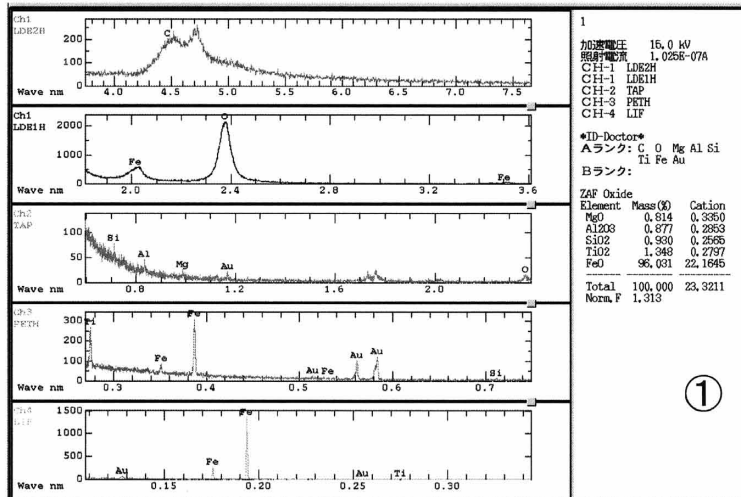
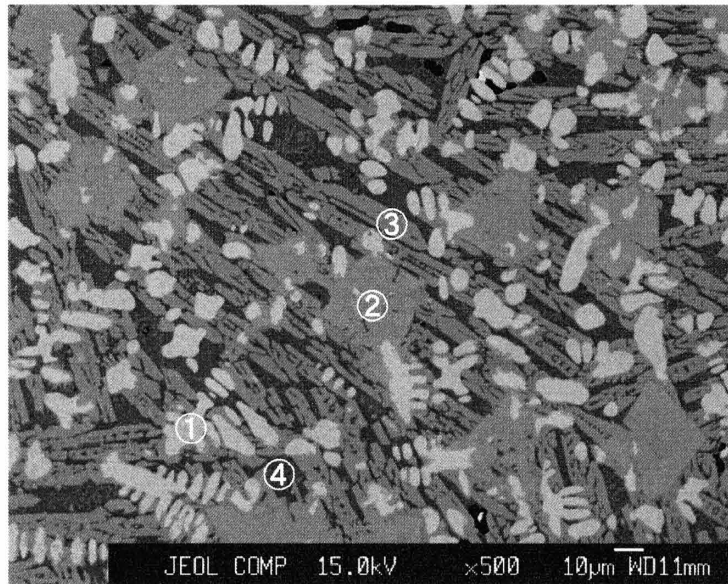
- 1) A. ムアン、E.F. オスボン「酸化物の相平衡」技報堂
- 2) (財)千葉県文化財センター「千葉県文化財センター研究紀要7」S57.3
- 3) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団「大山遺跡；12, 13, 14次」2011



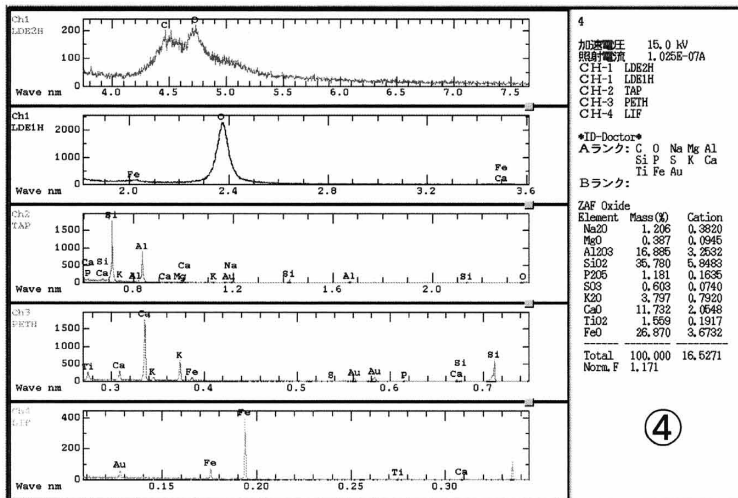
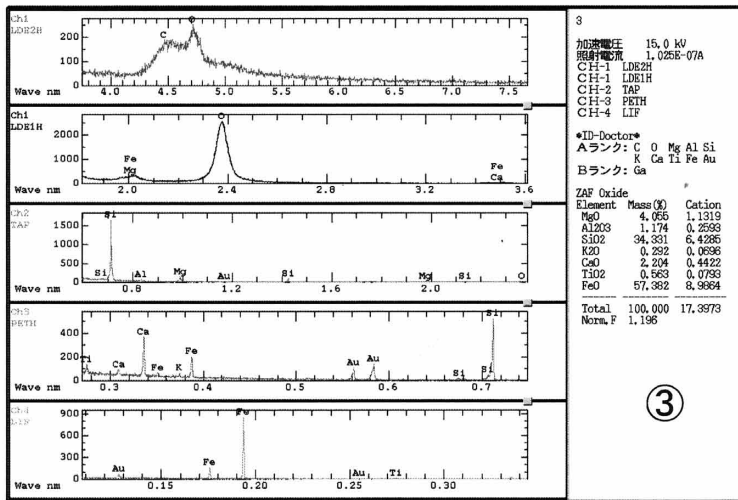
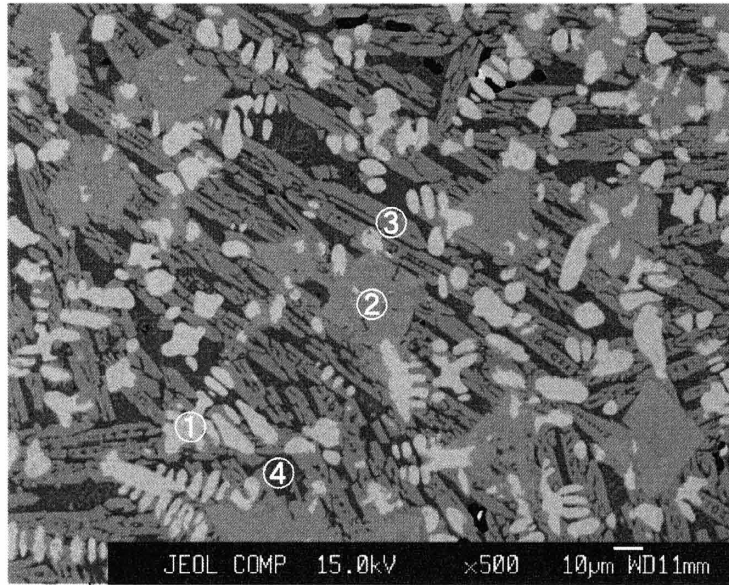
第71図 試料 No.1 (椀形鍛冶滓) の概観と断面組織



第72図 試料 No.2 (流動性) の概観と断面組織



第73図 試料 No.1 (椀形鍛冶滓) の EPMA 分析結果 (1)



第74図 試料 No.1 (椀形鍛冶滓) の EPMA 分析結果 (2)

## V 考 察

### 1 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓について

第10地点の第1号鍛冶工房跡では、総重量55,837 gの鉄滓が出土した。本稿では鉄滓の出土位置と重量、磁着の有無についてまとめる。

第1号鍛冶工房跡は、試掘調査段階から羽口や鉄滓の出土が認められ、鍛冶関連遺構であるという認識があった。工房跡の発掘調査については、第40図のセクションAライン南側とBライン東側に幅30cm程のサブトレンチを設けて、床面までの土層を確認しながら掘り下げを行った。サブトレンチ内からも多くの鉄滓が出土したが、特に床面直上にあたる褐色土の5層付近で鉄滓の密な広がりが見られた。

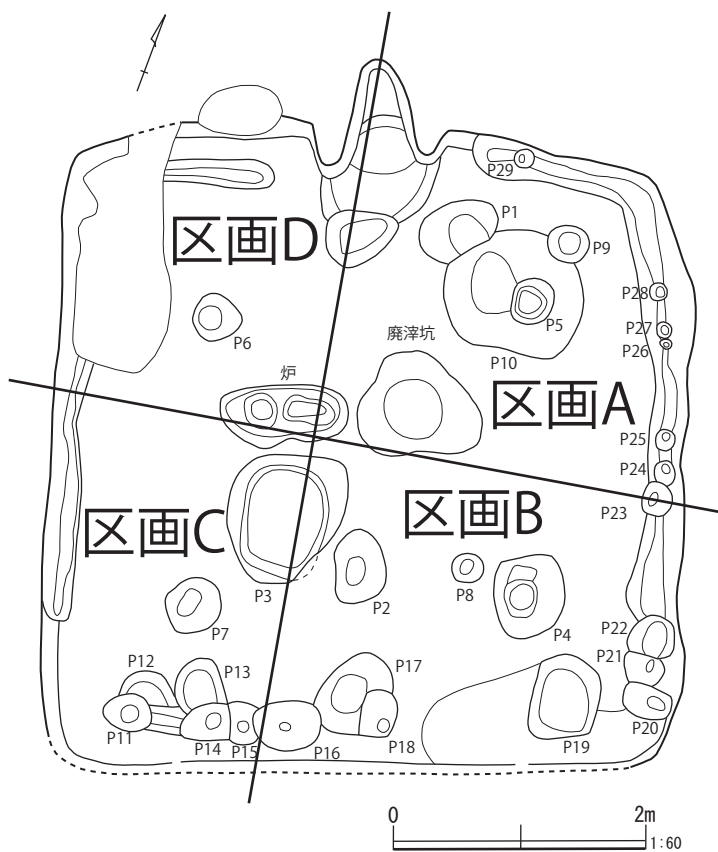
サブトレンチでの成果を受け、セクションAラインとBラインを用いて工房をA・B・C・Dの4区画に分割し、出土鍛冶滓がどの区画に帰属するのか記録しながら取り上げを行った。第75図に示したように工房の北東部が区画A、南東部が区画B、南西部が区画C、北西部が区画Dに該当する。また、5層以下の覆土については、土層を区画ごとに採取し、フルイにかけ鍛冶関連遺物の抽出に努めた。工房内のピットや廃滓坑、カマドなども、出土位置ごとに同様の作業を行った。発掘調査現場で採取した土層は土嚢袋にして319袋分にのぼった。

結果、第28表のように鍛造剥片や粒状滓、炉壁の破片といった微細遺物を抽出することができた。鍛造剥片、粒状滓ともに区画Cでの出土が目立つ。また、廃滓坑でも多く出土しており、炉での操業後、他の鍛冶滓等とともに掻き出して廃棄したものと考えられる。鍛造剥片や湯玉状の粒状滓の存在は、鉄板などのインゴットあるいは鉄製品の鍛打が行われていたことを示している。一方、IV章の2で分析した鉄滓が精錬鍛冶滓であったことから、工房内で鉄精錬作業が行われていた可能性が高い。すなわち、同じ工房内で精錬鍛冶と鍛錬鍛冶が行われていたものと考えられる。

第29表は鉄滓の出土位置ごとの磁着度を示したものである。碎片となった鉄滓については一括して磁着の有無のみ判別した。出土量は区画Cが9,155 g、P3が6,115 gと抜き出ている。磁着度についても、両出土位置で高い数値を示している。

上記の検討から、鍛冶炉の南側に位置する区画CやP3で磁性の強い鉄滓や鍛冶関連遺物が数多く出土していることが判明した。このことは、工房の操業形態を考えるうえで示唆に富んだものと思われる。既述のとおり、炉と廃滓坑の位置関係から、不純物である滓は炉の東側へ掻き出された可能性が高い点を指摘した(III章の2)。では、鍛冶工人は鍛冶炉に対してどの位置で作業を行っていたのであろうか。本稿においては、鍛冶炉の南側に位置するP3内が、工人が位置していた作業スペースであったと仮定しておきたい。炉は還元面をもち高温に晒されていた点を指摘した。高温を伴う精錬鍛冶は鍛冶炉を火床として作業が進められたものとする。一方、鉄素材や製品を用いた鍛錬鍛冶は比較的低温でも作業が可能であり、作業箇所にも痕跡が残りにくい。P3内が工人の作業スペースであった場合、P3を基点として鍛冶炉から少し距離を置いた工房南寄りでも作業が可能であったものと考えられる。P3は鍛冶炉に近接しながら廃滓坑のように焼土の広がりや炭化粒子はあまり認められなかった。P3の床面から底面までの深さは約50cmであり、廃滓坑よりも深く掘り窪められている。工人が座って作業ができる高さと考えられないだろうか。また、仮に工人が右利きであった場合、P3に位置していれば廃滓坑に対して利き腕で滓

を掻き出す作業を行うことができる。以上あげた点は、いずれも状況証拠に過ぎないが、工房内の遺構配置と鉄滓の出土位置の関係から、ここでは鍛冶工人の作業スペースを P3 内と仮定しておきたい。



第75図 第1号鍛冶工房跡鉄滓出土位置区割り図

第28表 第1号鍛冶工房跡出土鍛冶関連遺物重量表

出土位置	鍛造剥片	粒状滓	炉壁
区画 A	0.4	0.8	
区画 B	1.8	1.1	
区画 C	7.7	10.7	
区画 D	2.9	5.0	
P3	1.9	2.0	22.0
P10	0.7	1.2	
廃滓坑	5.4	8.0	
その他工房跡内	0.0	0.1	333.4
合計	20.8	28.9	355.4

※単位は全て g

第29表 第1号鍛冶工房跡出土鉄滓重量表

出土位置	磁着度					磁着の有無		合計
	1	2	3	4	5	磁着	非磁着	
区画 A	560.0	830.0	240.0	80.0		1,205.7	560.0	1,765.7
区画 B	810.0	780.0	160.0			1,165.0	545.0	3,460.0
区画 C	825.0	280.0	210.0	165.0		6,700.0	975.0	9,155.0
区画 D	470.0	310.0	35.0			2,260.0	325.0	3,400.0
P1	110.0					108.3	26.2	244.5
P2						21.7	1.6	23.3
P3	1,150.0	2,070.0	555.0			1,155.0	1,185.0	6,115.0
P4	240.0	260.0	290.0			17.1	0.0	807.1
P5	40.0					1.6	25.9	67.5
P6	30.0					6.8	0.0	36.8
P7						2.6	0.9	3.5
P8						19.6	2.4	22.0
P9	440.0	580.0	135.0			1,338.8	382.2	2,876.0
カマド		20.0				23.6	0.0	43.6
廃滓坑	535.0	330.0				740.0	130.0	1,735.0
その他工房跡内	13,280.0	6,250.0	1,870.0	210.0	35.0	1,245.0	1,482.0	24,372.0
合計	18,490.0	11,710.0	3,495.0	455.0	35.0	16,010.8	5,641.2	55,837.0

※単位は全て g

## 2 中妻遺跡の鉄生産について

中妻遺跡を含む大宮台地白岡支台の遺跡群では、今までの調査において古代の製鉄関連遺物や炭焼窯跡が検出されており、付近での鉄生産の可能性が考えられていた。タタラ山遺跡や入耕地遺跡、中妻遺跡では量の多寡はあれ、複数地点で鉄滓の出土が認められている。また、未報告の地点であるが、中妻遺跡とタタラ山遺跡では、それぞれ奈良・平安時代に帰属する住居跡内から大口径羽口片が出土しており、付近での製鉄炉の操業を想起させる。沖山西遺跡や山遺跡、南鬼窪氏館跡では炭焼窯跡が検出され、特に沖山西遺跡では3基の窯跡が重複を繰り返しながら構築されており、7～10世紀の間に炭焼窯が数次に渡って操業されていたことが分かっている。これらの状況証拠から、白岡支台において精錬鍛冶や鍛錬鍛冶が行われていた可能性は極めて高いと想定されていたところであったが、本報告の第1号鍛冶工房跡の発見によって、白岡市域において初めて具体的な古代鉄生産の根拠が提示されたと言えよう。

第1号鍛冶工房跡の調査成果が、それまでの断片的な製鉄関連遺構・遺物と一線を画するのは、鍛冶に用いた炉そのものの発見があげられる。また、前述のとおり中妻遺跡の他地点や他遺跡においても、鉄滓や羽口の出土が認められなかった訳ではないが、一遺構から総重量55,837gの鉄滓が出土したことは異例であるし、羽口がまとまった点数出土していることも、工房内で高温を用いた鍛冶が行われていたことを傍証している。また、鍛造剥片や粒状滓とともに、特徴的な形状を呈す小鉄片が認められることも、中妻遺跡の鍛冶のあり方の一側面を示していると言えよう。二又状鉄片（第52図5）や、棒状鉄片の中に見られる釣り針のような鈎状の裁断片（第52図6～21）は鍛錬鍛冶の副産物と考えられ、工房の床面に遺棄されるか、近傍で廃棄されることが多い（村上1998）。こうした鉄片や鉄滓の出土量と比較して、鉄製品自体の出土点数は決して多くない点から、工房内では鍛錬鍛冶に加えて、廃鉄器の再加工が行われていた可能性も指摘しておきたい。



埼玉県屈指の古代製鉄遺跡として著名な伊奈町の大山遺跡では、8世紀代に操業された豎形炉が確認されるとともに、同一遺跡内で鍛冶工房や炭焼窯も検出されている（赤熊編2012）。少なくとも、製炭・製錬・精錬・鍛冶といった製鉄の工程が同一地域内で行われていたことが考えられる。白岡市域における鉄生産が、どの程度の規模であったのか、まだまだ判然としない部分が多いが、第1号鍛冶工房跡の発見によって、精錬と鍛冶は実施されていたことが確認できた。製炭については前述のとおり近接する遺跡において炭焼窯跡が発見されている。製錬の痕跡を示す直接的な証拠は、市域ではまだ確認されていない。大山遺跡等の外部の製鉄炉で生産された鉄塊の供給を受け、二次的な精錬や加工のみを行う生産体制をとっていた可能性も考えられる。あるいは、市域内で製錬作業を行っていた可能性も考えられるが、製鉄炉の発見に至っていないため、現時点では推論の域を出ない。

蓮田市の荒川附遺跡（富田編2007など）や椿山遺跡（大塚編1989など）では8～9世紀の鍛冶工房跡（生産跡）による鉄器生産の痕跡が確認され、鉄滓のみならず羽口や炉壁が出土するなど、鉄生産の痕跡は元荒川流域のおいても顕著に認められている。こうしたことを考え合わせると、今後、斜面部の調査によって市域で製鉄炉が検出される可能性は十分考えられよう。

### 3 総括

中妻遺跡第10地点の調査成果は、縄文時代や奈良・平安時代を中心に多岐に渡る。最後に本調査の成果から判明したことを整理し、まとめとしたい。

遺構内外より出土した縄文土器は、縄文時代早期後半の胴部片が多数を占め、表裏ともに条痕のみが施される。口縁部片は少ないが、細隆起線と沈線の有無から、いわゆる野島式期の資料が認められるほか、早期前半の撚糸文系土器から前期中葉の黒浜式期の資料も散見される。住居跡や鍛冶工房跡内から出土した資料は直接的に遺構の帰属時期を示すものではなく、流れ込みによるものと考えられるが、付近に当該期の住居跡や屋外炉跡などの遺構が展開していたことを示唆させる資料である。既報告の第2地点では縄文時代早期の炉穴が2基検出されており、未報告であるが第3地点では関山式期の住居跡が1軒検出されている。今後も周辺の調査によって縄文時代の遺構が発見される可能性は極めて高いものと考えられる。

奈良・平安時代の遺構として、住居跡11軒と鍛冶工房跡1軒が検出された。出土した土師器や須恵器の年代観から、遺構の帰属時期は概ね8世紀第I四半期から第II四半期の中に収まりそうである。既報告の第2・4・8地点では、7世紀後半と8世紀第III四半期の住居跡が検出され、8世紀前半の遺構・遺物は認められなかった。7世紀から8世紀にかけて集落の断絶を伴うことも推定されていたが、第10地点の調査成果はまさにその間隙を埋めるものと言えよう。出土須恵器は南比企産のものに加えて、少量ながらも湖西窯産のものも混在しているようである。本報告では触れ得なかったが、須恵器を含む物資の流通については今後詳細な検討が必要とされよう。

第10地点の西寄りには、ちょうど台地から低地へ向かう斜面部にあたり、住居跡も上部を大きく削平されているものが多かった。床面の一部のみが僅かに遺存している事例や、壁溝の位置関係から住居のプランを推定した事例もあった。住居跡の平面形は長軸4～5mの方形のものが多いが、第14・15・17号住居跡は一辺3.5m前後の正方形に近い形状を呈す。また、第14・15号住居跡については柱穴が南側に偏り、4本柱の住居とは上屋構造が異なるようである。こうした比較的小型の住居は特有の柱配置によって上屋を

支えていた可能性も考えられよう。住居のカマドの多くは北壁に築かれていたが、天井部はもとより煙道部や袖部も削平を受けた状態で検出されたものが多く、カマドの構造が分かる良好な資料は少なかった。そんな中、第7・12・14号住居跡カマドの袖の構築材として硬砂層由来の砂岩が検出されたことは特筆すべきことと思われる。硬砂層はローム層下位に形成される古東京湾の海退後の堆積物である。大宮台地に広く分布すると考えられ、特に崖線での検出事例が多い。近隣の蓮田市の黒浜貝塚では硬砂層の露頭と採掘跡が確認されている。中妻遺跡においても崖線の露頭等から硬砂層を切り出して砂岩を採取し、住居にカマドを構築する際の袖材として利用していたものと考えられる。白岡支台において硬砂層の露頭は未検出であるが、中妻遺跡が支台西縁部に位置しているという地理的条件から鑑みて、砂岩の採取地も遺跡近辺であった可能性は高いと言えよう。

中世以降の遺構については、井戸跡や地下式坑、ピットなどがあげられる。第9・11地点で検出された第1号溝跡は既報告の第8地点での調査成果と合わせて、中世の館跡の周囲を巡る濠であった可能性がある。溝跡の走行方向が明らかになっていないため、区画の範囲は定かではないが、第9・10・11・12・17地点で検出された総計760基のピットも、何らかの形で濠や館跡に伴う遺構（柵列など）を形成していた可能性が想定されよう。

#### 引用・参考文献

- 赤熊浩一 2011 「国界地域の土器流通—下総国と武蔵国の様相—」『研究紀要』第25号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤熊浩一編 2012 『大山遺跡 第12次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第392集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 天成正義ほか編 2005 『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』社団法人日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学会
- 大塚孝司編 1989 『椿山遺跡—第3・4次調査—』蓮田市文化財調査報告書第13集 蓮田市教育委員会
- 大塚孝司・小島健一編 1988 『椿山遺跡—第5次調査—』蓮田市文化財調査報告書第12集 蓮田市教育委員会
- 岡田勇介編 2012 『中妻遺跡（第2・4・8地点）』白岡町埋蔵文化財調査報告書第21集 白岡町教育委員会
- 柏木善治・須藤智夫編 2007 『湘南新道関連遺跡』Ⅲ かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
- 笹森健一 2007 「古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居」『住まいの考古学』暮らしの考古学シリーズ③ 学生社
- 杉山和徳 2015 「大宮台地の硬砂層の利用について」『埼玉考古』第50号 埼玉考古学会
- 杉山和徳・奥野麦生編 2015 『沖山遺跡（第1地点）・沖山西遺跡（第1・2・3地点）・大町遺跡（第2地点）』白岡市埋蔵文化財調査報告書第24集 白岡市教育委員会
- 鈴木重信ほか編 2013 『権田原遺跡』Ⅳ 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告46 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 田中和之・小宮雪晴編 2005 『椿山遺跡—第6・7調査地点—』蓮田市文化財調査報告書第41集 蓮田市教育委員会
- 富田和夫編 2007 『荒川附遺跡』Ⅱ 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第338集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村上恭通 1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店



# 写真図版



掘削作業状況 (1)



掘削作業状況 (2)



実測作業状況



第1号溝跡完掘後の様子

図版2



第9地点調査区全景



第11地点調査区全景



第9・11地点出土遺物



第10地点調査区北半部全景

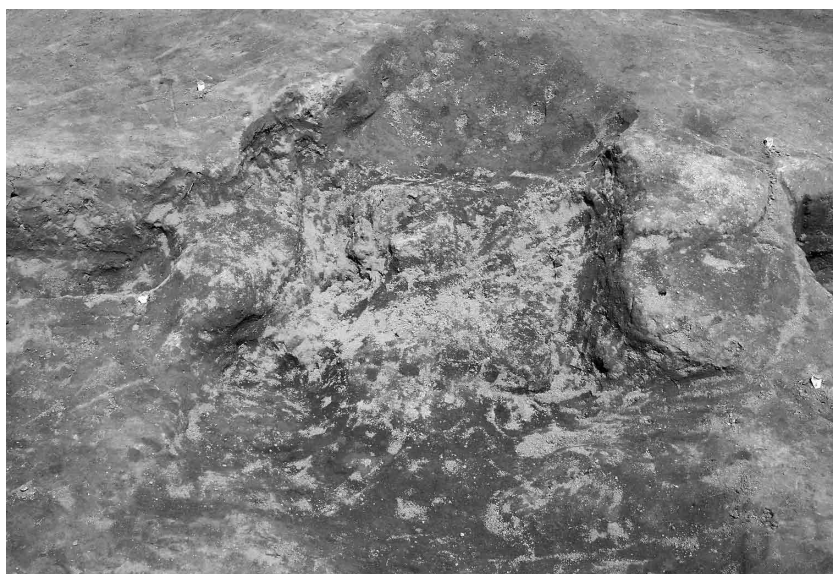


第10地点調査区南半部全景

図版4



第7号住居跡



第7号住居跡カマド



第8号住居跡



第9号住居跡



第10号住居跡



第11号住居跡



図版6



第11号住居跡遺物出土状況



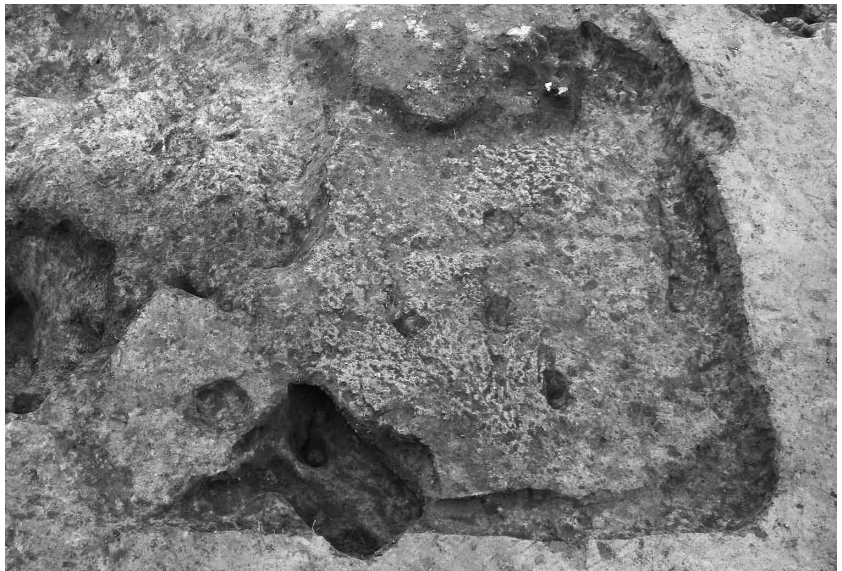
第12号住居跡



第12号住居跡カマド



第13号住居跡

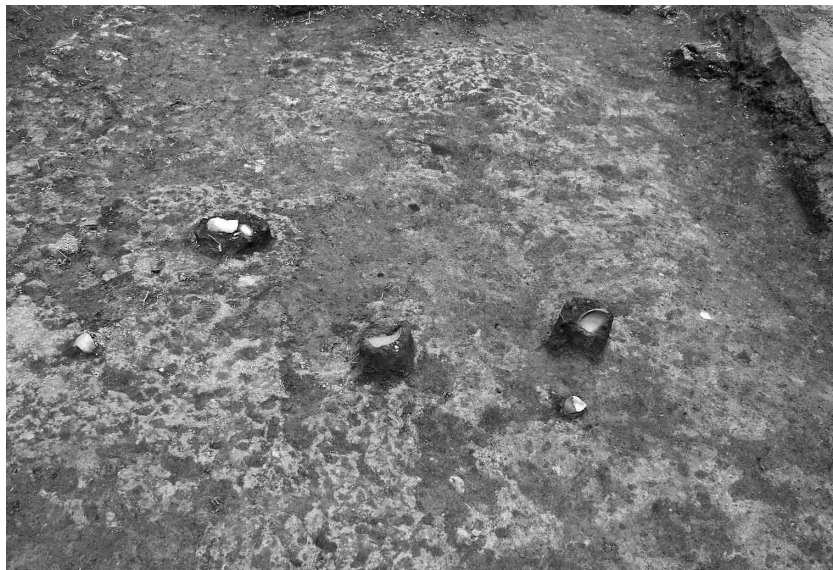


第14号住居跡



第14号住居跡カマド

図版8



第14号住居跡遺物出土状況



第15号住居跡



第15号住居跡カマド



第15号住居跡カマド断ち割り



第15号住居跡遺物出土状況 (1)



第15号住居跡遺物出土状況 (2)

図版 10



第16号住居跡



第16A号住居跡カマド



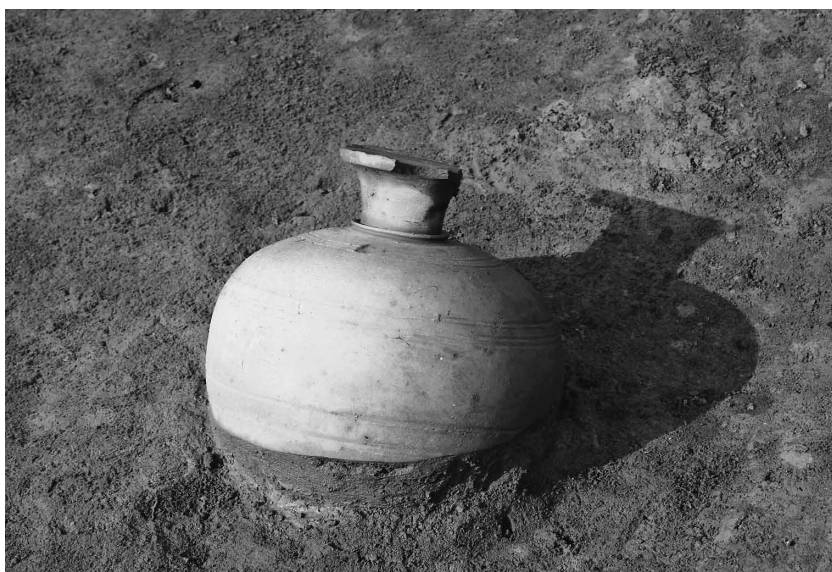
第16B号住居跡カマド



第 17 号住居跡



第 17 号住居跡カマド



第 17 号住居跡遺物出土状況

図版 12



第1号鍛冶工房跡



第1号鍛冶工房跡カマド



第1号鍛冶工房跡遺物出土状況 (1)



第1号鍛冶工房跡遺物出土状況 (2)



第1号鍛冶工房跡炉



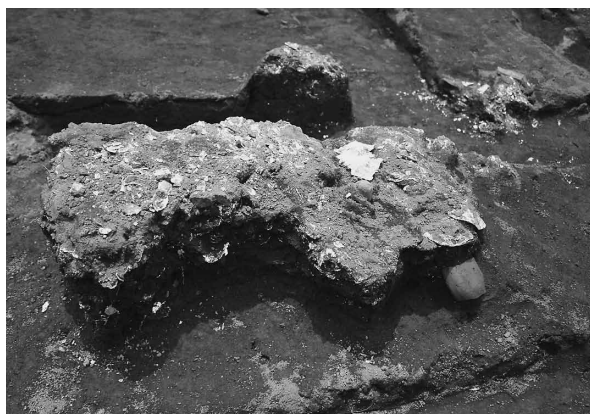
第1号鍛冶工房跡廃滓坑



第1号鍛冶工房跡ピット3



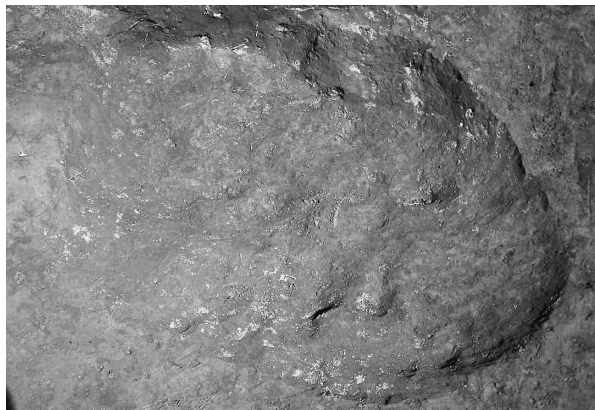
第1号鍛冶工房跡ピット3遺物出土状況



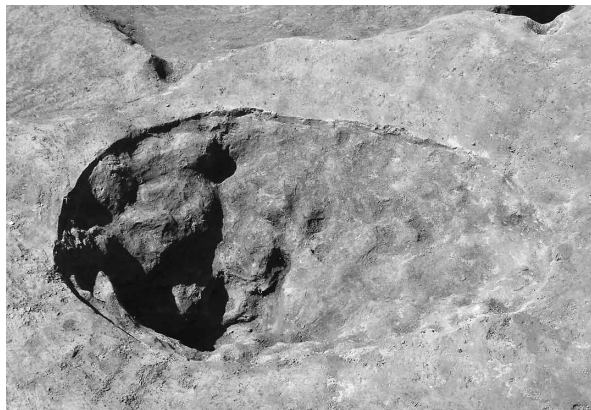
第1号鍛冶工房跡貝層検出状況



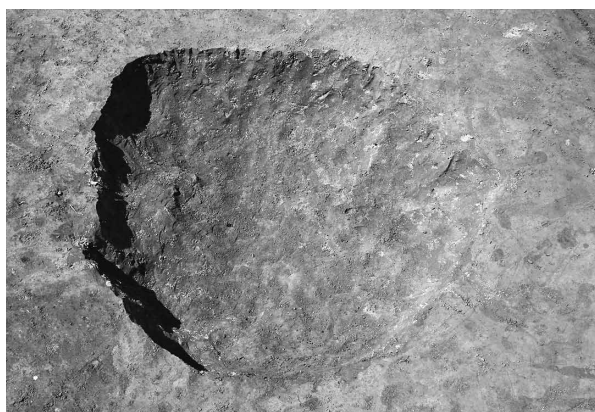
图版 14



第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑



第4号土坑



第5~7号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第11~17号土坑



第18号土坑



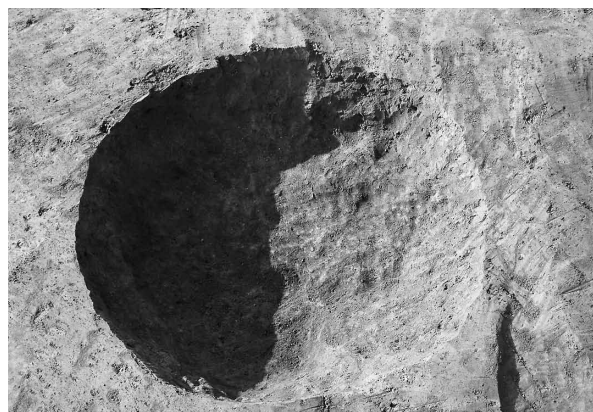
第20号土坑



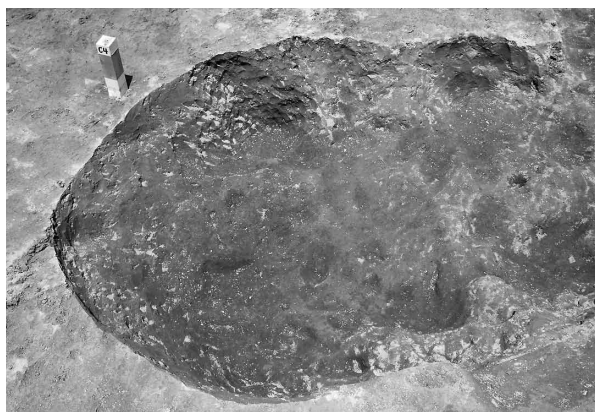
第22号土坑



第23号土坑



第24号土坑



第25号土坑



第27号土坑



第28号土坑



第29号土坑



第31号土坑



第32号土坑



第34号土坑



第35号土坑



第38号土坑



第40号土坑



第41号土坑



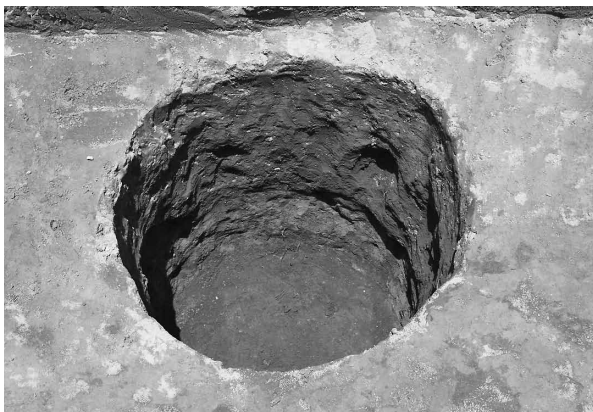
第42号土坑



第43号土坑



第44号土坑



第1号井戸跡



第1号地下式坑



第3号地下式坑



第4号地下式坑

图版 18



第7号住居跡出土遺物 (1)  
(第9图1~6·8~19)



第11·12号住居跡出土遺物 (1)  
(第19图1~6·8·9)



第7号住居跡出土遺物 (2) (第9图7)



第8~10号住居跡出土遺物 (1)  
(第13图1~8·10~24)



第11·12号住居跡出土遺物 (2) (第19图7)



第13·14号住居跡出土遺物 (第25图)



第8~10号住居跡出土遺物 (2) (第13图9)



第 15 号住居跡出土遺物 (1)  
(第 29 图 1·3·7~13)



第 15 号住居跡出土遺物 (4) (第 29 图 5)



第 15 号住居跡出土遺物 (2) (第 29 图 2)



第 15 号住居跡出土遺物 (3) (第 29 图 4)



第 15 号住居跡出土遺物 (5) (第 29 图 6)



第 16 号住居跡出土遺物 (1) (第 35 图 1~5·7~11·17)



第 16 号住居跡出土遺物 (2) (第 35 图 12~16)

图版 20



第16号住居跡出土遺物 (3) (第35图6)



第17号住居跡出土遺物 (1)  
(第39图1~7·9·11·12)



第17号住居跡出土遺物 (2) (第39图8)



第17号住居跡出土遺物 (3) (第39图10)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (1)  
(第45图1~16)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (2)  
(第45图21~39)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (3) (第45图17)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (4) (第45图18)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (5) (第45図19)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (6) (第45図20)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (7)  
(第46図1~3・5~9)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (8) (第46図10)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (9)  
(第46図11~21)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (10) (第46図4)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (11)  
(第47図1~5・7~12)





第1号鍛冶工房跡出土遺物 (12) (第47图6)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (16) (第48图3)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (13)  
(第48图4~6·8~18)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (17) (第48图7)



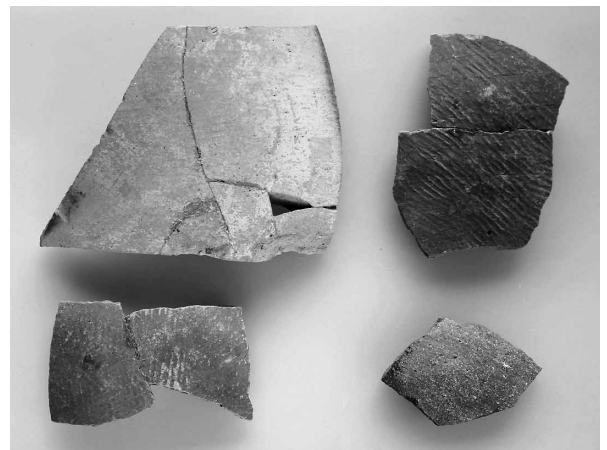
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (18)  
(第49图1~10·12·13)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (14) (第48图1)



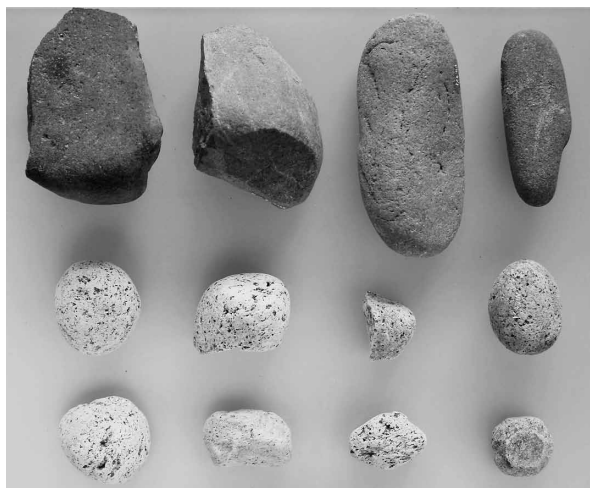
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (15) (第48图2)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (19) (第49图14~17)



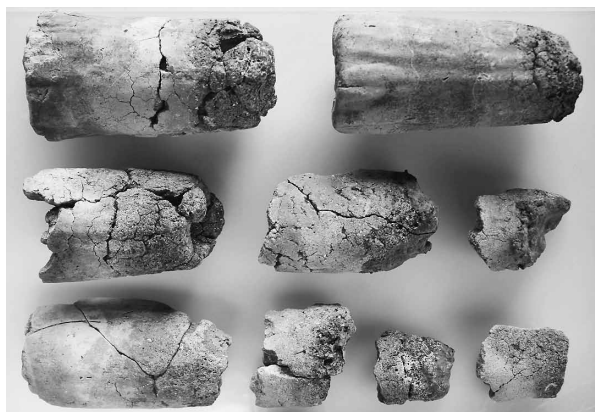
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (20) (第49図11)



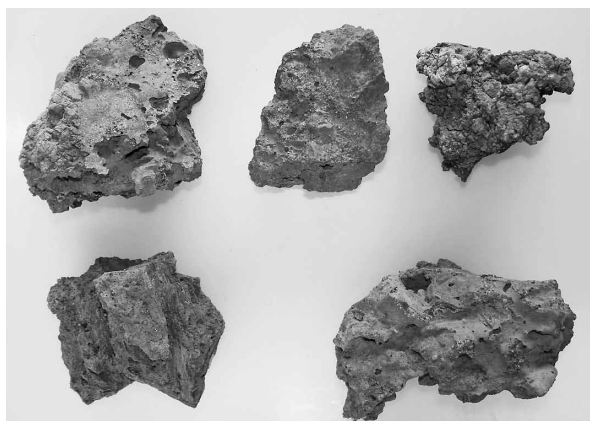
第1号鍛冶工房跡出土遺物 (23) (第51図6~17)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (24) (第52図22~26)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (21) (第50図)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (22) (第51図1~5)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (25)  
(第53図1~11)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (26) (第52图1~21)



第1号鍛冶工房跡出土遺物 (27)  
(第53图12~18)



土坑出土遺物 (2)  
(第58图36)



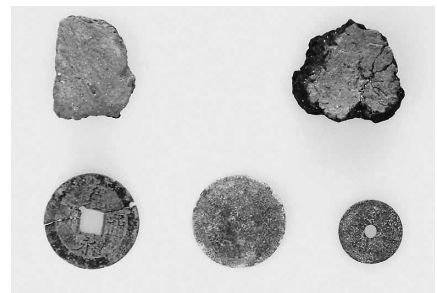
土坑出土遺物 (3) (第59图)



第1号井戸跡出土遺物 (第61图)



土坑出土遺物 (1) (第58图1~35)



地下式坑出土遺物 (第63图)



グリッドピット出土遺物 (第65図)



グリッド出土遺物 (第66図)



第12地点調査区全景



第 17 地点調査区東半部全景



第 17 地点調査区西半部全景



第 12・17 地点出土遺物

## 報告書抄録

ナカヅマイセキ (ダイキュウ・ジュウ・ジュウイチ・ジュウニ・ジュウナナチテン)														
書名	中妻遺跡 (第9・10・11・12・17地点)													
副書名	市内遺跡群発掘調査報告書 XXIII													
シリーズ名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第25集													
編著者名	杉山 和徳													
編集機関	白岡市教育委員会													
所在地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111													
発行年月日	2016 (平成28) 年3月31日													
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因						
		市町村	遺跡	北緯	東経									
中妻遺跡	第9地点 篠津1816-38、 1817-4	11445	022	36° 01′ 40″	139° 39′ 18″	第9地点 20121001 ～ 20121012	第9地点 331.29	第9地点 個人住宅						
	第10地点 篠津1789-1					第10地点 20140421 ～ 20140624			第10地点 1,619.43	第10地点 宅地造成				
	第11地点 篠津1816-2、1817-5					第11地点 20141024					第11地点 100.19	第11地点 個人住宅		
	第12地点 篠津1792-10					第12地点 20150413 ～ 20150427							第12地点 165.3	第12地点 個人住宅
	第17地点 篠津1792-11					第17地点 20150722 ～ 20150731								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項									
中妻遺跡	集落	縄文時代 奈良・平安時代 中・近世	住居跡11軒 鍛冶工房跡1軒 土坑44基 溝跡2条 井戸跡1基 地下式坑4基	縄文土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品・石器・鉄器・鉄滓・銭貨	8世紀前半の鍛冶工房跡を1基検出した。									
<p>遺跡の概要</p> <p>中妻遺跡は白岡市西部の大宮台地白岡支台上に所在する。縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世にわたる複合遺跡である。今調査地点では奈良・平安時代を中心とした遺構・遺物が検出された。住居跡11軒、鍛冶工房跡1軒は、出土した土師器や須恵器の年代観から帰属時期がいずれも8世紀代に位置付けられる。住居跡のカマドの構築部材には、硬砂層由来の砂岩が多く用いられていた。8世紀前半の第1号鍛冶工房跡は、鍛冶炉の構造や出土鉄滓の自然科学分析の結果から、精錬鍛冶を行っていた可能性が高い。</p>														

白岡市埋蔵文化財調査報告書第25集

## 中妻遺跡

(第9・10・11・12・17地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXIII

平成28年3月25日 印刷

平成28年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社